モーラ方言アクセント（京阪式アクセント）・シラビーム性モーラ方言アクセント（東京式アクセント）・シラビーム方言アクセントの分離は、いつ、どのようにして、なぜ生じたか

柳田征司
（国語学研究室）

第一章　東西アクセントの違いは、いつ、どのようにして、なぜ生じたか

第一節　問題の所在と先学の説

一、問題の所在

筆者は、拙著『室町時代語を通して見た日本語音韻史』(注1)において、現代の、東部方言と西部方言とで対立する言語事象のうち、

(1)　音便における違い

①ハ行動詞の音便　東部方言　促音便　西部方言　ウ音便

②形容詞連用形の音便　東部方言　原形　西部方言　ウ音便

(2)　断定の助動詞における違い

東部方言　ダ　西部方言　ジャ

の二類三種の事象について、その違いが、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかについて論じた。更に、上代の東部方言が西部方言と比べて顕著に違っている点が、母音のゆれと打消の助動詞「ナフ」の二点であることを確認して、その違いがなぜ生じたのかについて論じ、その上に立って、現代の東西方言間に認められる、

③打消の助動詞における違い

東部方言　ナイ　西部方言　ン

がどのようにして生じたかについて論じた。東西対立を示す言語事象としては、アクセントにおける違いが大きな問題として残されていることになる。本章は、東西アクセントの違いが、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかについて筆者の考えるところを論じてみようとするものである。

二、先学の説

東西アクセントの違いがどのようにして生じたのかについては次のような説がある。提出された順にかかげる。

○金田一春彦博士説

①東西両アクセントの違いができるまで（文学　一九五四・八、金田一『日本の方言　アクセントの変遷とその実相』（教育出版一九七五・九）に収む）[注2]

②柴田君の「日本語のアクセント体系」を読んで（国語学26　一九五六・一〇、金田一『日本語音韻の研究』（東京堂　一九六七・三）に収む）

③東西両アクセント発生の問題点――都竹・山口両氏の所論を読んで――（国語学58　一九六四・九）

④『日本語の歴史5近代語の流れ』（平凡社　一九六四・一一）

⑤南牟婁アクセントの一例（三重県方言9　一九五九・一〇、『日本の方言』（前出）に収む）

⑥東西方言の違いの成立について（言語生活　一九七一・一〇）

⑦アクセントの分布と変遷（『岩波講座日本語11方言』一九七七・一一）

⑧愛知県アクセントの系譜（国語学懇話会編『国語学論集』1　一九七八・三）

⑨味噌より新しく茶より古い――アクセントから見た日本祖語と字音語――（言語　一九八〇・四）

○馬淵和夫博士説

①日本語の歴史（上代）（解釈と鑑賞　一九六九・一二）

②『国語音韻論』（笠間書院　一九七一・四）

○馬瀬良雄氏説

○東西両方言の対立（『岩波講座日本語11方言』（前出）、馬瀬『言語地理学研究』（桜楓社　一九九二・一一）に収む）[注3]

服部四郎博士説

○日本祖語について21・22（言語　一九七九・一一、一二）

○S・R・ラムゼイ博士説

①The Old Kyoto Dialect and the Historical Development of Japanese Accent (Harvard Journal of Asiatic Studies Vol. 39 No. 1 1979)

②日本語のアクセントの歴史的変化（言語　一九八〇・二）

③Language Change in Japan and the Odyssey of a *Teisetsu* (The Journal of Japanese Studies Vol. 8 No. 1 Winter 1982)

右の諸説をいくつかの観点から整理すると、基層語が関与したと見る説と、基層語の関与を想定しない説とに分かれる。[注4]

- 基層語関与説　馬淵説・馬瀬説
- 基層語不関与説　右以外

次に、京阪式アクセントと東京式アクセントとの先後関係のとらえ方から、基層語不関与説は三つに分かれる。

- 共通祖語から分離したとする説　服部説
- 京阪式アクセントから東京式アクセントが生まれたとする説　金田一説
- 東京式アクセントから京阪式アクセントが生まれたとする説　ラムゼイ説

次に、右の服部説と金田一説とを、東西両アクセントが分離した時期の認定のし方から見ると、次の二つに分けることができる。

- 文献時代以前分離説　服部説
- 院政期以後分離説　金田一説

以下、ハ行四段活用動詞の音便、形容詞連用形の音便、断定の助動詞ジャ・ダ、打消の助動詞ン・ナイ、の東西の違いについての考察を[注5]振り返り、それを踏まえて、先学の説を検討し、筆者の解釈を提出してみたい。

なお、ここでどうしても触れておかなくてはならないことは、現代日本語のアクセントを、京阪式アクセントと東京式アクセント（と、更に一型アクセント）とに大ぐくりに分けてとらえることに対して、その根本のところに疑問が提出されていることについてである。上野善道氏の説かれるところがそれで、例えば次のように述べられている。

○「甲種系」・「乙種系」、「京阪式」・「東京式」、「（アクセントの）系統」といった術語は一体どのような観点からどのように定義された概念なのであろうか。アクセント学界一般に、これらの概念はあまり明確に定義されないままに使われてきたのではあるまいか。その時その時で違った意味に用いられる傾向があり、そのために議論が混乱している場合があると思う。（書評・紹介　金田一春彦著『国語アクセントの史的研究　原理と方法』　塙書房　一九七四　五〇頁）[注6]

○「京阪式」は、系譜の明らかに異なる「真鍋式」と「讃岐式」を含む総称として、更にはもっと多義的な用語としても用いられているので、対になる「東京式」と共に、一切用いないこととする。無用な混乱を避けるためである。同様に、「甲種（系）、乙種（系）」という用語も、明確に定義されない限り有害ですらあるので、やはり用いない。（日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（2）六〇頁）[注7]

○日本語のアクセントの分類のなかで、恐らく最も一般的であり、今日なお国語学の概説書等にも載っている通説は、「京阪式、東京式、一型式」の三類型に分けるものであろう。しかしながら、これは分類基準が明確ではなく、重要なタイプだけを取り上げたものだとしても必ずしも適切なものとは思われない。共時的タイプの分類なのか、歴史的（系譜的）分類なのか、その出発点から分明ではなく、人によって指す内容がかなり異なるからである。「京阪式、東京式」は「甲種、乙種」と言うこともあるが、その関係もまた単純ではない。（日本語のアクセント　一七八頁）[注8]

氏の指摘は重要なものであるが、筆者は、東京アクセント（ならびに甲府アクセント）と京都アクセントとをとりあえず両アクセントの代表として取り上げ、両者の歴史的関係を考察することによって、どこに京阪式アクセントと東京式アクセントとを分かつポイントがあるのかを明らかにするという立場をとりたい。

第二節　音便等における東西の違いから

一、東西方言間に違いが認められる言語事象と母音優位・子音優位という考え方

東西両アクセントの違いは、東西方言間に認められる違いの一つであるから、東西方言間に違いが認められる言語事象全体の中で、統合的に整合性をもって把握されなくてはならない。そこで、既に論じたことのある言語事象を中心に、東西方言間に認められる言葉事象を振り返っておきたい。

東西方言間で違いの認められる言語事象として、表1のような事象が指摘されてきた。[注9] 周知のように、このような東西方言間に認められる違いは、母音優位の西部方言、子音優位の東部方言として把握され、この考え方が今日通説となったかのように思われる。[注10] この説は、母音優位・子音優位という違いを、両方言の性格の違いをとらえたものにとどめないで、東西方言間の違いを生み出した原因として説くことが少なくない。即ち、基層語の関与を想定するものであって、平たく言えば、西部に母音を好む人が住んでおり、東部に子音を好む人が住んでいたために、①から⑨のような違いが生じたとするものである。

（表1）東西方言間に違いが認められる言語事象

言語事象	東部方言	西部方言
①ハ行四段活用動詞音便	促音便	ウ音便
②形容詞連用形音便	原形	ウ音便
③促音化・促音挿入語	多い	少ない
④一音節名詞	短呼	長呼
⑤特殊音節とアクセント	核を担わない	核を担う
⑥母音の無声化	目立つ	目立たない
⑦アクセント	東京式アクセント	京阪式アクセント
⑧動詞命令形	ロ	ヨ∨イ
⑨断定の助動詞	ダ	ジャ∨ヤ
⑩打消の助動詞	ナイ	ン（∨ヌ）

この説は、『万葉集』の東歌・防人歌から、東西方言の対立が古くから存したものと考えた上で、これと、現代方言に認められる東西対立とから、一気に右のような考え方を導き出してきたものである。この説は、現代方言に認められる東西対立が、少し時代をさかのぼって見た時、そこではどのようになっていたのかということを考えてみようとすることを怠っていたのではないかと思われる。筆者は、中世日本語研究を専門とする立場から、この点を考慮し、東西方言の違いが、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかについて、筆者の解釈を述べ、母音優位・子音優位が原因であるとする説の妥当でないことを、①②⑨⑩の言語事象について論じたことがある。[注11] そこでは、論ずべきことが多く、長文となったために、論旨が把握しにくい点もあるかと思われる上に、以下の論述に欠くことができないので、その要点をたどり、そこから確認されることを明確にしたい。

それに先立って、表1に引いた言語事象を母音優位・子音優位という観点から見直しておきたい。結論を表示すると表2のようになると思われる。この表からわかることは、母音優位・子音優位という違いで顕著に対立しているのは、①のハ行動詞の音便のケースだけであるということである。この例は、西部方言がウ音便で、子音を捨てて、母音を残しており、東部方言が促音便で、母音を捨てて、子音を残しているから、母音優位・子音優位で対立していると言ってよさそうである。

しかし、例えば、②の形容詞の音便の場合を見ると、西部方言はウ音便で、子音を捨てて、母音を残しているから、母音優位と認められるが、東部方言は原形のままとどまっているのであるから、厳密には母音優位でも子音優位でもないと言うべきであろう。西部方言と比べると、子音を捨てていないということで、子音優位ととらえられないことはないけ

（表2）東西方言間に違いが認められる言語事象と母音優位・子音優位[注12]

言語事象	東部方言		西部方言	
	母音	子音	母音	子音
①ハ行四段活用動詞音便		＋	＋	
②形容詞連用形音便		＋＋	＋	＋
③促音化・促音挿入語				
④一音節名詞	または－		＋	
⑤特殊音節とアクセント				
長音・i	－			
撥音・促音		－		
⑥母音の無声化	－		－	
⑦アクセント	－			
⑧動詞命令形			＋？	
⑨断定の助動詞			＋？	
⑩打消の助動詞				＋？

れども、①のハ行動詞のケースほど母音優位・子音優位で対立しているとは言えない。次に、④の一音節名詞の長呼と短呼のケースの場合、一音節名詞の長呼と短呼とのいずれを原形と見るか、あるいは両形とももともと存していたと見るかによって違うけれども、長呼が原形、または両形がもともと存していたと見た場合には、西部方言は母音優位でも子音優位でもなく、東部方言は母音劣位とでも呼ぶべきこととなる。逆に、短呼が原形であったと見た場合には、西部方言は母音優位と見られるが、東部方言は母音優位でも子音優位でもないことになる。

あと一々を検討することは、それが目的ではないから省略するけれども、ハ行動詞の音便に認められる東西方言間の違いが、母音優位・子音優位という考え方が生まれて来る上で大きな力となったらしいことは想像にかたくない。

二、東西方言間の違いは、いつ、どのようにして、なぜ生じたか

(一)ハ行動詞の音便に認められる東西方言間の違い

そこで、東西方言間の違いが母音優位・子音優位で最も顕著に対立しているところの、ハ行動詞の音便における東西間の違いが、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかについて、筆者の解釈を述べたい。以下に述べる筆者の考え方が認められるものであるならば、母音優位・子音優位というような、基層語を想定する考え方の妥当でないことが言えたことになると思われる。

先ず、表3によって、東西の文献資料にハ行動詞の音便がどのように現われてくるかを、現代から時代をさかのぼって見てみることにする。現代方言においては、西部方言ウ音便、東部方言促音便で対立しているけれども、時代をさかのぼってみると、東西の対立は違った様相を示している。即ち、例えば、室町時代末期にさかのぼってみると、西部方言

(表3) 時代をさかのぼってハ行動詞の音便の現われ方を見る

時代	東部方言	西部方言
平安・院政・鎌倉時代	(促音便・ウ音便併用)	促音便・ウ音便併用
室町時代末期	促音便・ウ音便併用	ウ音便専用
江戸時代	促音便専用へ移行	ウ音便専用
現代	促音便専用	ウ音便専用

は、キリシタン資料からウ音便専用であったことがわかるが、東部方言資料である洞門抄物には促音便のほかにウ音便が併用されている。東部方言資料における促音便・ウ音便併用は以後江戸時代の間続いている。この東部方言で用いられているウ音便を従来は文化の高い都(西部方言)のことばを借用したものと説明してきた。しかし、筆者は、ハ行動詞の音便の変遷全体を見る時、そして、更に、形容詞連用形の音便のケースを勘案する時は、東部方言においてもウ音便が固有に生まれていたと考えるのが妥当ではないかと考える。

次に、平安・院政・鎌倉時代にさかのぼって、西部方言の資料を見ると、今度は、こちらの資料が、ウ音便だけでなく促音便を併用しているのである。有坂秀世博士は、この西部方言資料に認められる促音便を東部方言の混入したものと説明し、(注13) この考え方に従う者もあるが、西部方言資料に認められる促音便の用例が微々たる例しか見つけられていなかった有坂博士の時点では、そのような説が出て来るのも止むを得なかったものと思われるが、西部方言資料に多量の促音便の例が認められるようになった今日では、東部方言の混入と説明することは不可能である。その用いられ方を見ても、室町時代の漢文訓読では促音便の方を専用している。都で漢文を訓読するのに、東部方言の促音便を借用しなくてはならない理由は到底考えられない。その点から見ても、西部方言におい

ても固有に促音便が生じていたと考えるべきである。ただ、平安・院政・鎌倉時代の西部方言資料に促音便形が認められるといっても、平安・院政時代に限ると、見つかっている例は一〇〇例に届かぬほど例が少ない点が問題となるが、それは促音の表記法が確立していなかったことによるものと考えられる。

次に、平安・院政・鎌倉時代の東部方言資料に目をやると、残念ながら確かな資料が存しない。ただ、東部方言の室町時代・江戸時代が促音便・ウ音便併用であり、平安・院政・鎌倉時代の西部方言が促音便・ウ音便併用であるところからは、鎌倉時代以前の東部方言においても促音便・ウ音便併用であったと推定するのが妥当であると考えられる。

即ち、平安・院政・鎌倉時代までさかのぼると、西部方言と東部方言との間に、ハ行動詞の音便について質的な違いはなかったと推定されるのである。質的なことわるのは、室町時代末期の東西間の違いから見て、促音便とウ音便との勢力関係に何らかの違いがあった可能性はあるからである。

それでは、平安・院政・鎌倉時代から現代までの間に、いつ、どのようにして、なぜ東西方言間に違いが生じたのであろうか。違いが生じた道筋を表4によって時代をくだってたどってみたい。

平安・院政・鎌倉時代から見ると、先ず原形から促音便形が生まれた。この場合、語幹二音節以上の語と語幹一音節の語とでは事情が異なっていた。例えば、語幹二音節以上の語 naraΦite（習ひて）は促音便を起こして naratte となった。ところが、促音便はタ・ラ行動詞に先に起き、

（表4）時代をくだって東西の違いが生じた道筋を追う

時代	語幹2音節以上の語 naraΦite（習ひて）	語幹1音節の語 kaΦite（買ひて）
平安・院政・鎌倉時代	naratte（促音便）→ narauite（ハ行転呼）— naraute（ウ音便）→	katte（促音便）→ kauite（ハ行転呼）— kaute（ウ音便）→
		詞と衝突）
室町末期	促音便・ウ音便併用 naratte, narɔ : te katte, kɔ : te	（促音便・ウ音便併用）
	ウ音便専用 narɔ : te kɔ : te	
現代	促音便専用 naratte katte	促音便・ウ音便分用 narati, naratte ko : ti, ka : te
	ウ音便専用 naro : te ko : te	
	東部方言	西部方言
	沖縄・山陰方言	

ハ行動詞のそれは遅れて生起したものであった（注1拙著）から、語幹一音節語の場合には、先に促音便を起こしていたタ・ラ行動詞の促音便と衝突するために、原形でとどまる傾向が強かったのではないかと考えられる。例えば、「勝ッテ」「刈ッテ」「借ッテ」があるところに、「買ッテ」が生じると衝突するため、「買ヒテ」でとどまる傾向が強かったと見られる。音便生起の初期においては、原形と音便形とが併用されたから、語幹二音節以上の語の場合にも原形が併用されていたが、語幹一音節語の場合には原形でとどまる傾向がそれ以上に強かったものと見られる。

そうしているうちに、原形はいわゆるハ行転呼現象を生じて、例えば、naraute, kaute の形となった。この形からウ音便形 naraute, kaute が生まれたことは言うまでもない。kaute は kauite から音韻変化によって生じたものであるが、タ・ラ行動詞の促音便形と衝突しない形として生み出されたという面もあったものと見られる。このようにして、新しくウ音便形が生じると、これは古い促音便形に次第にとってかわっていったものと思われる。

そうして、先に表3で見たように、室町時代末期においては、西部方言では促音便からウ音便への交替が完了し、ウ音便専用になっていたのであろう。他方、東部方言では、この交替が完了せず、促音便とウ音便とが併用されていたものと見られる。このまま何も起きなければ、東部方言においても、遠からずウ音便を専用する日が来たものと考えられる。

ここに、室町時代末期に、西部方言と東部方言との間にウ音便専用、促音便・ウ音便併用という違いが生じたのは、促音便からウ音便への交替において遅速の差が生じたものと解される。そして、その交替の速度が西部方言において速かったのは、都のことばの方が地方のことばよりも活性化しているからであると考えられる。

このように、東西間の違いは促音便からウ音便への交替において遅速の差があったに過ぎなかったのであるが、ここにオ段長音の開合の混同が生じると、事態は大きくかわることとなった。表5に示したように、オ段長音の開合が区別されている間は、ウ音便形は一応語幹を保持しえていたけれども、開合が混同すると、ウ音便形は語幹が動揺する具合の悪い形となった。このため、東部方言においては、ウ音便形をやめ、併用していたもう一方の促音便形を使うようになり、江戸時代の間を経て、現代語までの間に促音便形専用となった。

ウ音便形が語幹が動揺する具合の悪い形になったという点は西部方言

（表5）オ段長音開合の混同による語幹の動揺[注14]

開合	連用形＋テ	語幹	
区別	narooote sorooote	nara soro	語幹保持
混同	narooote sorooote	nara, naro soro	語幹動揺

においても同じであったが、西部方言においてはウ音便形専用になっていったために、これを捨てるわけにいかず、ウ音便形をいわば我慢して使い続けたものと考えられる。このため、西部方言においては、ハ行四段活用動詞に、語幹が動揺した異形、ヒロウ－ヒラウ（拾）、トウ－タウ（届く）などの語が生じることとなっている。

このように解することの妥当であることは、室町時代末期にウ音便・撥音便併用であったバ・マ行動詞の音便が、江戸時代に入って、ウ音便を捨て、撥音便に回帰していく事実からも認められる。そして、この場合も、ウ音便を比較的遅くまでとどめていたと推定される方言では、語幹の動揺から生じた異形、タタム・タトム（畳）、ナラブ・ナロブ（並）などを生じているのである。

なお、沖縄方言や山陰方言では、表4の下方に示したように、現代東部方言と同じく、一般に促音便を使っているが、タ・ラ行動詞と衝突する語幹一音節語の場合にのみ、ウ音便形（または、その転化形）を用いている。[注15] 今までの考察では、西部方言と東部方言との違いの問題として取りあげてきたのであるが、ハ行動詞の音便の現われ方は、中に位置する西部方言と外に位置する東部方言、沖縄・山陰方言との違いで、日本列島の上にいわゆるＡＢＡ型の分布をしているということになる。このことは、以下に取り上げる諸事象についても一般に認められるところで

ある。

㈡形容詞連用形の音便に認められる東西方言間の違い

形容詞連用形の音便について東西方言間に違いが生じた事情と原因とはハ行動詞の音便の場合によく似ている。即ち、表6に示したように、室町末期においては、西部方言ではウ音便専用になっていたが、東部方言においてはいまだ原形・ウ音便形併用の状態にあった。ここにオ段長音の開合の混同が起きると、ウ音便形は語幹が動揺する具合の悪い形となった。そのため、東部方言においては、ウ音便形を捨てて、併用していた原形の方を用いるようになり、江戸時代の間を経て、原形に回帰した。しかし、現代東部方言でも「ゴザイマス」「存ジマス」に続く場合にだけ、ウ音便形を残している。ウ音便形がこの形に残存しているのは、ウ音便形が上品でものやわらかなひびきをもつ形であったために、丁寧体のこの言い方によくあった上に、「〜クゴザイマス」では、同一調音点・調音法の音が連続するために原形にもどりにくかったものと考えられる。ウ音便形が語幹の動揺する具合の悪い形になったことは西部方言においても同じであったが、西部方言ではこれを専用していたために捨てることができなかったのである。西部方言のある方言では、ウ音便形を、例えば、アコ（赤）ナル・ウレシュ（嬉）ナルからアカナル・ウレシナルにかえることによって、語幹保持をはかっている。なお、沖縄方言では、形容詞連用形に原形を用いており、[注16]この場合においても、外の東部方言に共通している。

（表6）形容詞連用形音便の東西の違いの成立

時代	東部方言	西部方言
平安・院政・鎌倉時代	原形・ウ音便併用	原形・ウ音便併用
室町時代末期	原形・ウ音便併用	ウ音便専用
現代	原形専用（例外〜ゴザイマス）	ウ音便専用

㈢断定の助動詞ジャ・ダの違い

断定の助動詞のジャ・ダ二形が、「デアル」の「ル」が落ちた「デア」から出たものであることは言うまでもない。従来は、「ヂャ」を西部方言で生まれた形、「ダ」を東部方言で生まれた形ととらえ、なぜ方言によって異なる形が生じたのかを、アクセントの違いやa母音の広狭の違いなどで説明しようとしてきた。しかし、室町時代ならびに江戸時代の東部方言資料には「ダ」とともに「ヂャ（ジャ）」が用いられており、他方、室町時代の京畿の抄物には「ヂャ」とともに稀に「ダ」の例が散見していることが知られていた。ところが、希頊周瑞という禅僧が寛正六年（一四六五年）に京都三条六角で講義した『論語講義筆記』には「ヂャ」とともに「ダ」が多用されており、古くは京都においても、「ダ」が行われていたことが明らかになってきた。同じ方言で「デア」から二形が生じているのは、「デ」に口蓋化が起きていない形deから生まれた形が「ダ」で、後になって口蓋化が起きたdieから生まれた形がdia[注17]なのであった。それは、「テオル」が転じた形に、「トル」「ドル」（降ットル、読ンドル）の形と「チョル」「ジョル」（降ッチョル、読ンジョル）の形とが、方言に分布しているのに似ている。口蓋化したtieから早く生まれた形が後者であり、非口蓋音にもどったteから生まれた形が前者であった。完了の助動詞、「タル＞タ」が、「テアル」から転じて、「タル」の「タ」の形しかもたず、[注18]「チャル」「チャ」の形をもたないのは、この変化が、「テ」に口蓋化が生じるようになる時代よりも古い時期に変化を終えていたからである。要するに、「ダ」が古く生じ、新しく「ヂャ」が生じたのであって、両形は西部方言においても東部方言において

も生じていたものと見られる。

西部方言と東部方言との間に違いを生じてくるのは、「ダ」から「ヂャ」へと交替していく過程で、「ヂ」に di > dʒi と、破擦音化が起きたためと考えられる。東部方言においては、「ダ」「ヂャ」が併用されている時代に「ヂ」に破擦音化が起きたため、破擦音化した「ヂャ」(dʒa) よりも、「ダ」の方が語幹を保持できるために、「ダ」の方が用いられることとなった。室町時代の断定の助動詞の活用形は表7のようになっており、活用形はいずれもd形で保たれていた。西部方言においても、「ヂ」に破擦音化が起きたが、それが起きた時、西部方言では「ダ」から「ヂャ」への交替がほぼ完了していたために、「ヂャ」を使い続けるしかなかったものと見られる。そのようにして、西部方言と東部方言との間に、違いを生じることとなった。右の経過を簡単に表示すると、表8のようになる。

なお、この場合にも山陰方言と熊本方言とにおいて、東部方言と同じく古い「ダ」の方が用いられている点が注目される。(注19)

(表7) 断定の助動詞の各活用形の形

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
デアラ	デアッ	デアル ヂャ(ジャ)	デアル ヂャ(ジャ)・ ヂャル(ジャル)	デアレ	デアレ

(表8) ジャ・ダの東西の違いの成立

時代	東部方言	西部方言
破擦音化が起きる前	ダ・ヂャ併用	ダ・ヂャ併用
破擦音化が起きた時	ダ・ヂャ併用	ヂャ専用
現代	ダ専用	ジャ専用

㈣打消の助動詞ン・ナイの違い

現代東部方言で用いられる打消の助動詞「ナイ」が『万葉集』東歌・防人歌に見える「ナフ」の遥かな後裔であることは間違いない。しかし、その「ナフ」について注意しなくてはならないことは、打消の助動詞が上代において、西部方言「ズ・ヌ」、東部方言「ナフ」と対立していたわけではないということである。東部方言においても打消の助動詞は「ズ・ヌ」であって、「ナフ」は打消の継続の意を明確に表現するためのものであったということである。そのことは、東歌・防人歌に用いられた「ズ・ヌ」と「ナフ」とを比較してみると明らかになる。打消の助動詞は古くナ行に活用する語で、その未然形に「ナ」が行われており、これに継続の意を表わす「フ」がついた形が「ナフ」であった。西部方言では、ナ行に活用する語形が次第に衰退し、「ニス」から生まれた(注20)「ズ」の語形に早く移行したために、打消の「ナフ」を生み出すことがなかったのであろう。西部方言では、古く「ズ+アリ」の「ザリ」によって打消の継続を表わしていた。打消表現は本来継続の意を含むために、やがて「ナフ」「ザリ」は、継続の意が明確でなくなり、それぞれ単なる打消の意で用いられるようになっていった。中古・中世の間における「ナフ」の動静は資料がないため明らかでないが、その連用・連体・已然形に用いられた「ナヘ」のハ行転呼音形「ナェ」から転じた「ナエ」(naje) が、中世に生じた音転化の動きと、形容詞「ナイ」への類推によって「ナイ」形となったものと見られる。文献資料によって確認しうるのは、ロドリゲス日本大文典であって、室町時代末期の東国で「ナイ」が行われていたことを知る。しかし、江戸時代に入っても、東国でも「ヌ」も併用されていた。東部方言の「ナイ」は、その淵源は上代に

さかのぼるけれども、中世に入って、naie ＞ nai の音韻変化と、形容詞の活用に類推して「ナイ」形を生んではじめて、「ヌ（ン）」に対抗しうる存在になったはずで、東西対立が明確になってきたのは中世以後のことと見られる。

㈤命令形ヨ・ロの違い

東西方言間に認められる命令形のヨとロとの違いは、早く上代に存したものとされている。[注2] それが正しいならば、その淵源は古いことになる。しかし、東歌・防人歌には～ロ形とともに～ヨ形も用いられていることは看過してはならない。

為ろ　（一四・三五一七）
為よ　（一四・三四九一、二〇・四四〇五）
せ　（一四・三三六九、一四・三四八四）
寝ろ　（一四・三四九九）
付けろ（二〇・四四二〇）

上代東部方言の「ロ」が現代方言につながるものとして、西部方言ヨ、東部方言ヨ・ロの違いがどのようにして、なぜ生じたのかについてはいまだ説得的な説明がなされていない。筆者もいまだこの問題を解くことができないでいる。

㈥促音化・促音挿入語

以上のように見て来ると、東西方言間の違いに基層語がかかわったとは考えられず、従って、西部に母音を好む人が住んでおり、東部に子音を好む人が住んでいたとは考えられないのである。ハ行動詞の音便の場合が西部方言母音優位、東部方言子音優位で最も顕著に対立している事象であるが、そのような対立が生じたのは新しいことであって、もとは、西部方言でも東部方言でも促音便とウ音便とがともに生じており、それが江戸時代に入って、西部方言ウ音便、東部方言促音便という別の道を歩まざるを得なくなったものと見られるのである。

しかし、右のように解して、母音優位、子音優位の問題で残るのは、現代東部方言に促音化や促音挿入語が多いことである。オッカナイ（＜オホケナシ）、オトッツアン（＜オトウサン）、ショッパイ（＜シホハユシ）ウッチャル（＜ウチヤル）等々の促音化・促音挿入形が注目されてきた。筆者は、これは、東部方言の人たちが子音を好んでいるのではなく、促音を好んでいるのだと考える。そして、東部の人が促音を好むのは、古くからのことではなく、江戸時代以降のことであると推定する。先ず資料について見ると、室町時代の京畿で成立した抄物と、東国系抄物とについて、促音化・促音挿入語を比べてみると、その間に違いは全く認められないのである。資料からすると、東部方言の人たちが促音を好むようになるのは江戸時代以降のことと見られるのである。そこで東部方言におけるハ行動詞の音便の変遷を振り返ってみると、東部方言においては、オ段長音の開合が混同したため、江戸時代以降、ハ行動詞のウ音便をやめて、促音便に改めていかなくてはならなかったことが注目される。このウ音便を捨てて、促音便に切りかえていった動きが、東部方言の人たちに、長音形を促音形に改めさせることとなり、「オオケナイ」「オトウサン」から「オッカナイ」「オトッツアン」を生み出させ、更には、促音を多用するようにさせたものと解される。

三、右の考察から確認されること

以上、アクセントにかかわる東西方言間の違い④⑤⑥⑦を除いて、音便にかかわる違い①②③とその他の違い⑧⑨⑩が、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかについて、筆者の解釈を述べてきた。⑧の命令形の

ヨ・ロの違いについていまだ解釈を与え得ないことが心残りであるが、以上考察してきたところから、筆者は次の四つのことを確認しておきたいと思う。

第一は、東西方言の違いは、ある特定の原因があって生じたものであるということである。ある特定の時期にある特定の原因があって、二つの方言は別の道を歩まざるを得なくなったということである。①のハ行動詞の音便における違いは、西部と東部との間に、ウ音便専用、促音便・ウ音便併用という、交替の遅速による状態の違いがあるところに、オ段長音の開合の混同が生じたために、生起したものと考えられた。②の形容詞の音便における違いも、西部と東部との間に、ウ音便専用、原形・ウ音便形併用という、音便進行の遅速による状態の違いがあるところに、オ段長音の開合の混同が生じたために、生起したものと考えられた。③の東部方言が促音化・促音挿入語を多用する傾向は、①のハ行動詞の音便において、江戸時代以後、東部方言において、ウ音便を捨てて促音便にかえていく動きが原因となって、生じたものと解された。⑨の断定の助動詞における違いは、ヂに破擦音化が起きたことが原因で、それが起きた時、東部方言ではダとヂャとを併用していたためにダを選ぶこととなり、西部方言ではヂャ専用になっていたためにヂャで我慢するしかなかったものと考えられた。⑩の打消の助動詞における違いの、遠因は、東部方言において打消の助動詞の未然形「ナ」がおそくまで生き続けていたことにあるが、それに継続の「フ」がついた「ナフ」が、中世に入って、音韻変化と形容詞の活用にひかれたこととによって、「ナイ」形となったことが、優勢であった「ン」をおさえて、打消の助動詞の位置を占めることになった原因と考えられる。

第二に確認したいことは、東西方言間の違いがどのようにして、なぜ生じたかを右のように説明することが認められるならば、基層語の関与を想定する考え方、即ち、西の人が母音を好み、東の人が子音を好むという考え方は妥当でないということである。ことわるまでもないことながら、ここで、念のためにことわっておきたいことは、こう言う時、筆者が、日本列島の上に住した民族が歴史を通じて単一であったということを主張しようとしているのではないということである。日本列島の上に、北方系の人と南方系の人とが住し、混じていったとしても、言語の上にその影響は認められないということである。(注22)

第三に確認したいことは、東西方言の違いが生じた時期は比較的新しいということである。①のハ行動詞の音便、②の形容詞の音便、③の促音化・促音挿入語における違いは、オ段長音の開合の混同の時期、即ち、江戸時代に入って生じたものと考えられる。⑨の断定の助動詞における違いは、ヂの破擦音化の時期、即ち室町時代後期に生じたものと考えられる。⑩の打消の助動詞の違いは、遠因は上代に存するけれども、東部方言において「ナイ」が「ン」よりも優勢になるのは、形容詞の活用が口語文法の活用をするようになった後のことであり、aie > ai の音韻変化が盛んになって以後のことであると考えられるので、中世以降のことと考えられる。⑧の動詞の命令形のヨ・ロだけが上代から存した違いということになる。

第四に確認したいことは、古い形をもつ方言が、新しい形をもつ方言のあとを追って、いつの日か新しい形をもつようになるのではないということである。ハ行動詞の音便について言えば、促音便が早く成立した古い形、ウ音便がおくれて成立した新しい形であるから、西部方言が新しい形を用い、東部方言が古い形を用いていることにある。しかし、東西両方言は、促音便からウ音便への交替の動きに遅速の差を生じているところに、オ段長音の開合の混同が生じたために、異なる道を歩まざるを得ず、違いが生じたものであった。従って、古い形を、用いることに

なった東部方言が、いつの日か新しい形を用いるようになるということはないのである。古い方言、新しい方言と言うと、古い方がいつか遅れて新しい形になるように錯覚されるが、それは、二つの方言が、同じ方向に変化の道を前後して歩んでいる場合に言えることであって、今の場合は、西部方言が新しいウ音便形を使い続けざるを得なかったのであり、東部方言が古い促音便形を専用せざるを得なかったのであって、東部方言がいつの日かウ音便形になるということはないのである。今後、もしこの音便の対立に変化があるとすれば、それは共通語としての東部方言の影響が強くなり、西部方言がいつの日かウ音便形を捨てて促音便形になることであろう。国語教育における共通語教育が進んでおり、マスコミの発達がいちじるしい現代においては、そのような影響関係による、外部要因による変化が生じることは考えられるところである。しかし、今のケースの場合、古い形を用いている方言が、内的変化によっていつの日か新しい形を用いるようになるということはないと考えられる。

第三節　先学の説に対する批判

一、基層語説――馬淵博士説・馬瀬氏説

東西両アクセントの違いが生じた原因を基層語の関与を求める説としては、既にあげたように馬淵博士説と馬瀬氏説とがある。その主張するところをここに具体的に引くことは省略するが、いずれも、東西両アクセントの違いを、基層語によって説明しようとするものである。しかしながら、右に見て来たように、東西間に違いの認められる言語事象①②③⑨⑩に関しては、その生起に基層語はかかわっていないと考えられる。従って、アクセントにおける東西の違いも基層化が関与したとは考えられない。この方向の考察は有効でないと筆者は考える。[注23] 服部四郎博士が指摘されたように、[注24]「言語の研究は一応あくまで自律的に行わるべきであり、それ自身の基準に従って蓋然性の大小を考察すべきである。そして、その考察が他の諸科学の研究結果と矛盾しないかどうかを検討すべきである。後者にひかれて、言語そのものの研究における判断を誤ってはならない」ものと思われる。

二、文献時代前分離説――服部博士説

㈠服部四郎博士説

服部四郎博士は、東西両アクセントを、約二〇〇〇年の昔に北九州で話されていた日本祖語から二つに分かれたものであると推定された。

博士は、はじめ、「原始日本語のアクセント」（『国語アクセント論叢』法政大学出版会　一九五一・一二）において、東京式アクセントと『類聚名義抄』のアクセント（京都式系アクセント）とが、原始日本語から二つに分かれ出たものであると見て、そこから「無理なく説明できる」[注25]「原始日本語」のアクセントを推定された。

しかし、「日本祖語について21・22」（言語　一九七九・一一、一二）になると、「原始日本語」のアクセントについての先の説を廃棄して、沖縄方言に存する長音に注目し、日本祖語のアクセント体系として異なるアクセント体系を想定された。[注26] 金田一博士が指摘されているところであるが、服部博士の説の特徴は、次の二つの考え方にあると見られる。

1、東西両アクセント体系が激しく相違対立する二つの体系であるという考えに立って、東西両アクセントが、約二〇〇〇年前の日本祖語から二つに分かれたものと考えられたこと

2、沖縄方言を、日本祖語に近い姿を伝える方言と見て、日本祖語の推定に沖縄方言を重視し、そこから、日本祖語に多量の長母音が存したと推定されたこと

服部博士によれば、日本祖語のアクセント体系は、二音節名詞について

見ると、次のようであったという。

以上の諸点を考慮に入れるならば、日本祖語の2音節名詞には『類聚名義抄』の5類の区別に対応する5種のアクセントの区別があった、とせざるを得ないと思う。それではそのおのおのは、どのようなアクセントだったであろうか。日本語諸方言のすべてについて精密な研究を行なった上でないと、明確なことは言えないが、さしあたり次の想定を公にしておこう。

「第一類」と「第二類」は高く始まり、「第三類」「第四類」「第五類」は低く始まるアクセントであったであろう。「第四・五類の(1)」の全部および「同じく(2)」の一部分の単語の第1音節母音、さらに「第三類」の大部分の単語の第2音節母音は長くかつ低く始まったので、そこに〝アクセントの山〟ができる可能性はどの方言でも持っていた。故に「甲種アクセント」の四周の方々の「乙種アクセント」の諸方言で、そういう変化が独立に起こったとしても不自然ではない（琉球諸方言の状態参照）。ただし、これらの乙種アクセント方言で「第三類ノ(1)」が他の「第三類一般」に合流し、「第四・五類ノ(2)」が「第四・五類ノ(1)」に合流した――と言われている――のは、この両群の間にアクセントの相違があり、おのおのの群の中には類似点があったからであろう。一方、「第一類」と「第二類」とは高く始まるという点が共通していたので、琉球諸方言、九州方言の一部、東北方言の一部、島根方言の一部などで、両者が合流したのであろう。そして、「第二類」の第2音節の母音は恐らく長くかつ低く始まったために、「乙種アクセント」（の一部）でここに〝ア

（表9）日本語祖語のアクセントの推定（服部博士説、金田一博士再構、原表横組み）

類語	語例	私見	音調	分類	語音上の制限	第1音節の音調	第2音節の音調	推定される具象的な音調
1	鼻。風。	服部博士のお考え	カ\ゼ	全	なし	高く始まる	〔高く始まる〕	カ\ゼ カ/ゼ？ 両音節とも長いことも
2	牙。		オ\ト	(1) ほとんど		長い	長い	キ\バー キ\バー？
	音。橋。					〔短い〕		オ\トー オ/トー？
3	甕。蚤。		ヤ\マ	(1) 一般		長い	低く始まる	カ\めー カ\めー？
	花。山。					〔短い〕	長い	ヤ\マー ヤ\マー？ ヤ\マー？
4	舟。中。		ナ\カ	(1)		長い		ナ\カー ナ\カー？ 第2音節長いことも
	笠。			(2)	aで終る			カ\サー カ\サー？
	鑿。粕。				a以外で終る	〔短い〕	長い？	ノ\ミー？
5	声。蔭。		カ/ゲ	(1)	なし	長い		コ\ーる コ\ーる？ コ\ーる/ コ\ーる？ 第2音節長いことも
	(鮒？)			(2)	aで終る			(フ\ーナー) (フ\ーナー)？ (フ\ーナー)？
	汗。雨。				a以外で終る	〔短い〕	長い？	アめー アめー？ アめー？

東西両アクセントの分離について

クセントの山〟ができたのではないか。（こういう変化が起こり得ることについては、徳之島亀津方言の第三表の単語を比較）。（日本祖語について22　一一〇頁）

金田一博士によれば、服部博士の想定されている日本祖語における二音節名詞のアクセント体系は表9のようになるのではないかという。[注27] 多量の長母音が想定されているのである。

㈡服部博士説の問題点

右に服部説の特徴を二点にまとめたが、この説の問題点も、この二点にあると思われる。

第一の点については、漢語のアクセントに注目して東西アクセント分離の時期を推定された金田一・奥村三雄両博士の説があって、その分離の時期の新しいことが論じられている。[注28] 筆者が第一節で確認した第三の点からも東西アクセントの違いが生じた時期を新しいと見る説が妥当であると思われる。

次に2については、金田一博士によって、沖縄方言に認められる多量の長音を九州方言に連続するものとして、新しく生じたものと見る説が提出されており、[注29] 平山輝男博士もこれを支持されている。[注30] 筆者も注1旧稿において金田一博士説につくべきことを論じた。金田一博士のこの論の背後には、博士の、沖縄方言を日本祖語の姿をとどめる古い方言とは見ない考え方があると見られるが、筆者も拙著『室町時代語を通して見た日本語音韻史』において、沖縄方言のハ行音のP音も三母音化傾向も、京畿の中世語の状態から生じたものと認めた。現代沖縄方言に認められる長音は、日本祖語の姿をとどめるものとは見ない方がよいと思われるのである。

三、東京式アクセント祖形説――ラムゼイ博士説

この説は、『類聚名義抄』に記録された声点、平声と上声とを、定説とは逆に前者を高いピッチを表わすもの、後者を低いピッチを表わすものと解して、『類聚名義抄』に記録されているアクセントを東京式アクセントのようなものであったとするものである。[注31] この説が全く成り立ち得ないことは、『日本書紀』から推定される奈良時代の大和のアクセントが京阪式アクセント系のものであること[注33]一点をとってみても明白である。『類聚名義抄』の声点、平声・上声の調値は金田一春彦博士が推定されたように、[注34] 前者低・後者高と解すべきものである。

なお、ラムゼイ説の発想の根底には、金田一博士の京阪式アクセントが古いとする説に対して、新しい東京式アクセントへの変化が、東西に分かれていくつもの地域で、互いに関係なく起こったのは不自然であるとする考えがある。しかし、これが不自然でないことは次節金田一博士説のところで述べる通りである。

四、院政時代以後京阪式アクセント祖形説――金田一博士説

㈠金田一博士説

第二節三で確認した四つの点を踏まえて、第三節一では基層語の関与を想定する説の妥当でないことを論じ、二では文献時代前分離説の妥当でないことを論じ、三では東京式アクセント祖形説の妥当でないことを論じた。このように見てくると、基層語の関与を想定せず、分離の時期を比較的新しいものと見ておられる金田一博士説が、最も蓋然性の高い説と見られるのであって、研究はその方向で進められなくてはならないと考えられる。

金田一博士の説は、東京式アクセントが院政時代以後の京阪式アクセントから生じたとするもので、[注35] 起きた変化を表10のように整理できるも

（表10）東西アクセントの型の対応表（金田一博士）

	東西両方言の対応関係（和歌山）（甲府）	語彙	名義抄のアクセント	補忘記のアクセント
(1)	●●－○●	第一類2拍名詞　例「竹」 第一類2拍動詞の連体形　例「置く」 第一類1拍名詞　＋“が”“は”　例「蚊が」	上上（●●）	徴徴（●●）
(2)	●○－○●	第一類1拍名詞　＋“も”“へ”　例「蚊も」 第二類1拍名詞　＋1拍助詞　例「葉が」 第一類一段2拍動詞　＋“て”　例「寝て」	上平（●○）	徴角（●○）
(3)	●○－○●’	第二類2拍名詞　例「音」 第一類2拍動詞の命令形　例「置け」	上平（●○）	徴角（●○）
		第三類2拍名詞　例「花」	平平	徴角（●○）
(4)	○●－●○	第四類2拍名詞　例「笠」 第二類2拍動詞の連体形　例「書く」 「よい」類2拍形容詞の連体形　例「よい」 第三類1拍名詞　＋“が”“は”　例「手が」	平上（○●）	角徴（○●）
(5)	○●’－●○	第五類2拍名詞　例「雨」 第二類2拍動詞の命令法　例「書け」	平上（○●）	角徴（○●）
(6)	●●●－○●●	「形」類3拍名詞　例「形」 第一類3拍動詞の連体形　例「上る」 第一類2拍名詞　＋“が”“は”　例「竹が」 第一類1拍名詞　＋“から”　例「蚊から」	上上上（●●●）	徴徴徴（●●●）
(7)	●●○－○●●	第一類3拍形容詞の連体形　例「赤い」 同形容詞の副詞形　例「赤く」 第一類2拍名詞　＋“も”“へ”　例「竹へ」	上上平（●●○）	徴徴角（●●○）
(8)	●●○－○●●	「小豆」類3拍名詞　例「小豆」 第一類四段3拍動詞の命令形　例「当たれ」 第一類3拍形容詞の終止形　例「赤い」	上上平（●●○）	徴徴角（●●○）
		「頭」類3拍名詞　例「頭」	平平平（○○○）	徴徴角（●●○）
(9)	●○○－○●○	「二十歳」類3拍名詞　例「二十歳」 第二類2拍名詞　＋1拍助詞　例「音が」 第一類2拍動詞　＋“な”“ば”　例「置けば」 第一類1拍名詞　＋“より”“まで”　例「蚊より」 第二類1拍名詞　＋2拍助詞　例「葉さえ」	上平平（●○○） 上平上（●○●）	徴角角（●○○）
		「命」類3拍名詞　例「命」 第二類3拍動詞の連体形　例「動く」 第二類3拍形容詞の連体形　例「白い」 第三類2拍名詞　＋“が”“は”　例「花が」	平平上（○○●）	徴角角（●○○）
(10)	○○●－●○○	「兎」類3拍名詞　例「兎」 「歩く」類3拍動詞の連体形　例「歩く」 第四類2拍名詞　＋“が”“は”　例「笠が」 第三類1拍名詞　＋“から”　例「手から」	平上上（○●●）	角徴徴（○●●）
(11)	○●○－●○○	「兜」類3拍名詞　例「兜」 第二類3拍形容詞の副詞形　例「白く」 第二類一段3拍動詞　＋“て”　例「掛けて」 第二類四段2拍動詞　＋“ば”　例「書けば」 第五類2拍名詞　＋“が”“は”　例「雨が」 第四類2拍名詞　＋“も”“へ”　例「笠も」	平上平（○●○）	角徴角（○●○）
(12)	●　○－●　○	「よい」類2拍形容詞の副詞形　例「よく」 第二類一段2拍動詞　＋“て”　例「見て」	去　平（○●○）	徴　角（●　○）

（備考）　(2)と(7)は文末に立たぬ語。(3)と(8)は文末に立ちうる語。(4)と(5)は『名義抄』時代ある種の助詞が付いた場合，差異の有無未詳。(10)の語彙のうち，「兎」類3拍名詞は甲府で○●●型のことが多い。(12)の語類は，『名義抄』時代は3拍語であった。

のとされた。なお、『日本の方言』の補注では、下降調に関して、次の補訂を加えられた。

(4)(5)の語彙の間には、○●▼型　対　○◒▼型という別があった。

(8)の語彙のうち「赤い」の連体形は●●◒型で、それが室町時代までの間に●●○型に合流した。(9)の「白い」の連体形は○○◒型であった。(11)の「雨が」は○◒●型であったらしい。「掛けて」もそうであったかもしれない。(13)の語は◒○型とすべきだった。

下降調・上昇調を加えた表は『日本語の歴史5』に示されている。なお、博士は、東京式アクセントを内輪東京式アクセント・中輪東京式アクセント・外輪東京式アクセントに分けられるが、東西アクセントの分離の具体については、主として中輪東京式アクセントに属する甲府アクセントと東京アクセントを対象に論を展開されているので、以下においても中輪東京式アクセントについて考えて行く。

博士は表10のような変化を生じさせた力を次のように説明された。

(1)(6)　第一拍から高く発音することは労力を伴うので、語頭が低下した。

(2)(3)(7)(8)(9)　高い発音は労力を伴うので、アクセントの山が後退した。

(4)(5)(10)(11)　一旦、一種の労力の節約を図って、直前の拍（の高さ）に同化（○●→○○、○○●→○○○、○●○→○○●）した後、明晰な発音をしようとして、語頭が隆起した（○○→●○、○○○→●○○、○○●→●○●→●○○）。[注36]

この語頭が隆起する形は、その語が複合語の後部要素に立った場合に、前部要素からの続きで生じやすい形でもあった。第一章第一節掲出金田一論文②（『日本語音韻の研究』三二七頁）・④（一四六頁）・⑤（『日本の方言』一二六頁）では、三重県南牟婁郡阿田和町[注37]の方言の例をとって、複合語においてアクセントのタキが一音節後へすべっていることの方を重視され、京阪式アクセントのタキが規則的に一音節ずつ後へすべったのが東京式アクセントであると位置づけられた。

コノ　コンナ　　ソラ（空）　ハシ（箸）
コノソラ　コンナハシ

(二)金田一博士説の問題点

1、先学の批判

(1)、アクセント変化の法則

金田一博士の説に対する批判としては、次のものが管見に入った。

都竹通年雄「標準語確立のために」（国語学会編『方言学概説』武蔵野書院　一九六二・一一）四〇二頁。

山口幸洋「能登のアクセント」（国語学56　一九六四・三）

馬淵和夫「上代」（前掲）

馬淵和夫『日本語音韻論』（前掲）

都竹通年雄「東西方言の違いはどうしてできたか」（前掲）

徳川宗賢「方言地理学と比較方言学」（学習院大学国語国文学会誌17　一九七四・四）（徳川『方言地理学の展開』[注38]（ひつじ書房　一九九三・一〇）に収める）

これらの批判に対しては、金田一博士に次の反論がある。

金田一春彦「東西両アクセント発生の問題点――都竹・山口両氏の所論を読んで――」（前掲、都竹'62・山口両論文に対する反論）

金田一春彦「東西方言の違いの成立について」（前掲、都竹'71に対

する反論）

筆者の見るところ、本質にかかわる批判は、金田一博士の提示されたアクセント変化の法則そのものとその適用のしかたとに対する、徳川氏の批判ではないかと思われる。

徳川氏は、前掲論文において、金田一博士の論文、

比較方言学と方言地理学（国語と国文学　一九七三・六）

隠岐アクセントの系譜――比較方言学の実演の一例として（服部四郎先生退官記念論文集『現代言語学』　一九七二・三）、『日本の方言』に収める）

を検討されたが、その中に、金田一博士が東西両アクセントの違いが生じた経緯を説明するのに用いられたアクセント変化の法則についての批判が含まれている。

先ず、右の二論文において金田一博士が説かれているアクセント変化の法則のうち、東西両アクセントの違いの生起に直接かかわる部分を見ておくと次の通りである。徳川氏にならって重複をいとわず、二論文から引く。

〔3〕アクセントの規則的変化は、発音の困難な型から発音の容易な型へという方向で行われる（＝発音容易化の法則）。すなわち

(1)一つの型の一つの拍の高さは直前の拍と同じ高さになろうとする（＝同化の法則）。(2)語頭に高の拍が続く場合、最初の高は低になろうとする（＝語頭低下の法則）。(3)一つの型のタキは後の拍に移ろうとする（＝タキ後退の法則）。(4)下降調の拍は高平調の拍になろうとし、上昇調の拍は低平調の拍になろうとする（＝平調化の法則）。

〔法則3〕一群の語彙に関して、甲方言と乙方言との間に次のような対立が見られる場合、その語群に関しては甲方言の方が古い姿、乙方言の方が新しい姿であると解せられる。(1)甲方言では一つの拍が高、次の拍が低になっているのに対して（あるいは低高になっているのに対して）、乙方言ではその拍も次の拍も高（その拍も次の拍も低）になっている場合。（＝高さの同化の法則）　(2)甲方言で第一拍が高、第二拍も高である語彙が、乙方言で第一拍が低、第二拍が高である場合。（＝語頭低下の法則）　(3)乙方言の方が甲方言よりもアクセントの山が一つあとの拍にある場合。（＝アクセントの山後退の法則）

〔4〕アクセントの型は、有坂博士のいわれる統成的機能がよく発揮される型へという方向に変化する。すなわち、(1)語頭に低の拍が続く場合、最後の低を除き高に変化しようとする（＝語頭隆起の法則）。(2)一つの型に二つの山がある場合、後の山は消滅しようとする（＝山の一元化の法則）。(3)語頭のタキ、語末のタキは消失しようとする（＝タキ消失の法則）。

〔法則4〕一群の語に関して甲方言と乙方言との間に次のような対立が見られる場合、その語のアクセントに関して甲方言の方が古い姿、乙方言の方が新しい姿であると解せられる。(1)甲方言低低…型、低低低…型である語彙が、乙方言で高低…型、高低低…型、高高低…型などになっている場合。（＝語頭隆起の法則）　(2)甲方言では二か所に山がある場合に、乙方言ではそのうち一方しかない場合。（＝山の一元化の法則）　この場合、後の山の方が消えるのが定石である。(3)甲・乙両方言とも同じ音調をもつが、甲方言では語頭または語尾に滝があり、乙方言では滝を欠く場合。（＝滝消失の法則）。

この法則に対して、徳川氏は、先ず次のように述べられている。

以上の内容については、すでに触れたようにその輪郭が『方言学

概説』50ページに便利な図表として出ていて、私も利用させてもらうことがあるが、いまこの通則一般について、ほとんど意見を述べることができないのは残念である。金田一氏の学殖を信頼するというほかにいたしかたがない。真の批評ができるのは、アクセント史全般と、全国方言アクセントについて広くまた詳しい知識を持っている人以外にはないであろう。（八一頁）

そして、その上で、「ただし、以上の通則が古今東西を通じて普遍的なものかどうかについては、一抹の不安がある。」（八一頁）として、次の問題を指摘されている。

たとえば、日本語のアクセントがメキシコ型からギリシャ型へ、すなわち語識別の機能の強いアクセントから語統成の機能を発揮するアクセントへと変化した、という論文（金田一春彦「古代アクセントから近代アクセントへ」『国語学』22集　一九五五年九月）を読んだことがあるからであろうか。〔4〕は、古代アクセントではあまり活躍せず、近代アクセントにおいて特に目立つなどということはなかったであろうか、などとも思ってみる。もっとも、これは思い付きに過ぎない。

ただ、〔3〕〔4〕〔法則3・4〕を通じて、それが適用できるのは、二つの現象が地理的に隣接している場合に限られる、地理的環境を考慮するという条件が必要なのではないか、とは思う。この点でも〔1〕〔5〕〔6〕〔7〕などとこの〔3〕〔4〕が異質のものであることが明らかになる（〔2〕もその点では〔3〕〔4〕に近い？）。

たとえば、〔甲〕●○○○、〔乙〕○●○○があって、この通則を字句通り適用すれば、〔甲〕が古いということになるが、あらゆる場合、〔甲〕＞〔乙〕とするのではないと思う。

〔丙〕●○○、〔丁〕○●○についても、同様のことが考えられる。金田一氏も隠岐アクセントをめぐって、五箇村の●○○と出雲の○●○との関係を、●○○（共通中国・雲伯）＞○●○（出雲）＞○●●（共通隠岐）＞○○●＞●○○●＞●○○（五箇村）といった複雑なプロセスで結びつけている。また、共通隠岐の●○○と共通中国の○●○との関係についても、○●○（共通中国）＞○●●＞○○●＞●○○（ママ）＞●○○（共通隠岐）のような一見まわりくどい過程が考えられている。（八一頁）

引用後者の前半部分には、疑問の一つが具体的に述べられている。即ち、〔4〕・法則4は、古代アクセントではあまり活躍していなかったのではないかと疑っておられる。

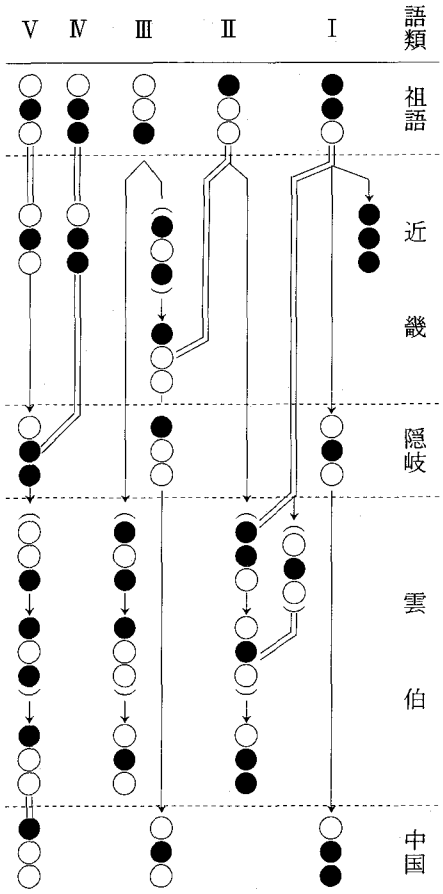
また、後者の引用の後半部分では、アクセント変化の法則を認めたとしても、その適用のしかたによって、推定される変化の経路がいろいろになることを指摘されている。この点に対する徳川氏の批判は、徳川論文の前の方に既にくわしく述べられているところである。その部分を引用すると次の通りである。

氏によると、あとで本章九節に詳しく引用するように、アクセント変化にはおのずから方向があるという。でたらめに変化するわけではない。たとえば、○●●型は○○●型に変化するが、突然●○○型に変化したりすることはないという。●○○型は●●○型か○●○型に変化することはあっても、急に○○●型や●○●型に変化したりすることはないという。（『方言学概説』50ページに便利な図式が出ている）。

この考えを利用して、金田一氏のいう近畿アクセント（高知アクセント）、共通隠岐アクセント（隠岐アクセントの原形、金田一論文による）、共通雲伯アクセント（雲伯アクセントの原形、『現代言語学』の論文による）、共通中国アクセント（中国主流アクセント

の原形、金田一論文による）の関係を考えてみると、次のような案もありうるのではないか、と思う。

金田一論文では、第Ⅰ類は、共通中国方言の○●●から○○●▽●○●▽●○○と変化して、○●○という共通隠岐方言になったのだという。私は、逆に共通隠岐方言を先に立てて○●○▽○●●としてみた。第Ⅱ・Ⅲ類にしても、金田一氏は、共通中国方言から共通隠岐方言まで○●○▽○●●▽○○●▽●○●▽●○○という経路をたどったとする。これに対して私は、共通隠岐方言●○○からすぐに共通中国方言○●○が出たとしてしまう。第Ⅳ・Ⅴ類は、金田一氏が●○○▽○●○▽○●●とするのに対して、私は反対の○●●▽○○●▽●○●▽●○○を考える。

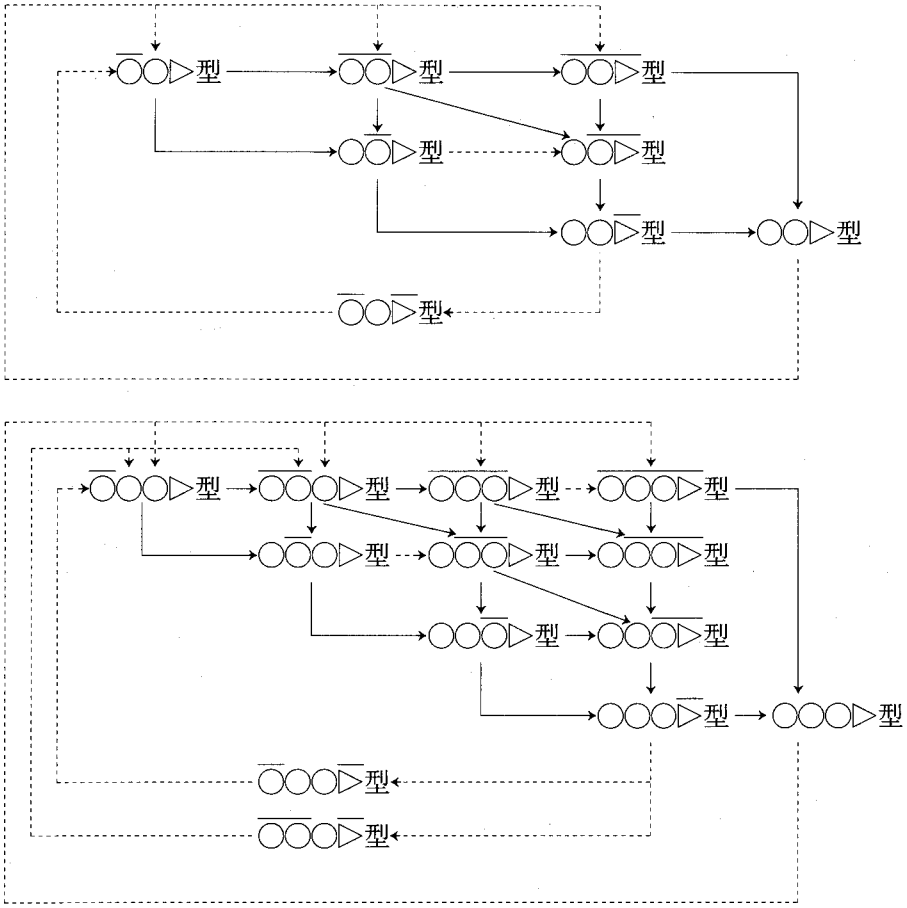


すなわち、私の案では、金田一氏の共通中国アクセントから共通隠岐アクセントへという考えが、まったく逆になってしまっている。五分間ほどで考えたものだし、2拍名詞だけについて考えたものだからまことに頼りないが、金田一氏の考え方に沿った範囲内で、氏の考え以外の案もありうるのではないかと、思った次第であった。（七三頁）

両氏の推定の違いを対比してみると表11のようになる。これを見ると、全く逆の経路の推定が可能になってくるのは、平安時代の京阪式アクセントの形をどこに位置づけるかによる面が大きいけれども、また、性格の大きく異なる法則3と法則4とをどう適用するかによるものではないかと見られる。徳川氏が引かれている『方言学概説』五〇頁の図[注39]（次頁

（表11）共通中国方言と隠岐方言

Ⅰ	金田一説	共通中国方言	○●● → ○○● → ●○● → ●○○ → ○●○ 隠岐（後へすべる）（明瞭の変化）（後へすべる）
	徳川説	隠岐	○●○ ―――――――――――→ ○●● 共通中国方言（後へすべる）
Ⅱ Ⅲ	金田一説	共通中国方言	○●○ → ○●● → ○○● → ●○● → ●○○ 隠岐（後へすべる）（後へすべる）（明瞭）
	徳川説	隠岐	●○○ ―――――――――――→ ○●○ 共通中国方言（後へすべる）
Ⅴ Ⅳ	金田一説	共通中国方言	●○○ → ○●○ ―――――――――――→ ○●● 隠岐（後へすべる）（後へすべる）
	徳川説	隠岐	○●● → ○○● → ●○● ―――――――――――→ ●○○ 共通中国方言（後へすべる）（明瞭）



を引いてくるまでもなく、法則3（概説では左から右への線で示されている）は、労力の節約のために語頭が低下する変化やアクセントの山が後退する変化であり、法則4（概説では右から左への線で示されている）は、明晰な発言をしようとして、逆に語頭が隆起する変化である。変化の方向は全く逆なのであるから、法則3だけで説明するか、法則3のほかに法則4を加えて説明するかによって逆の推定が出てくるのは当然と言わなくてはならない。

右の指摘をうけて、金田一博士の法則4のうち、語頭隆起の法則を見てみると、これについての博士の説明は、既に見たように、法則3についての説明よりも複雑である。即ち、語頭隆起の例は、明晰な発音をしようとして隆起したという原因と、複合語の後部要素に立った場合に、前部要素からの続きで、アクセントの山が後へすべったという原因との二つが用意されていた。後者の説明は、語頭隆起の変化が、労力の節約でアクセントの山が後へすべるという変化と逆方向の変化であるために用意されたものという性格があったのではないか。語頭隆起は、一体、どちらの要因で生じたものと考えられるのであろうか。これに関して、南牟婁方言によって示されたような複合語におけるアクセントの山の後退がどのくらい影響を与えたのか（注40）についても、方言研究者の教示を仰ぎたいところである。

以上要するに、金田一博士の設定されたアクセント変化の法則に対する徳川氏の疑問には耳を傾けるべき点があるのではないかと、筆者には思われるのである。

(2)、東西アクセントの新古と分布

東西アクセントの分離についての金田一博士説に対して提出されている批判で、もう一つ取り上げておくべきものに、東西アクセントの新古と分布との関係に関する批判がある。筆者は、この批判を妥当なものとは考えないが、後に論ずる筆者の解釈にかかわるところがあるから、取り上げておくことにする。この批判には、異なる二つのものがあって、一つは、金田一博士説が、内に古いアクセントがあり、両外に新しいアクセントが分布しているとすることに対して、離れたところに同じ変化

が平行的に起きているのは不自然であるとするものである。ラムゼイ論文がそのことを批判している。しかし、この点については、金田一博士が、東西アクセントの分離の問題を扱ったまさにその論文（『日本の方言』七一頁）で、既に述べておられるように、音韻事象や文法事象で、起こりやすい変化の場合には、変化する方向は特別の事情がない限り、どの方言においても同じ変化が起きるのが自然で、特別の事情がないにもかかわらず、異なる変化が生じていることの方が不自然であると言わなくてはならない。「互にかけ離れた二地域で偶然に同一の表現が発生する可能性は、極めてすくない」（徳川「方言地理学と比較方言学」六二頁）などと言われる時も、それは言語の恣意性に根拠を置くもので、主として、語詞の分布に限定して言えることである。両外に新しい東京式アクセントが分布していることは何ら不自然なことではないのである。

もう一つの批判は、方言周圏論によれば、古いものが外に分布し、新しいものが内に分布しているのに対して、金田一博士説に従えば、アクセントの場合は、古いものが内に分布し、新しいものが外に分布して、分布が逆になるという点についてである。金田一博士は、音韻事象については、保守的な中央では変化しにくいのに対して、辺境地方では、広い意味での言語教育が行われないこと、他地方との交渉が少ないこと、文字や文学の類との縁が浅いことなどのために、拘束されることが少なく、自由な変化が進むのであるとして、音韻事象の逆周圏分布を提唱された。これに対して、都竹氏（'71　五六・五七頁）は、柴田武「方言の音韻」（日本民俗学大系　口承文芸　平凡社　一九五九・一一）を引くなどして、音韻事象も外が古く、金田一博士説に問題があるとした。(注41) これに対して、金田一「東西方言の違いの成立について」（六二頁）は、柴田武博士の「方言の音韻」は辺境方言が古色を湛えている現象を上げたもので、「音韻分布では、辺境の方言の方が新しい」と、「大ざっぱに言って、そう言える」（六二頁）とされている。

また、藤原与一『方言学』（三省堂　一九六二・六）にもこの問題に触れるところがあり、アクセントの新古とその他の諸事象の新古との「調和的な解釈」（五〇九頁）が必要であるとしている。

言語の変化には不条理な面があるから外が古いと見るのも、外が新しいと見るのもともにドグマであるとする見方もあり、確かにその点は考慮すべきであるが、新古の分布のずれの問題すべてを、言語変化の不条理に求めると、言語史そのものを否定することになってしまう。

この問題については、まず、文化の中心に生まれた語詞が地方に伝播していくことによって生じた分布と、各地に起きた内的変化によって生じた分布とを区別して考える必要がある。都に受け入れられた漢語が地方に伝播していってある分布をなしているような場合が前者の典型で、蝸牛という語詞の分布もまた伝播によるものである。(注42) この場合には、原則として、外が古く、内が新しいという分布を示す。

これに対して、音韻変化や文法変化などの多くの変化のように、各地において内的変化を起こした事象の場合には、右とは事情が異なる。アクセントの変化はまさにその内的変化であって、金田一博士が、「他の方言の影響という解釈はなるべく避け、その言語の中で変化が起ったのではないかと考え」（金田一春彦「比較方言学の立場から」（国語学104　一九七六・三　六七頁）、「他の方言からの影響というものをなるべく考え」ない立場をとられる（金田一春彦「諸家のアクセントの研究を読んで」（国語学141　一九八五・六　九〇頁）のは妥当な立場であると言わなければならない。(注43)

ここで、その変化がやはり内的変化であると見られる、既に見た、ハ行動詞の音便、形容詞の音便、断定の助動詞ダ・ジャの新古と分布を見なおしてみると表12のようになっている。

（表12）東西の新古ということ

	東部	西部	外西部
ハ行動詞	促音便（古）	ウ音便（新）	促音便（古）
形容詞	原形（古）	ウ音便（新）	原形（古）
ダ・ジャ	ダ（古）	ジャ（新）	ダ（古）

この三つの言語事象の場合には、新古ということで言えば、外に古い形、内に新しい形が分布していることになる。しかし、既に述べたように、外が古い形、内が新しい形になったのは、変化の遅速などのために、外と内とで置かれている状態に違いがあるところに、ある特定の原因が生起し、それぞれに古い形又は新しい形を選択せざるを得なかったということであった。また、そのように、ある特定の原因によって、外と内との方言はある時別々の道を歩みはじめたのであるから、古い形の方を選んだ方言がいつの日か新しい形になる日が来るというものではなかった。

そのことを確認すると、その時の状態の違いと、起きた原因がどのようなものであったかということによって、ある方言が、時には古い形の方を選ばざるを得なかったり、時には新しい形の方を選ばざるを得なかったりするのは当然のことであると考えられる。言語事象によって、時に外が古かったり、時に外が新しかったりするのは何の不思議もないことと考えられる。(注44)

問題は、アクセントの場合、京阪式アクセントと東京式アクセントとがなぜ分離しなければならなかったのか、そして、その際、なぜ内が古い形の方を選ぶこととなり、外が新しい形の方を選ぶこととなったのかということになる。

2、その他の問題点

繰り返しになるが、金田一博士の説は、労力の節約のために、語頭が低下したり、アクセントの山が後退したりするという動きと、明瞭な発音にしようとして語頭を隆起させる動きとが原因となって東西アクセントの違いが生じたとされるものである。この二つの動きは、ともにさほど強力な動きであったとは思えない。この動きが働くとすれば、じわじわと作用し、変化は長い時間をかけて生じていく種類のものではないかと思われる。現に金田一博士は、その変化を九期に分かってなだらかに進んだものとされている。筆者にとって素朴な疑問であるのは、そのような変化の動きが京阪式アクセントに生じやすかったとすれば、その変化の動きは、後の東京式アクセント地域においてだけでなく、後の京阪式アクセント地域においても生じていてよいのではないかということである。どうして、この変化の動きが後の東京式アクセント地域にだけ起き、後の京阪式アクセント地域に起きていないのであろうか。

東京式系アクセントは京阪式系アクセントから生じたものであるから、京阪式アクセント地域のアクセントは、その地域が文化の中心で保守的であったために、(注45)東京式アクセント地域のアクセントに遅れて、その後を追っており、いまだ、京阪式アクセントでとどまっていると考えれば、右の点を説明できないことはない。しかし、京阪式アクセント地域においては、共通語化としての東京式アクセント化は生じつつあっても、内的変化として東京式アクセントへの移行が、体系的に、そして広範囲にわたって、進んでいるようには見えないのである。

京阪式アクセントと東京式アクセントとは、前者が古い形をしており、後者が新しい形をしているけれども、古い京阪式アクセントがいつの日か新しい東京式アクセントの後を追って、その形になるという関係にあるのではなく、両者はある時特定の原因によって、一方が古い形の方を

選び、他方が新しい形の方を選ぶことになったというものなのではないか。ここでも、筆者は、京阪式アクセントと東京式アクセントとがどうしても分離しなくてはならなかった、何か特定の原因があったのではないかと考えたくなるのである。

第四節　筆者の解釈

一、東西アクセントの違いが生じた直接の原因

㈠二音節第二類動詞の音便とアクセント

1、二音節第二類動詞連用形＋テの音便とアクセント

⑴音便が生起する以前のアクセントの型

右のように考えて、東西方言のアクセントが別の道を歩まざるを得なくなった原因をさがしていくと、先ず二音節第二類四段活用動詞の音便が注目されるのではないかと考える。

音便が生起する以前における二音節第二類四段活用動詞の「連用形＋テ」のアクセントの形については、十分には明らかでないけれども、いろいろな点を総合すると、はじめ、

○◓▼

が行われ、後、助詞との結合度を強くして、

○◓▽

になっていたのではないかと推定される。

金田一春彦博士は、『四座講式の研究』（三省堂　一九六四・三）において、二音節第二類四段活用動詞の「連用形＋テ」の形、即ち連用形第二種のアクセントのうち、助詞「て」の部分を除いた連用形のアクセントの型について、三つの根拠をあげて、○◓であった蓋然性の高いことを論ぜられた。第一の根拠は、連用形第一種（中止の形や、いわゆる複合動詞の前部に立った形）の型が○◓であり、[注46]第二種もそれと起源が同じであるから、○◓であったと推定されるというものである。この点について、金田一博士は、上二段活用の例ではあるけれども、連用形第一種の「過ぎ」と、連用形第二種の「過ぎて」とが、『図書寮本武烈紀』でともに平平型に差声されており、もと、ともに平・平軽であったらしいことがわかることを例にあげて、補強された。第二の根拠は、連用形第二種にのみついて言えることではなく、第一の根拠の上に立って、連用形第一種・第二種が同じ型であったと考えた上でのことであるが、二音節・三音節四段活用動詞連用形のアクセントの型を○◓・○○◓であったと考えた方が、四音節の第二類四段動詞のアクセントの型とのつりあいがとれ、体系がととのうということである。

二音節語の連用形　○◓
三音節語の連用形　○○◓[注47]
四音節語の連用形　○○●○（鎌倉初期）→○○○◓（鎌倉後期）

根拠の第三は、室町時代以後の京都アクセントとの関係を考えてみても、○◓型と考える方が○●型だったと考えるよりも説明がうまくできるということである。[注48]

金田一博士は、次に、二音節第二類四段活用動詞連用形に助詞「て」のついた形のアクセントの型について問題にされ、次下のように論じられた。即ち、先ず、より早い時代のアクセントをうつすと見られる『類聚名義抄』、『日本書紀』の古写本、『日本書紀私記』『四座講式』には、[注49]

○●▼

の型で見え、より新しい時代のアクセントをうつすと見られる『古今訓点抄』『補忘記』には、

○●▼
○●▽

の二つの型で現われることを指摘される。江戸時代のアクセント資料で

ある『平家正節』には、助詞「て」が高くついた○●▼の例が見えないが、偶々用例が見えないということで、○●▼・○●▽両方の形が行われていたものと推定された。そして、この二つの型の関係について、次のように推定された。長いけれどもそのまま引用する。

そうすると、問題は、それではなぜ『名義抄』のような「て」が常に高くついていたアクセントから、『古今訓点抄』のような「て」が高くも低くもつくアクセントに移行したかということを考えなければならなくなる。私はこう考える。

「て」は元来助動詞「つ」の連用形として◓型の助詞であった。[1]一方、第二類動詞の連用形は《十斗》型あるいは《十十斗》型であるが、この型の最後の《斗》の拍は、もともと単純な●調ではなくて、◓調であった。上の『名義抄』の例で、慢ビテという訓のビの声点が平軽点であるのはそのアクセントを示している。そんな風だから、こういう動詞の連用形プラス「て」は、本来○◓◓型、あるいは○○◓◓型になるのが本来だった。ところが、動詞プラス「て」の形は一語のように発見されやすい。そこで「て」の◓は○になろうとする。一方、動詞が四段活用の動詞で、最後の拍が音便を起こしたりする場合などは、○◓○型や○○◓○型をとりにくい。特に促音便を起こすような動詞で、促音の拍を◓調に発音することは不可能である。●調に発音するのさえ難しい。そこでとかく●の音調をあとの拍まで送って○●●型や○○●●型になろうとする。また一方「て」を強めて発音した形は○◓◓型や○○◓◓型になるが、これがぞんざいに発音されると、○●◓型・○○●◓型になる。こういったことが重なりあって○●●型や○○●●型という型が生まれたものと思う。

これが平安朝時代のことで、『名義抄』に見られる大部分の形がこれだと解する。同時に、『日本書紀』『日本書紀私記』ならびに、『四座講式』の声点もこういうアクセント体系をうつしているものと考える。

ところが、ここで二拍語プラス「て」の○●●型は文句はないが、三拍動詞プラス「て」がとったと見られる○○●●という型のアクセントには、支障がある。なぜかというと、動詞に「て」がついた形は、音便形を起こすほど動詞と「て」との結合が密接であるが、○○●●という形は一語の型として不安定な音調だからである。〔十六・七〕に述べた助詞「の」の記述を参照されたい。このために○○●●型はとかく嫌われて、○○●○型という型をとるようになった。この時には、動詞プラス「たり」の形が○○●○●型であることも、そっちの方へ牽引したかもしれない。とにかく三拍動詞プラス「て」の形がまず○○●●型から○○●○型になった。そうなると二拍動詞プラス「て」の形も、釣合上、○●●型では恰好が付かぬ。そこで、「書きて」「懸けて」のような形が、○●○型にも発音される傾向を生じた。もちろん、○●●という音調は、一語のアクセントとして何も差支えない。だから、○●●型も保存された。そこで、○●○型と○●●型とが共存した。これが『古今訓点抄』に見られる形で、この現象が『補忘記』に見られるアクセントにまで続いたと考えたいのであるが、いかがであろうか。

注（1）助動詞「つ」にアクセントを表記した例は少ないが、岡田尚子氏は『前田家本・仁徳紀』の和訓の中からツカハシツ（遣）に《上上上平上》という声点を施してある例を見つけている（「日本書紀古写本のアクセントと古今訓点抄のアクセントについて」（下）四一ペ）。「つ」の語源は「棄つ」かと言われている（大野晋「古文を教へる国語教師の対話」〔『国語学』8の八八ペ〕・築

島裕「中古の文法」〔『日本文法講座』3の一四二ページ〕その他)。

この「うつ」は『名義抄』では《平上》型である。これは終止形の「うつ」、連用形の「うて」を通じて○◓型であった。これの「う」の拍が消失して◓の拍だけ残ったものと考えられる。(金田一『四座講式の研究』四五三頁)

これに対して、秋永一枝博士は、次のような解釈を示された。

「て」の接続をみると、助詞固有の型を保って『問答』などは、㈠類は〈上平上〉(「置きて」など)、㈡類は〈平上上〉(「起きて」など)とあるが、新しい型の多い『訓』になると㈠類に《上平上》は一例もなくて《上平平》(「置きて」など)のみとなり、㈡類では《平上上》と《平上平》がともに多出する。これは㈠類●○●型から一まとまりの●○○型に、㈡類は○◓●型から一まとまりの○◓○に変化する過程を現わすものと言えよう。(秋永一枝「古今集声点本における一・二拍動詞のアクセント――古今集動詞のアクセント 上――」(国文学研究97 一九八九・三) 七五頁)

助詞「て」が完了の助動詞「つ」の連用形に出るらしいことは筆者も認めるところであるが、[注50]「うつ」(棄)という動詞の終止形・連用形第一種のアクセントの形が○◓であったかどうかにはなお若干の問題が残る。鈴木豊編『日本書紀神代巻諸本声点付語彙索引』[注51]には、

浮枳于都屢伊浮岐能佐擬理 〔吹棄気噴之…〕

〈平上平平上平平平上上上〉弘安一442=四一3右 乾元一446左=九四1 嘉暦一416 明徳一・二五ウ6左

フキウツルイフキノ…〔吹棄気噴之…〕

〈平上平平上平平平平〉弘安一441=四一2/一446=四一7 乾元一451=九五1 嘉暦一421

〈平上平平上○平平平〉嘉暦一416

〈○○平平上平平平○〉乾元一446=九四1

〈平上平平○○○○〉明徳一・二五ウ6(二四頁)

と見え、上野和昭編『御巫本日本書紀私記声点付和訓索引』には、[注52]

不-支-宇-豆-留・伊-不-支-乃九ウ1(二五頁)

と見えて、連体形「ウツル」(棄)は、

平平上

平平平

平上上

の三通りの形が見える。平平平は明徳本にのみ見える形であり、平上上が、『四座講式の研究』(三七一頁)によれば漢語サ変動詞の型として見えるから、これを除くと、平平上が残り、その連用形第一種は○◓であったと推定される。しかしながら、ウウ(植)―スウ(据)、アメ(雨)―サメ(春雨)アク(開)―サク(咲)、イネ(稲)―シネなどの対応例から見て、「ウツ」(棄)と同源と見られている[注53]「スツ」(捨)の終止形のアクセントが『類聚名義抄』に●○で見えるところからは、連用形第一種も●○と見られ、問題が残る。そのように疑うと、『類聚名義抄』[注54]には「ウツ」(平上)のアクセントを差した漢字がいくつか見えるけれども、「棄」字は見えず、意味的に近い字として、「抛」がある。この字は、「抛棄」とも使われるから、捨てる意があるようにも思われるが、『類聚名義抄』の「抛」字には「スツ」の訓はなく、「ナゲウツ」とも訓まれるように、四段活用の「打ツ」ではないかとも疑われる。

そこで、助詞「て」の語源の問題はおいて、この助詞の動詞連用形へのつき方を見ると、二音節第一類動詞連用形●○にも高くついた例が見えるから、助詞「て」の固有の形は▼(上)であったと見られる。そう考えてよいならば、二音節第二類動詞○◓に助詞「て」がつく時も、本来は、

○◓▼

の型になっていたはずである。このアクセントを、下降調を表記し分けない資料では、○●▼のように表記しているものと見られる。助詞「て」は、金田一博士が指摘されるように、前の動詞に融合しやすい助詞であったために[注55]、下降調で下がった後では▽になり、

○◓▽

で行われるようになったものと推定される。このアクセントを、下降調を表記し分けない資料では○●▽のように表記しているのであろう。二音節第一類動詞の方も、本来は、連用形に「て」が高くつき●○▼であったが、融合が強くなり●○▽となっていったものと見られる。

この経路は、助詞「て」が「うて」（○◓）から出て、▼であったと考えても、

第一類　●○▼　→　●○▽

第二類　○◓▼　→　○◓▽

となる。

このように考えて、筆者は秋永博士の説に従いたい。

なお、愛媛県松山方言で文語文を読む時のアクセントの型が、カキ|テ（書）、ヨ|ミテ（読）、ウチ|テ（打）になるのも、あるいは古いアクセントの型を伝えているものと考えてよいかも知れない。[注56]

以上要するに、二音節第二類四段活用動詞連用形＋テのアクセントは、

○◓▽

で行われていたものと推定される。

(2)音便が生起した後のアクセントの型

ここに音便が起きた場合を考えると、「ウッテ」（打）などの促音便の促音は下降調を担うことができないから、下降調を捨てて、

○●▽

の形になったものと見られる。イ音便（カイテ）（書）、撥音便「ヨンデ」（読）などは、京畿地方では下降調を維持することが可能であったと見られるが、それでも、そこに生じる、aii, onn などの連続は、促音便の○●▽にひかれることもあって、次第に

○●▽

の形に転じていったのではないかと推定される。そうなると、音便形とともに併用されていた原形の方も、これにひかれて、下降調を捨てて、

○●▽

の型に転じていったのではないかと推定される。

このように、音便が生起したことによって、「カイテ」（書）「ヨンデ」（読）「ウッテ」（打）など、イ・ン・ッの特殊音節が単独でアクセントの山を担う例が多数生じることとなった。特殊音節が単独でアクセントの山を担う例は、音便の例よりも早く、ヤ行上二段動詞「老イテ」「悔イテ」に生じていたと見られるが、それらが単発的であったのに対して、音便の例は多数にのぼった。[注57]四段活用動詞（ラ変を含む）は、すべての行にわたって音便を起こしたから、二音節第二類動詞連用形＋テの第二音節は特殊音節が立つこととなり、それが単独でアクセントの山を担うこととなった、

カ行・サ行・ガ行　イ音便　例　書イテ

マ行・バ行（古く）　撥音便　例　読ンデ

（新しく）　ウ音便　例　読ウデ

（語幹末母音がuの場合には古い撥音便の形）

タ行・ラ行　促音便　例　打ッテ

ハ行　（古く）　促音便　例　買ッテ

（新しく）　ウ音便　例　買ウテ

（後、長音　kɔ:te kɔ:te）

音便が生起しはじめ、次第に一般化していっても、長い間、音便形と原形とが併用されていたことはよく知られているところである。そういう期間にあっては、音便形は原形と同じく。○●▽の型を維持したものと推定される。

(3)音便定着後のアクセントの型

ところが、音便が定着し、原則として原形の方を用いなくなると、西部方言と東部方言とで、音便形のアクセントの型に違いを生じて来ざるを得なくなったのではないか。

(4)現代東京式アクセントにおける特殊音節とアクセント

現代の東京方言の特殊音節が、西部方言のそれと比べて、アクセント核を担う上で、さまざまな制限をもっていることが、多くの研究者によって次第に精しく解明されつつある。その全貌はいまだ十分に明らかにされていないが、この点に関して、東西間においてかなり顕著な違いを示すのは、近畿方言では特殊音節が単独でアクセントの山を担うことができるのに対して、例えば、東京方言では、単独では山を担うことができにくいということである。[注58]次のような例が指摘されてきた。

京阪式アクセントと東京式アクセントとの型の対応から言えば、二音節名詞第三類に属する語は、現代語において、

京阪式　●○▽（例、山が）――東京式　○●▽

の対応をしているにもかかわらず、「貝」「鯛」「恋」「塔」「金」「銀」のような語は、例外となり、東京式アクセントでは特殊音節が山を担わない形となっている。[注59]

京阪式　●○▽――東京式　●○▽

動詞についても、三音節第二類の「帰る」「返す」「通る」「通す」は、東西の型の対応からは、

京阪式　●○○（例、動く）――東京式○●○

となっているはずのものであるが、東京式アクセントでは●○○となっている。[注60]「帰る」「返す」は「カイル」「カイス」に転じた形のためにアクセントの形を変えたものか。

又、三音節動詞第三類の「這入ル」「参ル」は「ハヒイル」「マヰイル」の転で、院政時代以降のアクセントは、連用形「ハイ」（○◓）連体形「イル」（●●）から

○◓●●→○●●

であったと見られ、この型の、東京式アクセントとの対応は、

京阪式　○●●（例、歩く、隠す）――東京○●○

となるはずのものであるが、「這入る」「参る」は東京アクセントでは、●○○の形となっている。

次下の例は、特殊音節があったために、アクセントの型を変えたものではなく、類全体の型がかわって、結果として、京都の形が特殊音節が単独で山を担っており、東京アクセントが単独で山を担わなくなっている例である。

二音節名詞第五類[注61]

京阪式　○●▽（藍・鯉）――東京式　●○▽

三音節名詞第七類

京阪式　○●○（蚕）　●○○

ただし、このように、東京式アクセントでは、特殊音節が単独でアクセントの山を担うことを避けているのであるが、特殊音節が母音iである場合には、アクセントの山を担った例が皆無というわけではない。[注62]

母音iの場合

①ヨイガ（酔）　但し、新しい形はヨイガ
②アイカギ（合鍵）　アイカギ・アイカギが古く、新しい形はアイカギ
アイクチ（合口、刀）　アイクチ・アイクチが古く、新しい形はアイクチ・アイクチ
③カイヌシ（飼主）　標準アクセントはカイヌシとも
カイドリ（飼い鳥）　標準アクセントはカイドリとも
カイヌシ（買主）　標準アクセントはカイヌシ
④サイド（差異度）

しかし、これらはいずれも、特殊音節がアクセントの山を単独で担う理由が説明できるものである。即ち、「ヨイガ」（酔）の例は、単純動詞から生まれた連用形名詞のアクセントの型、

●○　○●○
ヨム（読む）　ヨミガ
カツ（勝つ）　カチガ

に合うもので、それに支えられて維持されてきたけれども、新しくは、アクセントの山を担わない形の方が行われるようになったものであろう。「アイカギ」・「アイクチ」などは、［動詞＋名詞］の複合名詞アクセントの型

●○＋　→○●○○
キル＋キズ　→キリキズ（切傷）
モツ＋ヌシ　→モチヌシ（持主）

に従って生じた型で、その型に支えられて維持されてきたが、新しくはアクセントの山を担わなくなってきているものであろう。「カイヌシ」（買主）の場合は、標準的な東京式アクセントは「カイヌシ」で、「カイヌシ」は「飼主」と混同したものか。「サイド」は漢字二字＋漢字一字の結合名詞のうち、「～度」のアクセントの型が、

サイド（差異度）　シューセキド（集積度）
キシャクド（希釈度）　シューセキド（集積度）
カイリド（解離度）　カツドード（活動度）
エンキド（塩基度）　カイゾード（解像度）
サンプド（散布度）　ジョーチョード（冗長度）
デンリド（電離度）　トーメード（透明度）
ナンイド（難易度）　ヨーカイド（溶解度）
リカイド（理解度）　アンセイド（安静度）
ジュード（自由度）　カンコード（感光度）
イゾンド（依存度）　デンドード（伝導度）

となるのに（注63）従ったもので、また、それに支えられて維持されているものである。

(5) 東京式アクセント分離の直接の原因

右に見たような、特殊音節が単独でアクセントの山を担えないという性格を、動詞連用形の音便が定着した頃に、既に、現代の東京式アクセント地域のことばがもっていたとするならば、二音節第2類動詞「連用形＋テ」のアクセントの型

○●▽

は、その地域においては許されなくなったはずである。筆者は、東京式アクセント地域では、そのために、

○●▽（書イテ・打ッテ・読ンデ）

の型を捨てて、特殊音節にアクセントの山を置かない、

●○▽（書イテ・打ッテ・読ンデ）

の型に変わったのではないかと推定する。金田一博士説では、

○●▽→○○▼→●○▼→●○▽

と変化したと推定された変化を、[注64] 筆者は、

○●▽→●○▽

と一気に変化したのだと考える。また、金田一博士説では、右の変化はどの方言においても起きやすかったことになるが、筆者の考える変化は、特殊音節が単独でアクセントの山を担うことができない方言にのみ生起したものと考える。このようにして起きた変化が、京阪式アクセントから東京式アクセントが分離した直接の原因だったのではないかと考える。

特殊音節が単独でアクセントの山を担う○●▽の型を避ける場合、アクセントの山を担うことを避けるというのならば、例えば、

○○▽

○●▼

の型でも、それを避けることができる。東京式アクセント地域において、なぜ●○▽の型に転じて避けたのかについては、東京式アクセント地域においては、特殊音節が音節として独立はしていながら、その存在力が他の音節に比べて弱いために、特殊音節が前の音節に従属する傾向を示し、前の音節が高となり、特殊音節が低になりやすかったのではないかと考えられる。

金田一博士は、アクセント核が前の音節に移動することは特殊な場合に限られるとされ、次のような場合がそれであるとされた。[注65]

(1)型の混同が起った場合

(2)音韻の制約によって一部の語に変化が起こった場合

(3)類推によって一部の語彙のアクセントが変化する場合

(4)他の強力な方言の影響によってアクセントが変化する場合

筆者は、東京方言においては、例えば、「カイテ」(書いて)から「カイテ」が生じたものと説明しようとしているもので、金田一博士のあげられた、右の(2)で説明できないものかと考えようとしていることになる。

(6)「飽ク」の上二(一)段化

国立国語研究所『方言文法全国地図2』(前掲) 第62図飽きる(終止形)第73図飽きない(否定形)第93図飽きた(過去形)によると、もと四段に活用していた「飽ク」という動詞が、東京式アクセント地域において、音便を起こさず、活用も上一段に転じているという事実が顕著である。この現象も、右に見てきた事実と密接な関係にあるものではないかと見られる。「飽ク」という動詞は二音節第二類動詞であるから、その[連用形+テ]のアクセントの型は、「書キテ」などと同じく、音便の生起した頃には、

○●▼→○●▽→○●▽

と転じて、原形は○●▽の形になっていたものと見られる。しかし、後に東京式アクセントになる地域においては、音便形アイテの○●▽の型は許されず、音便化が遅れ、原形が行われていたのではないかと見られる。「書イテ」などの音便形○●▽が、原形が併用されている間は許されていたと見られたのに対して、「飽イテ」の○●▽が許されなかったのは、「聞イテ」(●○▽)が許されたにもかかわらず、「行イテ」(●○▽)、「生イテ」(○●▽)が許されなかったのと同じく、語幹が裸の母音であったことによるものと考えられる。裸の母音は特殊音節iが連続する場合には、いちはやく特殊音節が単独でアクセントの山を担いにくかったものと見られる。イ音便を起こす二音節動詞で、語幹が裸の母音である動詞としては、「飽ク」のほかに、

①行ク・浮ク・置ク(カ行動詞、第一類)

②押ス(サ行動詞、第一類)

③生ク（カ行動詞、第二類）

があるが、①②は第一類動詞である。③は同一母音が連続するために、音便を避けた例として説明できるものであるが、「裸の母音＋特殊音節＋テ」が○●▽となるために、イ音便を避けた例にも該当する。「生イテ」は二重に許されない形であったものと見られる。「飽キテ」が、後に東京式アクセントとなる地域において、イ音便化することが許されなかった事情は、右のように説明できるのではないかと考えられる。

この説明が妥当なものであるならば「飽ク」の上二段活用化は、イ音便定着の時期以後あまり遠くない時期であったと推定される。『日本国語大辞典』「飽キル」の頃は、「四段活用の「あく（飽く）」から転じて、近世後期ごろから江戸で使われるようになった語」とするが、春日政治博士によれば、[注67]文禄五年（一五九六）の石田三成の条目に見え、大槻文彦博士によれば、[注68]寛文頃の「諸国盆踊唱歌」の因幡の歌に見える。[注69]因幡は東京式アクセント地域であるが、石田三成は近江国生まれである。鎌倉時代の東国資料が極めて稀であることに問題があるが、今後東国系抄物などについて「飽ク」の上二段化に注目していく必要がある。

なお、東京式アクセントにおいて、この語が○●○（飽キル）●○▽（飽キテ）の形であるのは、京阪式アクセントの「飽キテ」○●▽の型が東京式アクセント地域で●○▽に転じたのにひかれて、●○▽（飽キテ）となったのであろう。「連用形＋テ」の形が●○▽となると、他の活用形のアクセントも、連用形がその型である上一段活用動詞のアクセントの型をとるようになり、例えば終止連体形は○●○（飽ル）となったものと見られる。

（表13）二音節動詞の第一類と第二類（第一案）

類＼時期	原形期 1	2	3	原形・音便併用期	音便専用期	
第一類動詞 咲キテ・止ミテ・張リテ	●○▼	●○▽	●○▽	（○●▼）	●○▽	京阪式アクセント
	●○▼	●○▽	●○▽	○●▽	○●▽	東京式アクセント
第二類動詞 書キテ・読ミテ・打チテ	○●▼	○●▽	○●▽	○●▽	○○▼	京阪式アクセント
	○●▼	○●▽	○●▽	○●▽	●○▽	東京式アクセント

2、二音節第一類動詞との関係

二音節第二類動詞「連用形＋テ」の音便形のアクセントに、筆者が考えるような変化が生じたとして、問題は、二音節第一類動詞の「連用形＋テ」の形と衝突することなく、どのようにして変化したのかということになる。その経路としては、理論的には二つの経路が想定し得ると思われる。一つは、表13に示すようなもので、もう一つは表14に示すようなものである。

表13の方が起きた蓋然性が考えられる根拠としては、先ず第一に、服部博士や都竹通年雄氏によって、東京式アクセントの、「二音節第一類動詞連用形＋テ」のアクセント○●▼の古形が○●▽であったと推定されていることがあげられる。[注70]第二に、京阪式アクセントから東京式アクセントへの変化は、後述するように統制的機能獲得への変化でもあったと見られるから、その視点から見ると、変化の方向は●○▽→○●▽の方で、●○▽→●●▽の方であったとは考えにくいことになる。[注71]

（表14）二音節動詞の第一類と第二類（第二案）

類＼時期	原形期 1	2	3	原形・音便併用期 4	音便専用期 5	
第一類動詞 咲キテ・止ミテ・張リテ	●○▼	●○▽	●○▽ ●●▽	●○▽ ●●▽ ○●▼	●○▽	京阪式アクセント
	●○▼	●○▽	●○▽ ●●▽	●○▽ ●●▽ ○●▼	○●▼	東京式アクセント
第二類動詞 書キテ・読ミテ・打チテ	○◐▼	○◐▽	○●▽	○●▽	○○▼	京阪式アクセント
	○◐▼	○◐▽	○●▽	○●▽	●○▽	東京式アクセント

他方、表14の方が起きた可能性が考えられる根拠としては、後述のごとく、東京方言では、二十歳・命など三音節名詞第三類と第五類とが京阪式アクセントの形●○○のままであるところから見て、●○○から○●○への変化はあまり強力なものではなかった可能性が考えられることである。また、●○▽から○●▽への変化は、違いの印象が大きく、●○▽から●●▽への変化の方が自然に起きやすかったのではないかと考えられることである。そして、更に金田一⑧論文（一四頁）によれば、[注72] 二音節第一類動詞連用形＋テのアクセントが●●▽である方言が、愛知県半田市や愛媛県・高知県西南郡の方言に存することである。また、後述するように、二音節名詞第二類の「石ガ」などが京阪式アクセントの●○▽から東京式アクセントの○●▽に変化する場合に、●●▽を経たと推定されるところからもそう考えられる。更に、二音節第一類動詞の終止形は●○の形、連体形は●●の形であったが、終止連体形が合一化するとその形は●●となったから、連用形もそれにひかれて●●▽の形をも生み出していた[注73]ことが考えられる。[注74]

右の二つの変化のいずれが実際に起きたのかは、今後なおさまざまな観点から検討されなくてはならないが、筆者は、今のところ、後述するように●○○から○●○への変化は、それなりの事情があった場合にのみ起きたものと考えられそうなところから、表14の方が起きたのではないかと考える。

ところで、表14についたとして、●○▽から●●▽への変化、●●▽から○●▼への変化は、主として、連体形への類推と、労力の節約ということで起きた変化で、どうしても起きなくてはならないという強力な力をもった変化ではなかったから、原形●○▽と併用されるような存在だったのではないかと推定される。そのことは、後に京阪式アクセントになる地域においても、後に東京式アクセントになる地域についても同じであったと見られる。ところが、ここに、音便の定着が実現し、原形が行われなくなると、後に東京式アクセントになる地域においては、「第二類動詞＋テ」のアクセントが●○▽に転じたものと推定される。そうすると、東京式アクセント地域においては、第一類動詞のアクセントの型として●●▽・○●▼の方を選ぶこととなったものと考えられる。

そして、第二類動詞の方が、●○▽に転じることなく、○●▽を経て○○▼になった京阪式アクセント地域においては、第一類動詞において、労力の節約のために生じていたものと考えられる●●▽・○●▼の形は定着することなく滅びたのであろう。

右においては、第二類動詞に○●▽→●○▽の変化が起きる前に、第一類動詞に●○▽→●●▽の形が生じ、併用されていたと考えたが、或

いは、動きとしては、○●▽→●○▽の変化が生じ、○●▽と●○▽とが併用されている時期に、これとの混同を避ける必要があって、連体形の形●●に類推することもあって、第一類動詞に●○▽とともに●●▽の形を生じていったということであったかも知れない。

なお、京阪式アクセント地域においても、第二類動詞「連用形＋テ」のアクセントの型が、特殊音節が単独でアクセントの山を担う○●▽の型から○○▼の型にかわっているけれども、京阪式アクセント地域では、特殊音節が単独でアクセントの山を担うことができたから、それが直接の原因となって生じたものでなく、労力の節約が直接の原因で、これに特殊音節であることがかかわって、アクセントの山が後へすべったものと見られる。服部四郎「アクセントと方言」（五五頁）は、この変化

○●▽→○○▼

を特殊音節のために生じたものと解しているが、特殊音節が直接の原因であったならば、東京式アクセントと同じく●○▽に転じていたのではないかと筆者は考える。しかし、後述するごとく、アクセントの山が後へ一音節すべるという変化は、一般には語頭が高いアクセントの型の語に生起するのであって、語頭が低い○●▽に○○▼への変化が起きているのには、労力の節約のほかに、特殊音節がかかわっているものと見られる。京阪式アクセント地域の特殊音節が単独でアクセントの山を担うことができるといっても、それは東京式アクセント地域のそれに比べての相対的なものであって、京阪式アクセント地域においても、特殊音節は他の音節に比べてやはり存在としては弱いという性格をもっているものと見られる。

3、「居ッテ」「死ンデ」「去ンデ」

二音節第二類動詞と第一類動詞とにおける変化を右のように推定できるとして、連用形が二音節で音便を起こした動詞には、第一・二類いずれにも属さない動詞がある。即ち、ラ変動詞「居ル」と、ナ変動詞「死ヌ」「去ヌ」とである。先ず、「居リ（テ）」であるが、金田一博士は、鎌倉時代における「居ル」の連体形のアクセントを、その語源「キアル」（●○●）を根拠に、◐●→◐○と推定された。[注75] この推定に従うと、連用形「居リ（テ）」の形も、

◐●→◐○

で、「居リテ」は、

◐●▼→◐○▽

であったのではないかと推定される。京阪式アクセント地域においては、その形が下降調を失って、

●○▽

となっているものと考えられる。東京式アクセント地域においては、先に見たところからすれば、●○▽の型にアクセントの山が後へすべるという変化が起き、●●▽→○●▼と変化していてよいところである。東京式アクセントにおいて、その変化が生じていず、「居ッテ」が、京阪式アクセントと同じく●○▽であるのは、「居リ」の連体形が●●でなかったために●●▽に変化することがなかったためであると考えられる。

次に、ナ変動詞「死ヌ」「去ヌ」について見たい。秋永博士によれば、「鎌倉時代における「死ニテ」「去ニテ」のアクセントの型は、

●◐▼→●◐▽

であったと見られる。[注76] 後に京阪式アクセントになる地域では、

●◐▽→●●▽→●●▼

と、下降調を失い、更にアクセントの山が後にまでひろがったのであろう。これに対して、後に東京式アクセントになる地域においては、

●◓▽→●●▽→○●▼

と、下降調を失った後、アクセントの山が後にすべったのであろう。

㈡三音節第二類動詞連用形＋テの音便とアクセント

東京式アクセント分離の直接の原因が二音節動詞連用形＋テの形に音便が定着し、例えばカイテ（書イテ）の特殊音節が単独でアクセントの山を担うことができないためにカイテに変わったのであるとする筆者の解釈を支持する事象として、同じ条件にある三音節第二類動詞においても同じことが起きているという事実がある。

三音節第二類動詞のうち四段に活用する動詞、例えば、「動イテ」の鎌倉時代のアクセントは○○◓▽→○○●▽であった。[注77] この形が音便を起こすと、やはり特殊音節が単独でアクセントの山を担うこととなり、音便が定着すると、シラビーム性を帯びたモーラ方言ではこの形を維持することができず、直前の音節を高くして、特殊音節をこれに低く付属させて○●○▽と変えざるを得なかったものと考えられる。これが現代東京方言の形である。このように考えてよいならば、ここにも京阪式アクセントから東京式アクセントを分離させる直接の原因があったことになる。

一方、京阪式アクセント地域においても、鎌倉時代の連用形＋テ○○●▽（動イテ）、終止連体形○○●（動ク）が、室町時代には●○○▽・●○○に変化している。この変化はどのようにして起きたのであろうか。これは、音便とは関係のない変化で、京阪式アクセント地域においてこの期に生じた、○○と低が続く形の衰退の動きの一つである。[注78] ○○●▽・○○●がなぜ●○○▽・●○○の形に変じたかについては、川上蓁氏の解釈が説得力をもつように思われる。[注79] 即ち、氏は、

鎌倉時代　室町時代

○○●　→●○○　語例　命
○○◓　→●○○　語例　山も
○○○●→●●○○　語例　いろくづ

のような変化のほかに、

○○●○→●○○○
○○●●→●○○○

の変化も起こったはずであるとし、これらの変化においては、低低に続く高を効果的に実現させるために、高の直前の低を低めに発音するために、その低の直前が相対的に高となったものと説明された。川上氏が明らかにしたこの変化を「低明示のための直前音節の隆起」と呼ぶことにする。

㈢形容詞第二類連体形の音便とアクセント

形容詞第二類の連体形においても同様のことが起きたものと推定される。鎌倉時代における形容詞第二類の連体形のアクセントは次のようであった。[注80]

二音節語　良キ	○◓
ク活用三音節語　白キ	○○◓
シク活用四音節語　涼シキ	○○○◓
ク活用四音節語　モノウキ	○○○◓
シク活用五音節語　ナツカシキ	○○○○◓

これらの語に音便が定着すると、やはり特殊音節が単独でアクセントの山を担わなければならないこととなり、それができない方言では、特殊音節の前に山をもっていくこととなったものと見られる。

良イ　●○
白イ　○●○

涼シイ　○○●○
モノウイ　○○●○
ナツカシイ　○○○●○

この場合、特殊音節が単独でアクセントの山を担うと言っても、アクセントの山は下降調の長音節の途中にあるわけであるから、既に見た○●▽（書イテ）などとは少し事情が違う。しかし、この場合も、例えば、

∫iroii（白イ）

に例をとると、この形において、ro と ii の連続は、シラビーム性を帯びた方言においては、ka と i の場合ほど強力ではないと見られるけれども、やはり、後者 ii が前者 ro に付属しようとする動きを示したと見られるから、ii の下降調を捨てて roi となり、アクセントも roi となったものと推定される。

そのようにしてできた、二音節語と三音節語の良イ・白イの形は現代の東京方言のアクセントの形である。四音節以上の語の場合には、右の形から、統制的機能を果たすために更に前の音節まで高くなって、今日の形となったのであろう。いずれの場合も核の位置は右の推定形とかわっていない。

涼シイ　○○●○　→○●●○
モノウイ　○○●○　→○●●○
ナツカシイ○○○●○→○●●●○

このように考えてよいならば、ここにも京阪式アクセントから東京式アクセントを分離させる直接の原因があったことになる。原因は、いずれも、音便によって特殊音節が単独でアクセントの山を担う位置に立ったということである。

このように考えると、先に二音節第二類動詞連用形＋テの場合に、カイィテ（書）ヨンッデなどが、トッテにひかれて、カイテ・ヨンデとなり、そこからトッテ・カイテ・ヨンデとアクセントを変えたものと推定したが、下降調を維持しているカイィテ・ヨンッデの段階でも、東京式アクセントへの変化は起きていたものと考えられる。

一方、京阪式アクセント地域の方を見ると、鎌倉時代における○○◓（白イなど）の形は、室町時代には●○○に形を変えている。この変化は三音節第二類動詞「動ク」などの変化のところで見たのと同じことが起きたものと推定される。

二、京阪式アクセントから東京式アクセントへの変化についての筆者の基本的な考え方

筆者は、右述のように、特定の原因によって、東京式アクセントが京阪式アクセントから分離せざるをえなかったと考えるものであるが、以下なされなくてはならないことは、動詞・形容詞のその他の各活用形のアクセント、更に、その他の品詞のアクセントにおいて、どのようにして、京阪式アクセントから、東京式アクセントが生まれていったかを説明することである。以下、順次その点についての筆者の解釈を展開させて行きたいが、それに先立って、論を展開させていくにつれて、筆者が考えるようになった。京阪式アクセントから東京式アクセントへの変化についての基本的な考え方を示しておきたい。その中のある考え方は、論の展開とともに得られたものであるから、その場所で具体例について論ずべきものであるが、あちこちで散発的に述べるよりも、はじめに一括して述べておく方が、論が理解されやすいと考えるので、はじめに、筆者の基本的な考え方を一括して示しておくこととする。

㈠東京式諸アクセント

一口に東京式アクセントと呼んでも、それはさまざまな種類のアクセントを包含していて、少なくとも次のような類別がなされているようである。(注81)

東京式系アクセント
- 東京式アクセント
- 東京式アクセントの変化
- 東京式アクセント　外観は京阪式に近い
- 東京式アクセント　外観は再転して東京式に近い

東京式アクセント
- 内輪系
- 中輪系
- 外輪系

中輪東京式アクセント
- 東京アクセント
- 甲府アクセント……

二音節名詞のアクセントのように調査が進んでいる語類については、広く東京式系アクセント全体を視界に収めて考察するが、全体としては東京アクセントを中心に考察を加えることとする。

金田一博士は、甲府アクセントを東京アクセントよりも一つ古い姿をとどめるアクセントと見られ、東京式アクセントの代表として甲府アクセントを選ばれた。確かにその方が説明が簡潔に行くところがある。また、甲府アクセントが、東京アクセントよりも、京阪式アクセントとの型の対応において例外となる語が少ないことが指摘されている(注82)ところは、甲府アクセントが東京アクセントよりも一つ古い形を示すものと見る方がよいように見える。しかし、筆者は、その点を認めた上で、甲府アクセントを京阪式アクセントから、東京アクセントとは異なる方向に変化した点をもつアクセントととらえてはどうかと考える。

京阪式アクセント
- 東京アクセント
- 甲府アクセント

次のような関係ではないのではないかと考える。

京阪式アクセント→甲府アクセント→東京アクセント

京阪式アクセント→東京アクセント→甲府アクセント

そのように考える理由は、そう考えた方が筆者の以下の説明にとって都合がよいからである。そこで、東京式アクセントとして、東京アクセントを中心に取り上げ、甲府アクセントを合わせて検討することとした。

㈡鎌倉・室町時代間の京阪式アクセントからの分離

今、『日本語の歴史5』の表（3）と表（4）とを利用して、京阪式アクセントにおける三音節の単位のアクセントの型と、これに対する東京アクセントの型とを対比して、その一部を示すと、表15のようになる。この表を見ると、京阪式アクセントから東京式アクセントへの変化は、京阪式アクセントの室町時代以降の形から生まれたのではないかと見られる。789と10の型のアクセントは東京アクセントも甲府アクセントも○●●の型になっているから、10の京阪式アクセントの形が789の京阪式アクセントの形と同じく●●○となった室町時代以降の変化と見るのが自然である。一方、既に見た、三音節第二類動詞（「動ク」）など）と、三音節第二類形容詞（「白イ」など）における、東京式アクセントへの変化は京阪式アクセントの鎌倉時代の形から生まれたものと推定された。アクセント資料が多くないために、鎌倉時代のアクセントと言う時も、鎌倉時代を通じてその形であったという保証はない。同様に室町時代のアクセントと言っても、室町時代のはじめからその形であったという保証はない。そう考えると、右の変化の時期のすべてを満足されるものとして、鎌倉時代の形と室町時代の形との交替時期を幅をもたせて

（表15）京都アクセントの時代的変遷と東京・甲府方言アクセント（金田一博士による）

	語例	平安末期	鎌倉時代	室町時代	江戸時代	現代	東京	甲府
7	形・上る（連体形）・竹が…	●●●型	●●●型	●●●型	●●●型	●●●型		
8	赤く…	●●○型	●●○型	●●○型	●●○型	○●○型	○●●型	○●●型
	赤き…	●●●型	●●●型	●●○型		●○○型		
	竹も…	●●●型	●●○型			●●○型		
9	あずき・上れ…	●●○型	●●○型	●●○型	●●○型	●○○型		
	赤し…	●●●型	●●●型					
10	頭…	○○○型	○○○型	●●○型	●●○型	●○○型		

（中略）

見ておいた方がよいと思われる。

㈢語類別の変化

金田一博士が京阪式アクセントから東京式アクセントへの変化を説明される時の基本的姿勢として、一つに、若干の例外はあるものの同じ型の語群は同じ変化を遂げるとしておられるということがある。この姿勢は早く服部四郎博士に出るものである。(注83) 確かに、具体的な例を見ると、語種が異なっていても、同じ型をしていた語群は東京式アクセントに変わっても、やはり同じ型に所属しているということが多い。しかし、それは、一つには、そこに起きた変化の原因が労力の節約のためというような原因であるために、どの語種にも同じように働いた場合であり、また、一つには、ある語種におきた変化に、同じ型の別の語種がひきつけられていくからである。しかし、変化の中には、特定の語群の特定の語種にしか起きないようなものもあり、また、ある語種に起きた変化が、同じ型の他の語種をひきつけようにも、他の語種に別の事情があってひきつけられないで、別の歩みをする場合もあり得る。

また、京阪式アクセントから変化して東京式アクセントが生まれたのだと考えるあまり、すべてのアクセントの型が両アクセントの間で変化しているはずだと考えてしまいがちであるが、変化せず、京阪式アクセントの形をそのまま維持している型もあったのではないかと考えられる。アクセントの場合、体系が緊密であると見られるために、変化しない型があるということが許されないように意識されやすいが、それを許さぬほどアクセントの体系は緊密ではないと言うべきであろう。

そこで、筆者は同じアクセントの型であっても、個々の語種ごとに、そこに起きた変化を説明していく立場を取る。

㈣アクセント変化

筆者は、京阪式アクセントから東京式アクセントへの変化を考察していくうちに、そこに起きた変化は、基本的には次の四つの変化であったと考えるようになった。

1、ある品詞のある語類に起きた変化が他に及ぶ変化

ここに、ある品詞のある語類に起きた変化とは、一で見た次の変化である。

二音節第二類四段活用動詞連用形＋テ　○●▽→●○▽　例　書イテ

三音節第二類四段活用動詞連用形＋テ　○○●▽→○●○▽

二音節第二類形容詞終止連体形　○◓→●○　例　動イテ
三音節第二類形容詞終止連体形　○○◓→○●○　例　良イ
四音節第二類形容詞終止連体形　○○○◓→○●●○　例　白イ
　　例　短カイ

1の変化は、次の変化に分けられる。

(1)四段活用動詞の連用形に生じた変化が、同じ型であった一段活用動詞の連用形に及ぼす変化

(2)ある活用形に生じた変化が他の活用形に及ぶ変化

(3)ある品詞に生じた変化が同じ型の他の品詞の語に及ぶ変化

2、低明示のための直前音節の隆起

1の変化はアクセントの山が前へ移動する例であるが、アクセントの山が前へ移動する変化として、筆者は、既に見た川上蓁氏が指摘された一つの変化に注目したい。それは、

○○●→●○○
○○○●→○●○○

のような変化である。氏の解釈によれば、低を連続して発音し、高を発音する場合、高を確実に効果的に実現するために、直前の低がより明確に低くされ、その結果、その低の直前の低が高くなるために生じたものという。

3、統制的機能獲得の変化

東京式アクセント、なかんづく東京アクセントは、京阪式アクセントから変化・分離していくにつれて、統制的機能を獲得していったものと見られる。もとはと言えば、労力の節約のための、語頭低下とかアクセントの山の後退であったが、例えば、●●○の形と●○○の形とでは、後者の形が安定した形であるために、後者には語頭低下も山の後退も起きなかった。語頭低下やアクセントの山の後退が起きたのは、原則として●●……の形に限られていた。

右のほかにも、類推などによって個別的に起きた変化があり、東京式系アクセントの中には統制的機能を果たす方向とは反対の方向の変化を起こしている例もあるけれども、それらについては、それぞれのところで扱うこととする。

因に、アクセント変化の法則は、その方言のアクセント体系がどのような体系であるか、またどのような体系にむかって変化していこうとしているかによって異なるものと考えられる。

三、動詞・形容詞における他の活用形への影響

右のようにして

二音節第二類動詞連用形＋テ
三音節第二類動詞連用形＋テ
第二類形容詞終止連体形

のアクセントが、京阪式アクセントから東京式アクセントへと次のように変化すると、その変化は他の活用形にも及んでいったものと考えられる。

○●▽→●○▽　例　書イテ
○○●▽→○●○▽　例　動イテ
○○◓→●○　例　良イ
○○◓→○●○　例　白イ
○○○◓→○●●○　例　涼シイ
○○○○◓→○●●●○　例　懐カシイ

例えば、動詞の終止連体形のアクセントも次のような変化を起こしたと考えられる。

○●→●○　例　書ク

○○●→○●○　　例　動ク

東京式アクセントにおける二音節第二類動詞終止連体形のアクセントの形が連用形のアクセントに類推して生まれたことは早く服部四郎博士の指摘されたところである。(注84)

甲の「カク（書）、ヨム（読）」等に対する乙の「カク、ヨム」は、恐らく独自の変遷によるものではなく、「カイタ、ヨンダ」（形はこのまゝでなかつたらうが）と云ふアクセントが成立してから、それ（外の活用形もあるが）に類推して第一音節に頂点の来る様になつたものではないかと思ふ。

そのようにして、二音節単位の動詞に生じた、

○●→●○

の変化は、他の語種にも影響を与えたものと推定される。そのことについては、二音節名詞を検討するところで改めて考えてみることにしたい。

四、二音節名詞における東京式アクセントへの変化

(一)京阪式アクセントにおける変遷と東京式アクセント

次に、二音節名詞における東京式アクセントへの変化を見る。二音節名詞の京阪式アクセントにおける変遷に、東京アクセントを対比して示すと、表16の通りである。(注85)

二音節名詞のアクセントは、調査が最も進んでいる語種であるから、東京式系アクセント地域における変化形全体の中で、京阪式アクセントから東京アクセントへの変化をとらえるようにしたい。今、全国の東京式アクセント地域において、二音節名詞のアクセントがどのような形で行われているかを、便宜金田一博士の示された「全国主要都市アクセント一覧表」(注86)から抜き出すと表17の通りである。ここに、東京式アクセント地域とは、既に見たところから明らかなように、筆者の定義では次のようなアクセントを示す地域のことである。（富山・金沢は別稿）

二音節第二類四段活用動詞連用形＋テ　●○▽
三音節第二類四段動詞連用形＋テ　○●○▽
二音節第二類動詞終止連体形　●○
二音節形容詞終止連体形　●○
三音節形容詞終止連体形　○●○
四音節形容詞終止連体形　○●●○

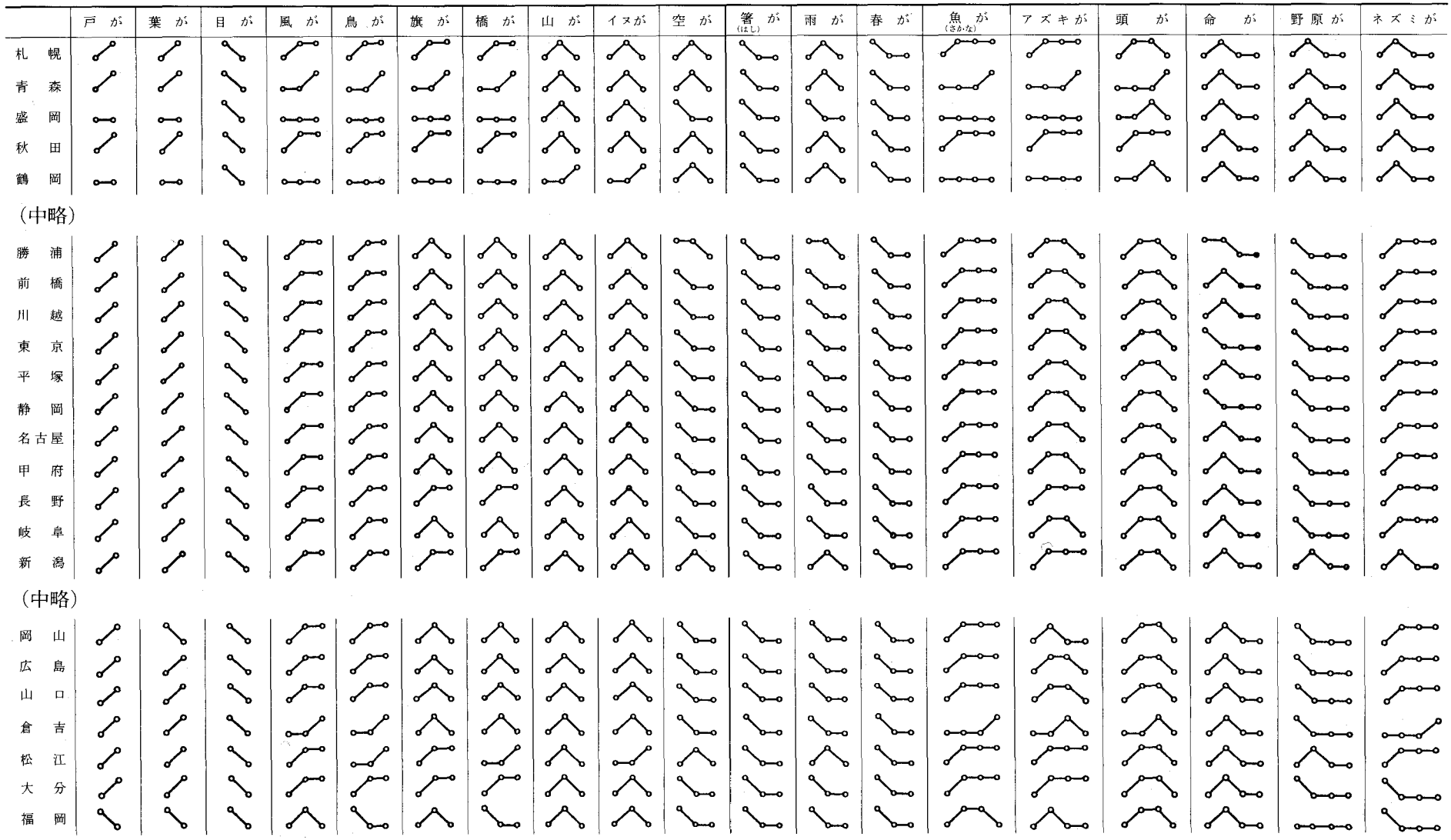
(表16) 二音節名詞の京都アクセントにおける変遷と東京アクセント

	平安末	鎌倉	室町	江戸	現代	東京
第一類	● ●	●● ●● ●▼	●● ●● ●▼	●● ●● ●▼	●● ●● ●▼	○● ○● ○●▼
第二類	● ○	●● ●○ ●○▽ ↑ ●○▼	●● ●○ ●○▽	●● ●○ ●○▽	●● ●○ ●○▽	○○ ●● ○●▽
第三類	○ ○	○○ ○○ ○○▼				
第四類	○ ●	○● ○● ○●▼	○● ○● ○●▼	○● ○● ○●▼	○● ○● ○○▼	●● ○○ ●○▽
第五類	○ ◓	○◓ ○● ○●▽ ↑ ○◓▼	○◓ ○● ○●▽	○◓ ○● ○●▽	○◓ ○● ○●▽	

(二)第四類・第五類名詞

先ず、東京式アクセント地域において、二音節第四類・第五類名詞のアクセントがどのようになっているかを見ると、表18の三種のものが存することになる。このBの型になっているアクセントについて金田一博

（表17）全国主要都市アクセント一覧表（金田一博士）



（表18）二音節第四類・第五類名詞の東京式アクセント

	第四類 広	第四類 狭	第五類 広	第五類 狭	地点
A	●○▽		●○▽		盛岡・前橋・川越・東京・平塚・静岡・名古屋・甲府・長野・岐阜・岡山・広島・山口・倉吉・大分・福岡
B	○●▽	●○▽	○●▽	●○▽	札幌・青森・秋田・鶴岡・新潟・松江
C	●●▽	●○▽	●●▽	●○▽	勝浦

士は次のようには述べておられる。(注87)

	空	雨	影	糸	石	紙
秋田	ソラ|ガ	アメ|ガ	カゲ|ガ	イト|ガ	イシ|ガ	カミ|ガ
茂原	ソラ|ガ	アメ|ガ	カゲ|ガ	イト|ガ	イシ|ガ	カミ|ガ
高田	ソ|ラガ	アメ|ガ	カゲ|ガ	イト|ガ	イシ|ガ	カミ|ガ
甲府	ソラ|ガ	アメ|ガ	カゲ|ガ	イト|ガ	イシ|ガ	カミ|ガ

（表続き）

	旗	胸	春	犬
（秋田）	ハタ|ガ	ムネ|ガ	ハル|ガ	イヌ|ガ
（茂原）	ハタ|ガ	ムネ|ガ	ハル|ガ	イヌ|ガ
（高田）	ハタ|ガ	ムネ|ガ	ハル|ガ	イヌ|ガ
（甲府）	ハタ|ガ	ムネ|ガ	ハル|ガ	イヌ|ガ

このような場合、上欄の「空」「雨」「影」「糸」のアクセントを見ると、秋田と茂原とが同じ型であり、高田と甲府とが同じ型である。この二つずつが同じ系統であろうか。ところが、その内容を調べてみると、秋田と茂原とで○○▽型になっているのは、第二拍が[a][e][o]のような広い母音の語に限っている。第二拍の狭い語は、下欄の「春」のように各地とも○○▽型で一致している。元来第一拍を高く発音していたのを、広い母音をもつ第二拍を高く発音するようになるというようなことは、自然に起こりやすいことである。とすると、秋田と茂原とでは何の交渉もなくても、独立に同一の変化を遂げて同じアクセントになったと考えていい。すなわち、この「空」「雨」「影」「糸」の四語は四地域ともそろって以前には○○▽型であったと想定され、その間の違いは重大なものではないことになる。

つまり、秋田方言や茂原方言で、二音節第五類名詞は、第二音節が狭い母音であるか、広い母音であるかによって、

第二音節が狭い母音　ハル|ガ（春）

第二音節が広い母音　アメ|ガ（雨）・カゲ|ガ（影）

のように分かれており、後者の第二音節が広い母音である場合の、アメ|ガ・カゲ|ガの形は、元来はアメガ・カゲガであったものが、第二音節が広い母音であるためにそこが高くなりアメ|ガ・カゲ|ガとなったものと推定されている。

しかし、筆者の立場に立つと異なった解釈になる。即ち、二音節第五類の京阪式アクセントは、古く、

ハルガ・アメガ・カゲガ

であった。この形からか、或いは、この形が下降調を失った

ハル|ガ・アメ|ガ・カゲ|ガ

の形からか、いずれかであるところに、(注88)次のアクセント変化、

二音節第二類四段活用動詞＋テ　○●▽→●○▽

二音節第二類動詞終止連体形　○●→●○

が起きると、これにひかれて、二音節第五類名詞のアクセントも、

○●▽→●○▽

○●→●○

の変化を起こすこととなった。

その際、次の二つの方言が生じた。

すべての二音節第五類名詞に変化が起きた方言　○●▽→●○▽

第二音節の母音の広狭によって　○●▽→●○▽

二つの型に分かれた方言　○●▽

即ち、第二音節がロの開きの広い母音の場合、●○▽への変化がさまたげられ、京阪式アクセントの形のままとどまった方言が生じたものと考えられる。ロの開きが広いというだけで、アクセントの山がその音節に移動したと考えるよりも、ロの開きが広い音節の場合には、もとの山を維持し続けたと考えた方が、より自然なのではないかと思われる。

ところで、そのような解釈をするためには、秋田方言では第四類名詞においても、

第二音節が狭い母音　ハ|シガ（箸）

第二音節が広い母音　ソラ|ガ（空）

と二つの型に分かれていることを整合性をもって説明する必要がある。この場合には、名詞単独の形と、一音節の助詞がつく形とを分けて考える必要がある。

第二音節が狭い母音　ハシ|（箸）→ハ|シ

ハシ|ガ→ハ|シガ

第二音節が広い母音　ソラ|（空）→ソラ|

ソラ|ガ→ソラ|ガ→ソラ|ガ

第二音節が狭い母音の語の場合、名詞単独のアクセントは、二音節第二類動詞に起きた○●→●○の変化にひかれて、○●→●○の変化を起こした。ところが、第二音節が広い母音の場合には、○●→●○にひかれる力よりも、もとのアクセントを維持する力の方が大きく、京阪式アクセントの形○●でとどまった。一音節の助詞がつく形は、○●▼であったから、東京式アクセントへの変化が阻止されると、文節アクセントももとの○●▼でとどまったものと見られる。この○●▼が、秋田方言などで○●▽で行われているのは、名詞単独形の時のアクセントが同じく○●であるというところから、第五類に合流したのであろう。

東京方言などのように、第四類・第五類名詞がすべて●○○になっている方言を東京式Aアクセント、秋田方言などのように、第四類・第五類名詞が、第二音節の母音の広狭によって二つの型に分かれている方言を東京式Bアクセントと呼ぶと、両者はどのような関係のものととらえることができるであろうか。A・B二つのアクセントの違いは、第二類四段活用動詞終止連体形に起きた○●▽→●○▽の変化と、第二類四段活用動詞連用形＋テに起きた○●→●○の変化とに、より強くひかれた方言がA、ひかれる力が弱く一部にしか牽引が実現していない方言がBということになる。そう解すると、A・B二つの方言の前後関係については、二つの可能性があることになる。即ち、

1、一部京阪式アクセントの形をとどめている方言が古く、その京阪式アクセントをとどめていた部分をも変化させたものがA方言である。

2、A・B両方言は、京阪式アクセントから二つに分かれて成立したものである。

今のところ、いずれの解釈が妥当であるのか明らかでないが、動詞連用形と終止連体形に起きた変化にひかれる変化が、一旦秋田方言のような段階で休止し、改めて東京方言のような形に進んだと考えるよりも、影響力がどこまで及んだかが二つの方言を生み出したとする後者の方が蓋

然性が高いのではないかと考える。

なお、第四類・第五類のアクセントが、第二音節の母音の広狭によって二つの型に分かれている方言でありながら、そのアクセントの形が秋田方言などとは異なる方言に、先の表に示したように勝浦方言があって、東京式Cアクセントと表示した。このアクセントがどのようにして成立したのかは明らかでないが、恐らく秋田方言の形を経て、更に変化したものなのであろう。一つの可能性としては、○●○と●○○とが行われているうちに、○●○が●○○にひかれて●●○に変化したことが考えられる。

京阪式アクセント
↙ ↘
東京式Bアクセント→東京式Cアクセント　東京式Aアクセント

分布から言えば、東京式Bアクセントと東京式Cアクセントとは、東京式Aアクセントに比べて、京阪式アクセント地域からは遠い地域に分布していると言える。

東京式アクセントにA・Bの二つのタイプがあるということは、第四類・第五類名詞に変化を起こさせた力が、直接的で強力な力ではなく、動詞連用形＋テに起きた変化にひかれたものであるという解釈を支持している。しかし、ひかれた変化であるとすれば、ひいた変化の例数が他の変化を引き起こすほど多い必要がある。そこで、今、およその目安として、例数を、金田一語彙[注89]によって比べると次のようになっている。

二音節第二類四段動詞　六九語
二音節第二類一段動詞　五七語　計一二六語
二音節第四類名詞　六七語
二音節第五類名詞　四〇語

二音節第二類四段動詞連用形＋テに起きた変化は、既に見たように、二音節第二類一段動詞連用形＋テにも広がったから、両者を合わせると、相当大きな語数と言える。そこに起きた変化が二音節名詞に影響を与えたことは十分考えられるところである。

㈢第一類・第二類・第三類名詞

次に、右に東京式アクセント地域と見た地域について、二音節第一類・第二類・第三類名詞のアクセントを見る。右に見た東京式Aアクセント・東京式Bアクセント・東京式Cアクセントに分けて、第一類・第二類・第三類のアクセントを見ると、表19のように整理することができる。

第一類の形のうち、fは、第二音節の母音の広狭によって、a・bの形とc・dの形とに分かれているものである。これをもって見ると、a・bの○●▼の形は第二音節の母音が広い時に起こりやすい形に統一されているもの、c・dの形○○▼は第二音節の母音が狭い時に起こりやすい形に統一されているものと理解される。即ち、鎌倉・室町時代間の京阪式アクセントの●●▼に語頭低下が起きた形○●▼がa・bの形で、c・dの形は、第二音節の母音が狭い語の場合に更に第二音節まで低くなり○○▼となったものが、第二音節の母音が広い語にまで広がったものと見られる。fの松江方言は、○●▼と○○▼の両方が第二音節の母音の広狭によって起きているものと見られる。eは、○○▼が更に山を後退させたものか。gの福岡方言の形のうち、第二音節が広母音である時の形○●▽は、c・dの○○▼の形から、三音節第二類動詞終止連体形に生じた○○●→○●○の変化にひかれて、生じたものであろう。それに対して、第二音節が狭母音である時の形が●○▽であるのは、第二音節が狭母音であるために○○▼→○●▽の変化が起こり得ず、○○▼でとどまっているうちに、低明示のための直前音節の隆起が生じ、●○▽となったものであろう。

次に第三類名詞のアクセントを見る。ここでは、a～e・gの方言で

（表19）二音節第一類・第二類・第三類名詞の東京式アクセント

	第一類	第二類	第三類	東京式Aアクセント	東京式Bアクセント	東京式Cアクセント
a	○●▼	○●▽	○●▽	前橋・川越・東京・平塚・静岡・名古屋・甲府・岐阜・岡山・広島・山口		勝浦
b	○●▼	○●▼	○●▽	長野・大分	札幌・秋田・新潟	
c	○○▼	○●▽	○●▽	倉吉		
d	○○▼	○○▼	○●▽		青森	
e	○○▽	○○▽	○●▽	盛岡		
f	○○▼ ○●▼	○○▼ ○●▼	○○▼ ○●▽		松江	
g	●○▽ ○●▽	●○▽ ○●▽	○●▽	福岡		

このように見ると、第二類名詞は、ある方言では第三類に合流し、別の方言では第一類に合流したということなのではないか。鎌倉・室町時代における京阪式アクセントにおける第二類名詞のアクセントは●○▽であったと推定されている。[注91] そして、既に見たように第三類・第一類名詞諸形は鎌倉時代の京阪式アクセントから次のようにして生じたと推定された。

第三類　○○▼→○○▼
　　→○●▽

第一類　●●▼→○●▼→○○▼→○○▽
　　→○●▽
　　→●○▽

第二類名詞の場合の諸形の相互関係も同じように推定してよいであろう。そうすると、第二類の鎌倉時代の京阪式アクセントの形●○▽から、○●▽の形と、○●▼の形との両形に転じていく経路としては、次のような変化をとったと見るのが最も自然ではないかと見られる。

●○▽→●●▽→○●▽（a・c・g）
　　→○●▼（b・f）

●●▽に語頭低下が起きたのが○●▽、●●▽にアクセントの山の後退が起きたのが○●▼、ということになる。二つの異なる変化が生じたのは、第三類名詞にひかれたか、第一類名詞にひかれたかの違いであると見られる。第三類にひかれるか、第一類にひかれるかの違いが方言間に生じているのは、或いは、京阪式アクセントの形から東京式アクセントの形へと変化した時期に、第一類名詞と第三類名詞とで前後があり、そ○●▽の形になっており、松江方言のみ、第二音節の母音の広狭によって○●▽と○○▼に分かれている。分かれている松江方言の形に注目すると、第二音節の母音が広母音の時の形○●▽は、鎌倉時代の形○○▼[注90]から、三音節第二類動詞の終止連体形に生じた○○●→○●○の変化にひかれて、生じたものであろう。第二音節が狭母音の場合には、右の変化にひかれても、狭母音であるために高になることが実現せず、もとの形○○▼でとどまっているのであろう。

次に、第二類名詞について考える。ここで注目すべきことは、先の表19を見ると、第二類名詞は、ある方言では第三類名詞と同形となっており、別の方言では第一類名詞と同形になっているということである。

第一類／第二類・第三類　a・c

第一類・第二類／第三類　b・d・e・f・g

れが方言によって逆転していたことが考えられるが、明らかでない。

現代の東京式アクセントの諸形から、第二類名詞に●○▽→●●▽の変化が生じたと推定したのであるが、この変化はどのような力によって生じていたと考えられるであろうか。今のところ考えられるのは、既に見た二音節第一類動詞の連体形に●○→●●の変化が生じたこと、それにひかれて連用形＋テの形に●○▽→●●▽の形が生まれていたことが考えられる。

或いは、二音節第二類名詞における●○▽→●●▽への変化は、二音節第四類・第五類名詞に、○●→●○、○●▽→●○▽の変化が起き、接近してきたために、これを避けようとする力が加わって生じた変化であったことも考えられる。

なお、松江方言の第二類名詞の形、○●▼（第二音節広母音）／○○▼（第二音節狭母音）は、第一類名詞にひかれて

●○▽→●●▽→○●▼

の変化を生じた際、第二音節が狭母音である語の場合、更に山が後退して○○▼となったのであろう。

このように見ると、第二音節名詞の東京式アクセントを複雑なものにしているのは、第一類・第二類・第三類名詞であると言えそうである。第四類・第五類名詞の場合には、東京式アクセント地域において、先に見たように、東京式Aと東京式B（東京式Cは稀な形）の二つの形で落ちついていた。しかも、その二つの形も同一方向への変化であった。このようなことが生じたのは、東京式アクセントへの変化の直接の原因が○●○→●○○、○●→●○の変化にあって、第四類・第五類名詞に起きたからであると考えられる。それに対して、第一類・第二類・第三類名詞、特に前二者の場合には、第四類・第五類名詞の場合のような強烈な力が働かなかったために、様々な変化を生じることになったのであろう。二音節名詞の全国諸方言のアクセントが多様であるのは、右のように考えてよく理解できるように思われる。

東京式アクセントの下位区分としては、A～Cとa～gとを組み合わせて、東京式Aaアクセント、東京式Bbアクセントなどのように呼んではどうかと思われる。

㈣まとめと入れかわりの可能性

二音節名詞について、京阪式アクセントから東京式アクセントへの分離を、類毎に見た。東京アクセントについてまとめると、表20のようになる。変化の説明としては、第二類名詞の説明の部分にいくらか問題を残すが、他は自然な変化と理解できるのではないかと思われる。

また、なお検討しておかなくてはならないことは、第四類名詞と第二

（表20）二音節名詞における東京アクセントへの変化

類	変化	原因
第一類	●●→○● ●●▼→○●▼	語頭低下
第二類	●○→●●→○● ●○▽→●●▽→○●▽	第一類動詞連体形・連用形にひかれて 語頭低下
第三類	○○→○● ○○▼→○●▽	三音節動詞終止連体形にひかれて
第四類	○●→●○ ○●▼→●○▽	二音節第二類動詞終止連体形にひかれて
第五類	○◐→○●→●○ ○◐▽→○●▽→●○▽	二音節第二類動詞＋テにひかれて

類名詞との入れかわりの問題がある。東京アクセントについて、類が衝突することなく入れかわり得たかどうかが問題となる。しかし、この点については、先の表20のような変化が起きたと想定すれば、互いに衝突することなく、変化は生起しうる。

（表21）一音節名詞の京都アクセントにおける変遷と東京式アクセント

	平安末	鎌倉	室町	江戸	現代	東京
第一類	●	●●・●●▼	●●・●●▼	●●・●●▼	●●・●●▼	○▼
第二類	◓	●○・●○▽	●○・●○▽	●○・●○▽	●○・●○▽	○▼
第三類	○	○○・○○▼	○●・○○▼	○●・○○▼	○●・○○▼	●▽

㈤類の統合

従来二音節名詞のアクセントを研究する際最も重視されて来た視点は類の統合ということであった。既に見たように、筆者の視点からは、従来言われてきた違いは、次のようになる。

1／2・3／4・5　方言　a・c方言
1・2／3／4・5　方言　b・d・e・f・g方言

そして、その違いは、第二類名詞が、第一類・第三類のいずれにひかれたかによって違いが生じたものと解された。

筆者の視点からすると、東京式アクセントの分離は、動詞連用形＋テの形に生じた変化が直接の原因であったと考えるので、第四類・第五類がどのようになっているかが、第一類・第二類・第三類、特に第一類・第二類がどのようになっているかよりも重要であると考えられ、そう考えると、A方言・B方言の違いの方が、a～f方言の違いよりもより重要なのではないかと考える。(注92)

五、一音節名詞における東京式アクセントへの変化

次に一音節名詞における、京阪式アクセントから東京式アクセントへの変化を見る。一音節名詞の京阪式アクセントにおける変遷に、東京式アクセントを対比して示すと表21の通りである。(注93) 東京式アクセントの地域では、一音節語は長音を失って、

第一類　●・●▼
第二類　●・●▽
第三類　○・○▼

となっていたのではないかと見られる。二音節第一類動詞の終止連体形が●○→●●の変化を起こし、その連用形＋テの形も一時●○▽から転じて●●▽の形になり、二音節第二類名詞＋一音節助詞の形がやはり●○▽から転じて●●▽の形になると、一音節第二類名詞＋一音節助詞の場合も、

●▽→●▼

の変化を起こす動きがあったのではないか。そこへ、二音節第二類動詞連用形＋テにおける○●▽→●○▽の変化にひかれて、その終止連体形に○●→●○の変化が起き、更に、それにひかれて、二音節第四類・第五類名詞も○●→●○の変化を起こすと、一音節名詞第三類も○▼→●▽の変化が起きたのであろう。そうすると、一音節第二類名詞＋助詞の形も●▼の形で定着し、第一類と第二類の別がなくなったのであろう。そして、合流したこの第一類・第二類名詞の形●▼は、労力の節約と、統制的機能を果たす形にむかって、語頭が低下し、○▼となったのであろう。これが、東京アクセントをはじめとする多くの東京式アクセント地域に起きた変化ではないかと見られる。

右の変化とは異なる変化をしているのは、先の金田一博士の表では、

岡山方言と福岡方言とである。

［岡山方言］

第一類　○▼
第二類　●▽
第三類　●▽

［福岡方言］

第一類　●▽
第二類　●▽
第三類　●▽

一音節名詞＋助詞において、強力に働いた変化の力は、他のケースでも同じであるが、二音節第二類動詞連用形＋テに起きた変化からの力、即ち、○▼→●▽の変化であった。それに比べると、●▽→●▼の変化や、●▼→○▼の変化は強力なものではなかった。そのために、一音節第二類名詞＋助詞のアクセントが、もとの形のまま●▽の形でとどまっているのが岡山方言と福岡方言なのであろう。福岡方言は、第二類と第三類とが合流することによって、第一類名詞のアクセントさえ合流させてしまった方言なのではないか。早田輝洋『博多方言のアクセント・形態論』（九州大学出版会　一九八五・四）によると、福岡・博多の一音節名詞のアクセントは次のように見える。同書では年輩層と若年層とが区別されているが、ここには両者の別を無視して引く。

第一類名詞

［福岡］

●」　瀬
●　柄・緒・蚊・子・血・戸・帆

［博多］

●・●」　緒・帆
●　柄・蚊・子・瀬・血・戸

第二類名詞

［福岡］

●・●」　鵜・矢
●　名・葉・日・藻

［博多］

●」・●　鵜・矢
●　名・葉・日・藻

第三類名詞

［福岡］

●・●」　絵・尾・木・酢・田・手・根・野・火・目・芽・夜・輪
●　粉・荷・屁・穂・湯

［博多］

◓　箕
●・●」　絵・木・酢・田・手・荷・根・野・火・屁・穂・目・芽・湯・輪
●　尾・粉・夜

即ち、●▽のほかに●▼の形が記録されている。●▼の形は、合流して第二類・第三類名詞が第一類名詞の方に合流したもの、●▽の形は、逆に、第一類名詞が第二・第三類の方に合流したものと解される。

一音節名詞の三類のアクセントが一つに合流する時、その形が●▽又は●▼であって、○▼でないことは、東京式アクセントへの変化が、音便の定着によって生じた、○●○→●○○、○●→●○の変化が直接の原因であるとする筆者の説を支持しているように思われる。

（表22）三音節名詞の京都アクセントにおける変遷と東京アクセント

	平安末	鎌倉	室町	江戸	現代	東京
第一類	●●●	●●●●●●▼	●●●●●●●▼	●●●●●●●▼	●●●●●●●▼	○●●●●●▼
第二類	●●○	●●●●●○●○▽↑●●○▼	●●●●●○●○▽	●●●●●○●○▽	●●●●●○●○▽	○●●●●●▽
第三類	●○○	●○○●○○○▽↑●○○▼	●○○●○○○▽	●○○●○○○▽	●○○●○○○▽	●○○●○○○▽
第四類	○○○	○○○○○○○▼	●●●●●○▽	●●●●●○▽	●●●●●○▽	○●●●●●▽
第五類	○○●	○○●○○○▼	●●●●○○○▽	●●●●○○○▽	●●●●○○○▽	●●●●○○○▽
第六類	○●●	○●●○●●●▼	○●●●●●●▼	○●●●●●●▼	○●●●●●●▼	○●●●●●●▼
第七類	○●○	○●○○●○○▽↑○●○▼	○●○●●○○▽	○●○●●○○▽	○●○●●○○▽	●○○●○○○▽

（表23）三音節第七類名詞の東京式アクセント

	形	地点
A	●○○（▽）	勝浦・前橋・川越・東京・平塚・静岡・名古屋・甲府・長野・岐阜・岡山・広島・山口・倉吉・大分
B	○●○（▽）	札幌・青森・盛岡・秋田・鶴岡・新潟・松江
C	○○○（▽）	福岡

六、三音節名詞における東京式アクセントへの変化

㈠京阪式アクセントの変遷と東京式アクセント

次に、三音節名詞における東京式アクセントへの変化について検討する。京阪式アクセントの変遷と東京式アクセントとを示すと表22のようになっている。(注94)

三音節名詞の場合も全国各地の調査が進んでいるから、東京式系アクセントの形全体の中で、東京アクセントへの変化をとらえるようにしたい。

㈡第七類名詞

第七類名詞は、東京式アクセント方言において、表23のA・B・C三つの形で実現している。このうち、Aの●○○の形は、今までも度々見て来た、二音節第二類動詞連用形＋テに起きた○●▽→●○▽の変化にひかれて生じたものであろう。

なお、ここに、ひとつの目安として金田一語彙によって、関係所属語数を調べると次のようになっている。

二音節第二類四段活用動詞　六九語
二音節第二類一段活用動詞　五七語
三音節第七類名詞　一七語

語数の上からも、前二者の動詞の活用に生じたアクセントの変化が、三音節第七類名詞に与えた影響は十分考えられる。

Bの○●○の形は、京阪式アクセントと同じ形をしている。これはどのように説明できるであろうか。ここで注目すべきは、Bの○●○の形をしている地点が、二音節名詞の第四類・第五類のアクセントにおいて、一グループをなしていた地点と共通するところが大きいということである（表24）。即ち、二音節第四類・第五類名詞が●○○に変化していた方言では、三音節第七類名詞も●○○に変化しており、二音節第四類・

（表24）二音節名詞と三音節名詞とのアクセント分布の相関性

三音節名詞＼二音節名詞	A ●○○	B ○●○／●○○	C ●●○／●○○
A ●○○（▽）	前橋・川越・東京・平塚・静岡・名古屋・甲府・長野・岐阜・岡山・広島・山口・倉吉・大分		勝浦
B ○●○（▽）	盛岡	札幌・青森・秋田・鶴岡・新潟・松江	
C ○○○（▽）	福岡		

第五類名詞が第二音節の母音の広狭によって○●○と●○○に分かれていた方言では、三音節第七類名詞が○●○となっているのである。二音節第四・五類名詞において東京式系アクセントが二つのタイプに分かれているのは、既に見たように、二音節第二類動詞連用形＋テに起きた○●▽→●○▽の変化にひかれるということが強く起きたか、さほど強くなかったかの違いと推定された。三音節第七類名詞の場合も、Aは強くひかれた方言、Bはひかれることが実現しなかった方言と説明することができる。Bが起きている方言では、○●▽→●○○の変化にひかれても、変化が実現せず、従って、京阪式アクセントの形でとどまっているものと解される。

二音節第四類・第五類名詞の場合になされていた解釈と同じように、三音節第七類名詞の場合も、Aの方言と同じく●○○であったものが、○●○に変化したのがBの方言であると考えてみることもできないわけではない。しかし、三音節第七類名詞には、第二音節が広母音の語もあれば、狭母音のものもある。(注95)

第二音節広母音　辛子・便り・卵・盥・千鳥・椿・畠・一つ・一人・鉛・緑

第二音節狭母音　苺・後・蚕・薬・鯨

右の解釈を取ろうとすると、●○○が、第二音節広母音の語の時に○●○に変化し、その形が、更に第二音節が狭母音の語にまで広がったとでも説明せざるを得ない。そのような説明は、京阪式の形でとどまったとする説明に比べて複雑である。

そのように考えて、三音節第七類名詞における○●○の形を京阪式アクセントの形をとどめているものと解する時、二音節名詞第四類・第五類の場合には○●○→●○○の変化の影響も受けて、●○○と○●○との両形が行われているのとの違いは、なぜ生じたのであろうか。二音節第二類動詞連用形＋テは、三音節の単位であり、その内部は二音節自立語＋一音節助詞の構造をしている。二音節第五類名詞＋助詞は三音節単位であり、構造も同じくしているから、影響を受けやすかったものと考えられる。それに対して、三音節第七類名詞は、三音節単独とすると自立語だけとなり、構造が異なり、自立語＋一音節助詞でとらえると、構造は同じになるけれども、四音節単位になって異なるために、影響を受けることが小さかったのであろう。

福岡方言の形○○○▽がどのようにして生まれたのかは今のところ明らかでない。早田『博多方言のアクセント・形態論』によれば、福岡における三音節第七類名詞は次のように行われているようである。

［福岡］

●○○　蚕・兜・便り・千鳥・椿・野原・広さ・緑・病
●○○・○●●　後・鯨
○●●　苺・鉛・畑
○●○・○●●　薬

○●○　卵・一つ・一人
○●●　辛子・盥

［博多］
●○○　兜・蚕・鯨・千鳥・椿・野原・広さ・緑・病
●○○・○●●　後・辛子・鉛
●○○・○●○・○●●　苺・便り
○●●　盥・鉛
○●○・○●●　薬
○●○　卵・一つ・一人

福岡・博多とも現代では●○○の形が多く、Aの方言になる。(注96)

(三)第五類名詞

第五類名詞は、東京式アクセント方言において、表25のA・B・Cの形で実現している。

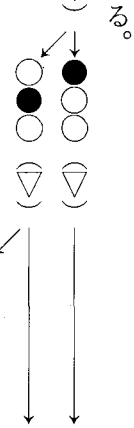
Aの●○○（▽）の形は、京阪式アクセントの室町時代の形●○○（▽）がそのままとどまっているものであろう。●○○（▽）の形が安定した形であったからである。それに対して、Bの○●○（▽）の形は、それよりも一つ古い京阪式アクセントの鎌倉時代の形○○●（▼）から、三音節動詞終止連体形に生じた○○●→○●○の変化にひかれて、生じたものであろう。Aが実現している地域よりも、Bが実現している外の地域の方で○○●（▼）から●○○（▽）への変化が遅れていたものと見られる。なお、京阪式アクセント地域においても生じている○○●（▼）から●○○（▽）への変化は、低明示のための直前音節の隆起と見られる。

（表25）三音節第五類名詞の東京式アクセント

	形	地点
A	●○○（▽）	東京・静岡
B	○●○（▽）	札幌・青森・盛岡・秋田・鶴岡・前橋・川越・平塚・名古屋・甲府・長野・岐阜・新潟・岡山・広島・山口・倉吉・松江・大分・福岡
C	●●○（▽）	勝浦

ここに、Bに新しく生じた○●○の形は、○●○→●○○の変化にひかれることはなかったのかという疑問もあり得るが、○○●→○●○の変化は○●○→●○○、○○●○→○●○○の変化よりも遅れて起きた変化であったから、○●○はその形でとどまったのであろう。

Cの勝浦方言の形●●○（▽）は、二音節名詞第四類・第五類のところでも類似の形が生じていたところで、○●○（▽）から転じた形ではないかと見られる。



なお、この類の形に近い「焔」という語の東京方言は、○●○と●○○との両形で実現する。これは、「焔」の鎌倉時代のアクセントが○○●（▽）であったために、第五類よりも遅くまで○○●の形をとどめていたために、そこから○●○の形が生まれ、一方遅れて、●○○の形も実現したために両形が行われるのであろう。

(四)第六類名詞

第六類名詞は、東京式アクセント方言において、表26のA・B・C・Dの形で実現している。

Aの○●●（▼）の形は、京阪式アクセントの鎌倉・室町時代間の形

（表26）三音節第六類名詞の東京式アクセント

	形	地点
A	○●●（▼）	勝浦・前橋・川越・東京・平塚・静岡・名古屋・甲府・長野・岐阜・岡山・広島・山口・松江
B	○●○（▽）	札幌・青森・盛岡・秋田・鶴岡・新潟
C	○○○（▼）	倉吉
D	●○○（▽）	大分・福岡

○●●（▼）がそのままとどまっているのであろう。この形が安定した形であったからである。Bの○●○（▽）の形は、どのようにして生まれて来た形であるのか明らかでない。今のところ、筆者は二つの可能性を考えている。一つは、第六類名詞が現代京都方言で○○●となっているところに注目して、東北地方では室町時代に○○●の形に転じており、この形に、三音節動詞終止連体形に生じた○○●→○●○の変化が影響を与えたのではないかということである。しかし、第六類名詞が東北地方で室町時代に○○●になっていたとして、音便の定着によって生じた○○●→○●○の変化の力がなお働いていたかどうかという問題がある。もう一つの可能性は、三音節第三類動詞の終止連体形○●●（歩ク など）が、近づいて来た第二類動詞の活用にひかれて、○●○に転じると、この○●●→○●○の変化にひかれたことが考えられる。しかし、こちらの想定には、第三類動詞の数が少ないという問題がある。

福岡のアクセントについては、早田『博多方言のアクセント・形態論』によると次のようになっているようである。

［福岡］

○●●　　菖蒲・孰・鰻・蛙・鴎・芒・李・背中・団子・田圃・裸・跣足・蚯蚓・蓬

○●●・○●●］　　虱

●○○・○●●　　兎・雀・燕・鼠・左・雲雀

○●○・○●●　　大人・狐

●○○　　高さ・長さ

［博多］

○●●　　菖蒲・鰻・蛙・鴎・虱・背中・裸・跣足

○●●・○●●］　　田圃

●○○・○●●　　兎・芒・雀・李・団子・燕・鼠・左・雲雀・蚯蚓・蓬

○●○・○●●　　孰・大人・狐・誠

●○○　　高さ・長さ

主として行われている形はAと同じく○●●で、●○○の形はそれと併用されることのある形のようである。●○○は、あるいは、この語が複合語の後部要素となる時のアクセントにひかれたものか。

倉吉方言の形○○○がどのようにして生まれたのかは今のところ明らかでない。平山輝男『全国アクセント辞典』によれば、札幌方言の第六類名詞にも、○●○の形とともに○○○の形の語が見える。

(五)第三類名詞

第三類は「所属する語彙が少なく、独立性の弱い型」(注97)であるとされている。東京アクセントでは多く●○○の形になっており、鎌倉・室町時代の京阪式アクセントの形と同じ形をしている。安定した形であるために変わらなかったのであろう。「東京を含めて東京式諸方言では変異が多いが、全体としてハタチガ型が最も普通。」(注98)という。●○○の形からどのようにして○●○の形が生まれたのかは明らかでない。

（表27）三音節第一類名詞の東京式アクセント

	形	地点
A	○●●▼	札幌・秋田・勝浦・前橋・川越・東京・平塚・静岡・名古屋・甲府・長野・岐阜・新潟・岡山・広島・山口・松江・大分
B	○○○▼	青森・倉吉
C	○○○▽	盛岡・鶴岡
D	○●●▽	福岡

(六)第一類名詞

第一類名詞は、東京式アクセント方言において、表27のA・B・C・Dの形で実現している。東京方言をはじめ、多くの東京式アクセントでは、第一類名詞はAの○●●▼の形をしている。これは、京阪式アクセントの鎌倉・室町時代の形●●●▼に、労力の節約と、統制的機能の獲得とのために語頭低下が生じたものであろう。

その他のB・C・Dは次のような関係か。

●●●▼→○●●▼→○●●▽
　　＝
○○○▽→○○○▼

ただし、現代福岡方言のアクセントは、早田『博多方言のアクセント・形態論』によれば次のようになっている。

［福岡］

○●●　葵・価・巌・嗽・己・終・飾・鰹・屍・竈・河原・轡・位・小鳥・仔牛・今年・氷・小山・障り・舅・障子・仕業・鱸・相撲・粽・序・机・使い・常盤・泊り・名前・膠・寝言・望み・昇り・初・鼻血・埴輪・庇・額・柩・羊・日和・布海苔・味方・帝・汀・操・霙・やもめ・涎・鎧・渡り

○●●・○●●○　霰・筏・田舎・霞・形・着物・子供・衣・魚・印・薪・畳・隣・港・都・昔

●○○・○●●　錨・漆・踊り・鎖・車・煙・麹・桜・息子・櫓・柳

○●●・○●●］　悟・二十日・六日・矢尻

●○○　鰯・盛り・二日

［博多］

○●●　桂・深山

○○●］　夫・三日・奴

○○●　四日

●○○・○●●　葵・価・巌・嗽・終・飾・霞・河原・轡・位・小山・悟・障・障子・仕業・相撲・机・序・泊り・初・柩・二日・味方・汀・操・霙・八日・鎧・渡り

○●●・○●●　霰・筏・田舎・鰯・己・箒・形・鰹・屍・竈・着物・小鳥・仔牛・今年・子供・衣・魚・盛り・印・薪・使い・常盤・隣り・膠・寝言・鼻血・埴輪・庇・額・羊・日和・帝・港・都・昔・やもめ・涎

●○○・○●●］　錨・漆・踊り・鎖・車・煙・麹・氷・桜・舅・鱸・粽・名前・昇り・二十日・布海苔・息子・櫓・柳

●○○　六日・矢尻

桂・深山

●○○・○●●・○●●」　日照
○●○・○●●」　畳
○○●　夫・三日・四日
○○●・○●○　奴
○●○　今宵

現代福岡・博多方言では、○●●が普通の形で、○●●」は稀にしか行われていないようである。○●●」の形の核がどのようにして生じるようになったのか。第四類名詞に合流したものかと見られるが、なぜ第四類名詞に合流したのかは明らかでない。

(七)第二類名詞

第二類名詞は、東京式アクセント方言において、表28のA・B・C・D・E・Fの形で実現している。

鎌倉・室町時代における京阪式アクセントの形は●●○（▽）であるから、東京方言をはじめとするAの形の方言は、語頭の●●のケースにアクセントの山の後退が生じた形と言える。これは、労力の節約と、統制的機能獲得のために生じた形と見られる。

（表28）三音節第二類名詞の東京式アクセント

	形	地点
A	○●●（▽）	勝浦・前橋・川越・東京・平塚・静岡・名古屋・甲府・岐阜・広島・山口
B	○●●（▼）	札幌・秋田・長野・新潟・松江・大分
C	○●○（▽）	岡山・福岡
D	○○●（▽）	倉吉
E	○○○（▽）	盛岡・鶴岡
F	○○○（▼）	青森

Bの○●●（▼）は、Aの形から助詞まで高く発音されるようになって生じたものであろう。C・D・E・Fの形は、●●○（▽）又は、A・Bの形から自然に生じて来るものではない。C・D・E・Fの形になっている方言について、その形を見てみると、他の類の形に同じ形がある。

C　○●○（▽）岡山・福岡　第五類
D　○○●（▽）倉吉　第四類
E　○○○（▽）盛岡・鶴岡　第一類
F　○○○（▼）青森　第一類

あるいはそれらの類へ合流したものか。

(八)第四類名詞

第四類名詞は、東京式アクセント方言において、表29のA・B・C・Dの形で行われている。

東京方言をはじめとする多くの方言では○●●（▽）の形で行われている。第四類名詞の鎌倉時代の形は、○○○（▼）、室町時代の形は●●○（▽）であったから、○●●（▽）の形は、室町時代の形の、語頭

（表29）三音節第四類名詞の東京式アクセント

	形	地点
A	○●●（▽）	札幌・勝浦・前橋・川越・東京・平塚・静岡・名古屋・甲府・長野・岐阜・新潟・岡山・広島・山口・松江・大分・福岡
B	○●●（▼）	秋田
C	○○●（▽）	盛岡・鶴岡・倉吉
D	○○○（▼）	青森

の●●にアクセントの山の後退が生じた形と見られる。Bの○●●▼は、Aの形から助詞まで高く発音されるようになったものであろう。Cの○○●（▽）は、Aに更にアクセントの山の後退が生じたものか。Dは、京阪式アクセントの一つ古い鎌倉時代の形をとどめているものであるか、Cから転じたものであるかのいずれかであろう。

㈨三音節名詞の東京アクセント

音節数が多い語になるほど、時代間、方言間におけるアクセントの型の対応は複雑になってくる。それは、一つには、音節数が多くなるほど複合語が多くなり、しかも、複合語の要素が意識されて、アクセントに関与してくるということがあるからであろう。それと同時に、東京式アクセントへの変化の直接の原因が、○●○→●○○の変化であって、最も強力に変化したのは、第七類名詞であり、その他の類の名詞は大きく変化しなくてはならない必然性がなかったことによるのであろう。そのような事情のために、三音節名詞の場合も、二音節名詞の場合に比べると、いまだ十分に説明し切れないものが残っている。しかし、大筋においては、変化ははっきりしており、特に、東京アクセントについて見ると、いずれも京阪式アクセントの室町時代の形からきれいに説明することができる。今、東京アクセントの分離の部分だけを、取り出して整理すると表30のようになる。

（表30）

類	語例	京阪式アクセント室町時代の形	現代東京方言	変化
第一類	形	●●●（▼）	○●●（▼）	語頭低下
第二類	小豆	●●○（▽）	○●●（▽）	アクセントの山の後退
第三類	二十歳	●○○（▽）	●○○（▽）	変化なし
第四類	頭	●●○（▽）	○●●（▽）	アクセントの山の後退
第五類	命	●○○（▽）	●○○（▽）	変化なし
第六類	兎	○●●（▼）	○●●（▼）	変化なし
第七類	兜	○●○（▽）	●○○（▽）	動詞＋テの変化にひかれて

㈩類の統合

三音節名詞については類の統合という視点からの研究はなされていないのではないかと見られるが、ここでその視点から整理しておくと、東京式諸方言のアクセントは次のようになっている。（ただし、第三類は金田一博士の表にないので除外する）

四つの型を区別する方言

1・2／4／5／6・7　大分

1・6／2・4／5／7　勝浦・前橋・川越・平塚・名古屋・甲府・岐阜・広島・山口・倉吉

1・6／2・5／4／7　岡山

1・2・6／4／5／7　長野

1・4／2・5／6／7　福岡

三つの型を区別する方言

1・2・6／4／5・7　松江

1・2／4／5・6・7　札幌・盛岡・鶴岡・新潟

1・6／2・4／5・7　東京・静岡

二つの型を区別する方言

1・2・4／5・6・7　青森・秋田

従来は、型の区別の類の多い方言から、型の統合が起きて、次第に型の数が少なくなっていったと考えられてきた。三音節名詞を例にとって言えば、四つの型を区別する方言から三つの型を区別する方言へ、更にそれから二つの型を区別する方言へと変化は進んでいったというように考えられて来た。しかし、先に見たように、それらの違いは、いずれの方言の形も、室町時代の五つの型を区別していたところから、それぞれに生まれた可能性が十分に考えられるのである。なかには、次第に型の数を少なくしていったケースもあるかも知れないが、大筋としては先のように考えた方が、それらの地理的分布を見る時は、自然であるように思われる。

東京アクセントにおいては、歴史的変遷を遂げて出来たアクセントの型は、大きくは、次の三つの型であった。

○●●（▼）　平板型　（第一類・第六類より）
○●●（▽）　尾高型　（第二類・第四類より）
●○○（▽）　頭高型　（第三類・第五類・第七類より）

しかし、統制的機能を果たす形、第一音節と第二音節の高低が異なる形という条件を満たす型としては、

○●○（▽）

の型があり、複合語の要素のアクセントが関係して、この型になるものがあった。

室町時代京阪式アクセント　東京アクセント
●○○　　○●○　小麦(注99)

このような語はほかにもあった。また、第三音節に特殊音節が立つために○●○に実現する語もあった。(注100)

機械・試験・付近

こうして、東京式アクセントはn＋1型アクセントとなったものと考えられる。

七、四音節名詞以上の語における東京式アクセントへの変化

以上において筆者の基本的な考え方は一応示した。四音節名詞以上の語における京阪式アクセントから東京式アクセントへの変化も右に論じてきた基本的な考え方で説明することができる。そのことについては、別稿を用意した。

第二章　シラビーム方言アクセントは、いつ、どのようにして、なぜ生じたか

第一節　シラビーム方言アクセント分離の直接の原因

第一章において、シラビーム性を帯びたモーラ方言である、東京式アクセント地域の方言のアクセント体系が、京阪式アクセントから、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかについて、筆者の解釈を述べた。筆者の解釈では、シラビーム性を帯びたモーラ方言では、特殊音節が、一つの音節として自立しているけれども、存在として弱いために、単独でアクセントの山を担うことができなかったと考えられた。音便が定着すると、そのことが直接の原因となって、京阪式アクセントとは異なる姿に転じて行かざるを得なかったものと考えられた。

そのように考えることが妥当であるならば、シラビーム方言地域においては、また、異なった変化をせざるを得なかったことが予想される。この方言では、特殊音が独立性をもたないため前の音節と一体となって一つの音節を構成するのが特徴である。即ち、この方言では、特殊音は

前の音節が高ければ、特殊音も前の音節と一体となって一つの音節となり高く、前の音節が低ければ、特殊音も前の音節と一体となって一つの音節となり、低くなったと考えられる。

第二節　シラビーム二型アクセントの発生

先ず、シラビーム方言の代表的なものの一つである、鹿児島方言の二型アクセント[注10]について考える。

一、音便の定着による変化

東京式アクセントの分離の場合を勘案して、音便が定着したことによって、アクセントの型がかわらざるを得なくなった語類を見る。

㈠二音節動詞連用形＋テの音便とアクセント

先のように考えた上で、京阪式アクセントから東京式アクセントへの分離の直接の原因となったと考えられる。第一の点、二音節動詞連用形＋テのアクセントの場合から考えてみたい。

二音節第一類動詞連用形＋テ　例、ナ|イテ
二音節第二類動詞連用形＋テ　例、カ|イテ

この二つの場合、音便が定着して、特殊音が前の音節と同じ高さになると

ナ|イテ
カイテ

になったものと考えられる。シラビーム方言の一つの代表である、鹿児島方言の二型アクセントでは、第二類の方がカイテ|となっている。それは、カ|イテの「イ」が「カ」と同じ高さになる時、「イ」に存した高さが後の「テ」に残存することとなったものと解される。

ナ|イテ
カイテ

ここに「ナイ」「カイ」はいずれも一音節であって、

●▽　ナ|イテ・ネテ
○▼　カイテ|・ケテ|

の型ととらえられる。ここで、注目されることは、特殊音が前の音節と同じ高さになったということであって、京阪式アクセントにおいて高くはじまっていた語は、変化することなく高くはじまり、低くはじまっていた語は変化なく低くはじまっているということである。

㈡三音節動詞連用形＋テの音便とアクセント

平安・鎌倉時代の三音節動詞連用形＋テのアクセントは、

第一類　アタッテ
第二類　ウゴイテ
第三類　アルイテ

であった。音便が定着すると、シラビーム方言では、特殊音が前の音節と一体となり同じ高さとなったから、第二類は、「イ」が「ゴ」と同じ低となり、「イ」にあった高が「テ」に移って、

ウゴイテ　○○▼

となった。第三類は「イ」が前の音節と一体となって同じく高となったから、

アルイテ　○●▽

となった。第一類には変化はなかったと見られる。

アタッテ　●●▽

㈢二音節形容詞終止連体形の音便とアクセント

平安・鎌倉時代の京阪式アクセントは、○◓であった。シラビーム方言では下降調を維持できなくなったから、

○◓→○●

に変わった。こうして出来上がった「ヨイ（良）」「ナイ（無）」の形も、特殊音を含んだ形であるから、一体となって一音節となり、高さが同じになってもよいはずであるが、鹿児島方言では、この場合、例外的に特殊音が一音節として独立した。[注102] この場合特殊音が一音節として独立したのは、活用語の語幹を維持するためであった。二音節動詞連用形＋テの場合には独立していないのに、形容詞の終止連体形の場合に独立しているのは、前者が、「ナイテ」「カイテ」などのように語中に立つために、シラビーム化が許されたのに対して、後者の場合は、終止連体形であって、文末に独立して用いられる形であるために、シラビーム化が起きなかったものと考えられる。

㈣三音節形容詞終止連体形の音節のアクセント

三音節形容詞終止連体形の、平安・鎌倉時代における京阪式アクセントの形は次のようであった。

第一類　●●○
第二類　○○◓

第一類に変化は起きなかった。第二類の下降調はシラビーム方言では維持できず、○○●に変わった。この場合も、「シロイ」に例をとると「ロイ」のところが一音節となる可能性をもっていたが、二音節形容詞のところで見たように、鹿児島方言では、語幹を保持するために特殊音が一音節として独立して、○○●となった。[注103] 同じ二型アクセントでも、よりシラビーム性を強めている鹿児島県吹上町方言では、この形も○●（シロイ）の形にしているようである。[注104]

㈤四音節形容詞終止連体形の音便とアクセント

四音節形容詞終止連体形の、平安・鎌倉時代における京阪式アクセントの形は次のようであった。

第一類　●●●○
第二類　○○○◓

第一類に変化は起きなかった。第二類は、既に見た二音節語・三音節語の場合と同様に、○○○●に転じたと見られる。

㈥まとめ

以上をまとめると、音便の定着によって、特殊音が独立しえなくなったことによって、鹿児島方言においては、問題の語群は表31のようなアクセントに変わったものと推定される。

（表31）シラビーム方言におけるアクセント変化

類	二音節動詞連用形＋テ	三音節動詞連用形＋テ	二音節形容詞終止連体形	三音節形容詞終止連体形	四音節形容詞終止連体形
第一類	●▽	●●▽		●●○	●●●○
第二類	○▼	○○▼	○●	○○●	○○○●
第三類		○●▽			

二、他の活用形のアクセントに与えた影響

東京式アクセントへの分離の場合、動詞連用形と形容詞終止連体形に生じた変化は、他の活用形に影響を与えたものを考えられた。シラビーム方言の場合も、他の活用形に影響を与えたものと考えられる。今、調

（表32）平安・鎌倉時代における他の活用形のアクセント

類	二音節動詞 終止連体形	三音節動詞 終止連体形	二音節形容詞 連用形	三音節形容詞 連用形	四音節形容詞 連用形
第一類	●●	●●●		●●○	●●●○
第二類	○●	○○●	◐○	○●○	○○●○
第三類		○●●			

査データのそろっている動詞の終止連体形と形容詞の連用形について見てみたい。それぞれの、平安・鎌倉時代における京阪式アクセントの形は表32のようであった。

この表において、シラビーム方言では、二音節形容詞に存した上昇調は存在しえなくなって、○●になっていたと考えられる。

このような状態にあるところに、先の表31に見るような

●○　●●○　●●●○
○●　○○●　○○○●

という体系が整っていくと、次の変化が生じたのではないかと考えられる。

二音節動詞終止連体形
第一類　●●→●○
三音節形容詞連用形
第二類　○●○→○○●

三音節動詞終止連体形
●●●→●●○
四音節形容詞連用形
○○●○→○○○●

こうして二型アクセントの原形が次第に出来ていったものと推定される。

ここに三音節第三類動詞のアクセントのみが孤立する形となった。

連用形＋テ　○●▽
終止連体形　○●●

そのためこの形は、低ではじまる○○▼・○○●の型に合流することになったのではないか。

三、二音節名詞のアクセントに与えた影響

右のようにアクセント体系が変じていくと、他の語種にも影響は及んでいったと考えられる。平安・鎌倉時代における京阪式アクセントの二音節名詞のアクセントは次のようであった。

第一類　●●
第二類　●○
第三類　○○
第四類　○●
第五類　○◐

第一類名詞のアクセントは、二音節動詞終止連体形に生じた●●→●○の変化にひかれ、また、新しく姿を見せてきたアクセント体系にひかれて、

●●→●○

に変化したものと推定される。

第五類名詞は、シラビーム方言では下降調を維持できず、

○◐→○●

に変わった。

そうして第三類名詞の○○のみが孤立する形となり、低ではじまる語であることを維持しつつ、

○○→○●

と転じた。こうして、二音節名詞も二型に統合されることになった。

四、一音節名詞のアクセントに与えた影響

平安・鎌倉時代における京阪式アクセントの一音節名詞のアクセントは次のようであった。

●・●●
◓・●○
○・○○

ここに、二音節名詞に起きたのと同じ変化が起き、それが短音化したものが現代の二型アクセントの形であると見られる。

●●→●○→●（●▽）
●○→　→●（●▽）
○○→○●→○（○▼）

五、シラビーム二型アクセントの確立

右のようにして、表33のようなアクセント体系が出来上がったものと推定される。そして、このA・B二つの型による、いわゆる二型アクセント体系が他の語種にも広がっていったものと推定される。(注105)

そして、右のAの形に、語頭ならびにそれに続く高の音節に、労力の節約のために低下が起きたのが、現代の鹿児島方言に見られる形なのであろう。

A　●○　○●○　○○●○

Bの型と区別するということでは、●●、●●●と高い音節を連続させる必要はなかったし、統制的機能を果たすということから見ても、●●、●●●と高い音節を連続させる必要がなかったからである。

このようにして出来たA・B二つの型によるいわゆる二型アクセント体系が他の語種にも広がっていったものと推定される。

鹿児島方言の二型アクセントと都城方言などの一型アクセントの成立に、形容詞と動詞のアクセントの二類がかかわったらしいことについては早く平山輝男博士が論じられたとろであこる。(注106) ただ、博士は、統合の具体的経路については論じておられず、また、その出自を、早い論文では京阪式アクセントに求められ、動詞のアクセントに平安時代末期のそれに一致する点があることに注目されながら、(注107)後、東京式アクセントに出自を求められた。(注108)(注109)

(表33) 二型アクセント体系の原型

	A	B
二音節動詞連用形＋テ	●○	○●
二音節形容詞終止連体形		
二音節動詞終止連体形		
二音節形容詞連用形		
二音節名詞		
三音節動詞連用形＋テ	●●○	○○●
三音節形容詞終止連体形		
三音節動詞終止連体形		
三音節形容詞連用形		
四音節動詞形容詞終止連体形	●●●○	○○○●
四音節形容詞連用形		

第三節　シラビーム一型アクセントの発生(注110)

都城方言や志布志方言で行われている一型アクセントが鹿児島方言で行われている二型アクセントから、A類がB類に合流して生じたものであることは、早く平山輝男博士が指摘された通りである。(注111)

○●　○○●　○○○●

A・B二つの型を区別しても大きな意味はなく、統制的機能を果たすということに徹した場合には、Bの型よりもAの型の方が有効な型であったからであると見られる。

第三章　おわりに

以上のように見てくると、現代日本語のアクセントは次の三つのタイプに分かれることになる。

- モーラ方言アクセント（京阪式アクセント）
- シラビーム性モーラ方言アクセント（東京式アクセント）
- シラビーム方言アクセント

そして、この三方言は、表34の指標によってとらえることができるものと考えられる。

つきつめと言えば、日本語のアクセントを大きく三つの体系に分離させたのは音便であったということになる。

（表34）三方言アクセント体系弁別の指標

	モーラ方言	シラビーム性モーラ方言	シラビーム方言（二型）
二音節第二類動詞連用形＋テ	カイテ その他	カイテ	カイテ
二音節第一類動詞連用形＋テ	サイテ	サイテ その他	サイテ
三音節第二類動詞連用形＋テ	ウゴイテ その他	ウゴイテ	ウゴイテ
二音節形容詞終止形	ヨイ	ヨイ	ヨイ
三音節形容詞終止形	シロイ その他	シロイ	シロイ シロイ
四音節形容詞終止形	ミジカイ その他	ミジカイ	ミジカイ ミジカイ

本稿の考察が正しければ、従来、名詞のアクセントを中心に考察が進められ、京阪式アクセントと東京式アクセントとの中間的なアクセントなどととらえられてきたアクセント、例えば、金沢市アクセントや愛媛県北西部のアクセントなどは、右の指標によって検討されなくてはならないが、そのことについては別稿を用意したい。

また、型の数を基準にいろいろなアクセントが一型アクセントと呼ばれてきたが、それは、シラビーム一型アクセントと非シラビーム一型アクセントとに分けられなくてはならない。一型アクセントにさまざまな成立のものがあることについては、平山博士の早く指摘されているところである。（注12）

本稿で残したアクセントに曖昧アクセントがある。これが、平板一型・頭高一型と呼ばれてきたアクセントとともに、東京式アクセントと京阪式アクセントとの、または、東京式アクセントとシラビーム方言アクセントとの、接触地帯にあって、アクセントが混乱したものであるのか、尻上がり一型からの変化形であるのかについて検討しなくてはならない。

ところで、三つの大きなアクセント体系を分離させることとなった特殊音節が単独でアクセントの山を担える方言と担えない方言、特殊音が一音節として独立する方言と独立しえない方言、といった違いはどのようにして生じたのか。そのことについては別稿を用意したい。

注

（注1）拙著『室町時代語を通して見た日本語音韻史』（武蔵野書院　一九九三・六）

（注2）ほかに、金田一春彦・芳賀綏「アクセントから見た能登――その分布と変化――」（九学会連合能登調査委員会『能登　自然・文化・社会』平凡社　一九五五・一二）もある。

（注3）前掲金田一①論文が指摘しているように、服部博士は、早くは、「アクセントと方言」（国語科学講座Ⅶ　明治書院　一九三三・八）「原始日本語の二音節名詞のアクセント」（方言7・6　一九三七・七）において、京阪式アクセントが東京式アクセントよりも古いという考え方に傾いていると述べられており、後に提出される金田一博士の説に近い考え方をされていた。

（注4）西部の人と東部の人との気質・生活習慣等の違いに注目する論文に、都竹通年雄「東西両方言の違いはどうしてできたか」（言語生活　一九七一・六）徳川宗賢『日本語の世界8言葉・西と東』（中央公論社　一九八一・一〇）があるが、基層語の問題にまでは言及していないので、取り上げなかった。

（注5）注1拙論。

（注6）上野「書評・紹介　金田一春彦著『国語アクセントの史的研究　原理と方法』」　塙書房　一九七四」（言語研究69　一九七六・三）

（注7）上野「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（2）」（日本学士院紀要42・1　一九八七・二）

（注8）上野「日本語のアクセント」（講座日本語と日本語教育2　一九八九・五）

（注9）このほかに、サ行四段活用動詞の音便について、西部方言イ音便、東部方言原形という違いがあるとされることが少なくないが、国立国語研究所『方言文法全国地図2』（大蔵省印刷局　一九九一・三）によれば、東西間の違いではないと認められるので取り上げないこととする。

（注10）次の諸論文がその立場に立っている。

大野　晋『日本語の起源』（岩波新書　一九五七・九）

柴田　武『日本の方言』（岩波新書　一九五八・四）

楳垣　実「音韻」（『方言学講座1』　東京堂　一九六一・一）

野元菊雄「東日本の方言」（『方言学概説』　武蔵野書院　一九六二・二）

亀井孝他『日本語の歴史4移りゆく古代語』（平凡社　一九六四・七）

金田一春彦「東国方言の歴史を考える」（国語学69　一九六七・六）

外山映次「ハ行四段活用動詞音便形について――洞門抄物の場合――」（近代語研究2　一九六八・一）

平山輝男『日本の方言』（講談社　一九六八・九）

馬瀬良雄「東西両方言の対立」（前掲）

佐藤亮一「方言をめぐる20のQ&A　Q16ことばの東西対立はなぜできたのか」（国文学　解釈と教材の研究　一九八四・五）

上村幸雄「日本語方言の概説」（講座方言学1　国書刊行会　一九八六・五）

藤原与一『日本語方言分派論』（武蔵野書院　一九九〇・二）

安部清哉「語の「動的運動」と音韻上の「静的作用」とによる方言分布の二重構造の一側面」　一九九三年国語学会春季大会（京都女子大学）

安部清哉「古い方言／新しい方言」（言語　一九九三・九）ただし、安部氏は東西対立が新しいものである可能性も考慮されている。

（注11）注1拙論。

（注12）＋－の評定のしかたについてことわっておきたい。例えば、ハ行四段活用動詞に促音便が生じているということは、naraΦite > naratte のような変化が生じたということで、母音が脱落しているわけであるから、母音劣位と呼ぶこともできるわけであるが、従来なされている、母音優位、子音優位という評定のしかたにそって、子音優位と評定した。しかし、劣位と評定しなくてはならないケースもあり、その場合は－を与えた。

（注13）有坂秀世『上代音韻攷』（三省堂　一九五五・七）六〇三頁。

（注14）オ段開長音形は narɔɔte であったと見られるから、厳密には語幹の動揺を生じていることになるが、soroote と区別ができるという点で許されていたものと考えられる。

（注15）添田建治郎氏は、ハ行動詞の音便に促音便とともにウ音便を併用している方言でオ段長音の開合の区別を残す方言として、新潟県中越・南越とその周辺ほか、佐渡地方、愛知県三河地方の一部、埼玉県東部地方の一部があることを教示され、ハ行動詞のウ音便衰退の原因をオ段長音の開合の混同に求める筆者の解釈を支持された。そのことは、国語学会平成五年度秋季大会のテーマ別研究発表会総括報告（一〇月三一日）でも同氏によって述べられた。

（注16）例えば、仲宗根政善『今帰仁方言辞典』（角川書店　一九八三・二）など参照。

（注17）この「ダ」と「ヂャ」の新古についての筆者の理論的推定は、文献資料から得られる用例と矛盾しない。古い資料に口語資料が乏しいため、「ダ」「ヂャ」の用例が得られにくく、成立の先後を定めがたいが、今日知られている「ダ」の最古例は東部方言資料の『古今全抄』（一三七五年撰）の例であり、「ヂャ」の最古例は、西部方言資料、清原良賢講かと推定される『論語聴塵』（一四二〇以前

写）の例である。

注1拙著九六二頁において、良賢講『論語聴塵』に「ヂャ」も「ダ」も見えないとしたのは誤りであった。誤りを指摘された出雲朝子氏に謝意を表する。

（注18）沖縄方言には完了の助動詞「タ」が「チャ」の形で現われる場合がある。

カチャン　（書いた）
シチャン　（知った）

しかし、完了の「タ」は次のように「タ」「ダ」の形であるのが普通である。

トゥタン　（取った）
コータン　（買った）
ユダン　（読んだ）

これを見ると、先の「チャ」の形は、

カイタン＞カチャン
シッタン＞シタン＞シチャン

の形を経て、「タ」の前のi母音が原因で口蓋化した形であろう。このことについては、高橋俊三氏と沖縄国際大学文学部国文学科の学生諸君の御教示を得た。

（注19）沖縄方言に「ヤン」の形があり、これが、関西方言の「ヤ」と同源のものであったら、複雑な分布をすることとなるが、沖縄方言の「ヤン」は「ヂャ」とは別源のものではないかと推定される。高橋俊三氏も「ヂャ」とは別源のものではないかと疑っておられる。

（注20）秋永一枝『古今和歌集声点本の研究　研究篇下』（校倉書房　一九九一・一）二〇二頁によれば、アクセントから見ると「ズ」の語源説「ニス」は当たらず、両者は別系統の語ではないかという。

（注21）橋本進吉『国語学概論』（橋本進吉博士著作集第一冊　岩波書店　一九四六・一二）六三頁ほか。

（注22）服部四郎「日本語はどこから来たか？」（『解釈と鑑賞　別冊現代のエスプリ　日本国家の成立を探る』　一九七一・三）は、「日本民族が人種的に北方系、南方系等々の雑種であることが科学的に疑いなくなっても、日本語も系統的に「雑種的」であるに違いないと考える必要はない。」（四二頁）と述べている。

（注23）なお、馬淵説については、桜井茂治「原始日本語のアクセントと方言――その方法論をめぐって――」（『現代方言学の課題3史的研究篇』　明治書院　一九八四・六）がアクセントの具体が説明されていないことを批判している。

（注24）注22服部論文四四頁。

（注25）「原始日本語のアクセント」六〇頁。

（注26）以下の要約は、金田一「日本祖語のアクセントと琉球方言」（SOPHIA LINGUISTICA XVII　一九八四）に導かれたものである。

（注27）注26金田一論文。

（注28）後に扱う。

（注29）注26論文。ただし、金田一「味噌より新しく茶より古い」（前掲八八頁）では、琉球方言のアクセントの出自についての考えは暫く撤回するとされた。

（注30）平山輝男「最近の琉球方言研究」（沖縄文化研究一一　一九八五・三）

（注31）橋本万太郎「アジアの中の日本語」（言語生活　一九七八・七）二二頁は、この説を支持するが、その論拠をあげていない。

（注32）金田一春彦博士は、「味噌より新しく茶より古い」（九八頁）において、「本誌二月号のラムゼイ氏の発表は問題が多すぎて従えない」とされている。また、この説に対する批判として、早田輝洋「平安末期京畿方言の声点とその音価――ラムゼイ説の帰結する所――」（九州大学言語学研究所報告1　一九八〇・三）がある。

（注33）高山倫明「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」（語文研究51　一九八一・六）同「書紀歌謡二音節名詞の表記について――アクセント語類との関連をめぐって――」（文献探求12　一九八三・七）同「日本書紀の音仮名とその原音声調について――上代アクセントとの相関性を考える――」（『金田一春彦博士古稀記念論文集1』三省堂　一九八三・一二）

（注34）金田一春彦「日本四声古義」（『国語アクセント論叢』　法政大学出版局　一九五一・一二）

（注35）金田一博士、奥村三雄博士は、東西両アクセント分離の時期を次頁表のように推定されている。

（注36）この考え方のうち、(11)の○●○＞○○●＞●○●＞●○○については、早く服部四郎「アクセントと方言」（前掲）六二頁に示されている。

（注37）『日本語の歴史5』は御浜町とする。これは、一九五八年に阿田和町、市木尾呂志村、神志山村が合併して、御浜町になったため。なお、阿田和町のこの事実に関しては、山名邦男「阿田和アクセントと問題点」（音声の研究17　一九七六・三）上野「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」（前掲）四三頁に

（表）東西アクセント分離の時期（金田一博士説）

論文	時期	根拠
①東西アクセントの違いができるまで（一九五四・八）	平安時代末期以前（第六期）から鎌倉時代初期（第八期）	ヨーク・モーシ・ミーテ類の東西アクセントより
②日本語の歴史5（一九六四・一一）	平安時代初期から鎌倉時代にかけて	ヨーク・モーシ・ミーテ類の東西アクセントより
	室町・江戸時代（みかけのアクセント）	石川県羽咋方言式へ変化したと考えて
	一四五五年より早い	毛端私珍抄
③味噌より新しく茶より古い（一九八〇・四）	味噌の普及より新しく茶の普及より古い	漢語の方言アクセントより
	平安時代初期以後	

（表）東西アクセント分離の時期（奥村博士説）

論文	時期	根拠
①東西アクセント分離の時期（国語国文　一九五五・一二）	漢語が国語内に入りこんで以後、西洋語が国語内に浸透する迄の間（平安時代以後中世末期まで）	漢語と西洋語の方言アクセントから
	平安末期～院政期頃	ヨーク・見テの方言アクセントから
②漢語のアクセント（国語国文　一九六一・一）	漢語が我が国に入って来た以後（平安朝以後）	漢語の方言アクセントから
③古代の音韻（講座国語史2　大修館　一九七二・九）	漢語が話し言葉の中に入りこんだ頃以降（平安朝以降）	漢語の方言アクセントから
④諸方言アクセント分派の時期（方言研究叢書3　三弥井書店　一九七四・九）	ヨーク・モーシは鎌倉初期以前の形から分派	

も扱われている。

（注38）ほかに、S・R・ラムゼイ「日本語のアクセントの歴史的変化」（前掲）があるが、この批判に対する金田一博士の評価は注32に引いたところである。

（注39）金田一「方言と方言学」（『方言学概説』武蔵野書院　一九六二・一一）。アクセント変化の方向については、早く博士に「語調変化の法則の探求」（Toyōgo Kenkyū 3　一九四七・八）がある。

（注40）金田一「熊野灘沿岸方言のアクセント」（『日本の方言』一二七頁）には、

私は以前、〝東西両アクセントの違いができるまで〟という論文（P. 49）を書いた時に、乙種方言における●○型、●○○型は、○○型、○○○型の第1拍が段々高くなってできたものだと推定した。これは、石川県七尾市近傍の方言に、丁寧に発音すれば、○○調、○○○調になるが、無造作な発言では◉○調、◉○○調に実現する例が見いだされたからであった。あれは今にして思うと、その時は調査しそこなったが、直前に「この」というような語でも付けた場合には、もっとはっきり●○○調に実現するという例が見つかったかもしれなかったのだ。

と述べられている。その後発表された、能登半島のアクセントを調査した論文、山口幸洋「能登のアクセント」（前掲）川本栄一郎「能登島の老・若における二音節名詞第四・五類のアクセント」（『密田良二教授退官記念論集』一九六九・三）にその問題は扱われていないようである。

（注41）東西アクセントの分布について、外に分布する東京式アクセントの方を古いと見る見方は、早く服部博士が示しておられる。

本州方言内に於けるアクセントの分布状態は、むしろ乙方言のアクセントを古いと考へるに有利の様ではある。（アクセントと方言六一頁）

しかし、そのように推定する根拠は示されていない。

（注42）語詞の場合も、伝播によってのみ分布するものではないことを強調しておきたい。文化の中心の人のみが語を造り出す力をそなえており、地方の人々はそれを受けとり、伝える役割りしか果たしていなかったとは考えられないからである。文化の中心の人たちほどではなかったかも知れないけれども、地方は地方で造語力を発揮していたものと考えられる。『方言辞典』に記録されている厖大な量の方言語詞はそれを語っている。

（注43）松本修『全国アホ・バカ分布考』（太田出版　一九九三・八）は、そのあ

とがきで、アホ・バカ語詞の周圏分布の上に立って、東西アクセントの場合も、外に分布する東京式アクセントが古いものと考えようとしている。このような考え方は広く行われているところである。

（注44）こう説明して問題がすべて解決したわけではない。先に見たように、外の方言では、古いハ行動詞の促音便や形容詞の原形や断定の助動詞「ダ」や打消の助動詞の未然形「ナ」を文化の中心の内の方言よりも遅くまで併用していたものと推定された。一方、ti・di の破擦音化は外の方言に早く起きたものと推定された。古い形から新しい形への交替が文化の中心で速く進み、地方で遅れるのは、文化の中心地の言語生活の方が活性化していたためではないかと推定されるが、それならば ti・di の破擦音化も言語生活の活性化している文化の中心で早く起きていてよいことになる。逆に、金田一博士が考えられたように、地方においては拘束力が弱いために音韻変化などが早く生起し得たと考えると、古い形から新しい形への交替も地方で速く進んでよいことになる。なぜ内と外とで右に見たような違いが生じるのかはいまだうまく説明できない問題として残る。

（注45）金田一「東西両アクセントの違いができるまで」『日本語の歴史5』一四四頁。

（注46）連用形第一種のアクセントの型が○◓であったらしいことは、早く南不二男「名義抄時代の京都方言に於ける二字四段活用動詞のアクセント」（国語学27　一九五六・一二）が想定したところである。金田一博士は、『四座講式の研究』で、

　現在の京都方言では、このうち連用形第一種が生きて使われており、これは○●型ではなく、○◓（原文○◒は誤植か）型である。南不二男氏は主として他の種類の動詞のアクセントや、後世の諸方言のアクセントをもとにして、［B］の類の動詞の連用形は、第一種・第二種ともに、平安朝ごろには○◓型であったろうという推定を立てられた。（三六七頁）

と述べられたが、南不二男氏が扱われた連用形の二種は、

　連用形(1)　中止、或いは動詞ハ、モに続くもの。

　連用形(2)　名詞的用法。

で、金田一博士の第一種、第二種とは少し異なる。

（注47）金田一『四座講式の研究』（四五三頁）は、

　由留比弓（図書寮本類聚名義抄）

の声点を（平平平軽上）と認定し、○○◓であったことを指摘している。

（注48）金田一『四座講式の研究』四五三頁注（5）に見えるように、和歌山県の日高郡龍神村や田辺市、および高知市の方言などでは、カイテ（書）・ヨンデ（読）が○●▽の型で行われることがある。後に見るように助詞「テ」は本来高くつく語であるから、連用形第二種のアクセントが○●であったとするならば、○●▼の型になるはずで、○●▽の型が存するということは、連用形第二種のアクセントが○◓であったと考えてうまく説明できる。

（注49）助詞の部分を▼に改めた。以下同。

（注50）拙稿「近代語「てある」」（愛媛国文と教育19　一九八七・一二）

（注51）鈴木豊編『日本書紀神代巻諸本声点付語彙索引』（アクセント史資料研究会　一九八八・三）二四頁。

（注52）上野和昭編『御巫本日本書紀私記声点付和訓索引』（アクセント史資料研究会　一九八四・四）

（注53）山口佳紀「古代日本語における語頭子音の脱落」（国語学98　一九七四・九、『古代日本語文法の成立の研究』（有精堂　一九八五・一）に収める）大野晋他編『岩波古語辞典』（一九七四・一二）

（注54）望月郁子『類聚名義抄四種声点付和訓集成』（笠間書院　一九七四・三）による。

（注55）金田一『四座講式の研究』三六八頁。

（注56）この考え方は、服部四郎「アクセントと方言」（前掲）六三頁注14で、近畿方言の話しことばで、カイタ|、ノンダ|、ヨンダ|となる型が、文章語で「カキタリ、ノミタリ、ヨミタリ」となっていることに注目され、山が次の音節へずれたとされたことに学んだものである。ただし、金田一『国語アクセントの史的研究』一一四頁には、文語を読む時のアクセントが必ずしも古いアクセントをそのままとどめているものではない例が指摘されている。

（注57）ヤ行・ワ行・ザ行・ダ行に活用する四段活用動詞は存しなかった。

（注58）金田一春彦「コトバの旋律」（国語学5　一九五一・二）四〇頁に、次のように見る。

　つめる音節、はねる音節、引く音節、連母音のあとの音節などをそこだけ高く発音することは不自然である。

これは東京方言の特徴を指摘されたものであろう。桜井茂治『日本語旋律史論』

（国立音楽大学　一九八九・四　九頁）は、この金田一説に注目している。平山輝男『日本の方言』（前掲）三九頁も東京方言、九州方言の特徴として同じ事実を指摘する。

（注59）金田一春彦「東西両アクセント発生の問題点」（前掲）一八頁。同『国語アクセントの史的研究』（塙書房　一九七四・三）一九〇・一九二頁指摘。奥村三雄「近代の音韻」（『講座国語史2音韻史・文字史』　大修館　一九七二・九）一六六頁、同「諸方言アクセント分派の時期」（方言研究叢書3　三弥井書店　一九七四・九）七頁。

（注60）服部四郎「アクセントと方言」四三頁。金田一「コトバの旋律」（注58）四〇頁。同「東西両アクセント発生の問題点」（前掲）一二頁。

（注61）国語学会平成5年度春季大会における安部清哉氏の発表に対して、金田一春彦博士が、西部方言の特徴の一つとしてこのことを指摘された。

（注62）上野善道「地方アクセントの研究のために」（加藤正信編『新しい方言研究』　至文堂　一九八四・五）金田一春彦「二つのアクセント辞典を」（放送文化28・12　一九七三・一二）秋永一枝『明解日本語アクセント辞典第二版』（三省堂　一九八一・四）Samuel E. Martin "The Japanese Language through Time" YALE UNIVERSITY PRESS 一九八七。

（注63）愛媛大学の同僚で、東京都出身の近藤重明氏（六歳まで中央区以後二〇代まで千葉県市川市居住）、松野尾裕氏（二〇代まで杉並区居住）の御教示を得た。「集積度」のアクセントは前者が松野尾裕氏による、後者が近藤重明氏による形。

（注64）この変化は早く服部四郎「アクセントと方言」六一頁に示されている。

（注65）金田一「東西両アクセント発生の問題点」一八頁。

（注66）この説明は、湯沢幸吉郎『江戸言葉の研究』（明治書院　一九五四・四）二四一頁の考え方に従ったものか。

（注67）「国語史上の一画期」（『日本文学講座』　新潮社　一九二八・一）一〇九頁。

（注68）文部省国語調査委員会『口語法別記』（大日本図書株式会社　一九一七・四）二五頁。

（注69）鈴木博「周易抄の国語学的研究」（清文堂　一九七二・三）二二二頁指摘。

（注70）服部「アクセントと方言」五四頁。都竹通年雄「動詞の連用形とアクセント」（『国語アクセント論叢』）

（注71）なお、このように考えた場合、○●▽の形は、特殊音節が単独でアクセントの山を担う形となるから、少なくとも原形併用期以前に存した形で、恐らく第二類の○◓▽とのニャミスを避けて、また、アクセントの山が後へすべって、早く○●▼の形を生み出していたのではないかと見られる。ただ、十津川方言などの○●▽の形を古い形の残ったものと考えると、かなり後まで○●▽の形も行われていたと考えた方がよく、表13にはその点を考慮して、原形・音便併用期にも○●▽の形を残した。

（注72）金田一⑧論文は、近藤政美「愛知県半田市におけるサ行四段式活用動詞のイ音便現象とはじめの二音節を高く発音する［●●○］型アクセントについて」（名古屋大学国語国文学17　一九六五・一一）を引く。

（注73）ただし、「動詞で連用形の方が終止形や連体形に類推するというのは、普通ではない」（金田一「愛知県アクセントの系譜」一一頁）とすれば、問題がある。金田一博士は、二音節第一類動詞連用形＋テの●●▽の形を、「愛知県アクセントの系譜」の中で、次のように位置づけておられる。

「咲いた」「泣いた」が●○○型であるのは、●○○型から《滝の後退》で○●○型に変ったのちに、第二拍がイで独立性の弱いところから、また●○○型に復帰したものと見られる。知多地区の方言でこれらが●●○型であるのは、その中間の姿を示しているもので、この意味では、この方言は内輪式方言の方に繰り入れた方がよいことになる。四国の愛媛県・高知県西南部の方言も、多くの点で中輪式方言の性質をもつが、この点だけは内輪式方言と同じである。「泣いて」「咲いて」のナイ・サイの部分が一拍にならずに通して来た方言なのであろう。山口県周防大島の方言では、「咲いた」「泣いた」がサイタ（モノ）　ナイタ（モノ）となり、そのあとに滝が現れる。一時代前に　サイ・ナイが一拍であって、そのために　サイタ・ナイタの滝が次の拍のあとにすべったその状態を保った姿であろう。（一四頁）

（注74）なお、このように考えた場合、●●▽の形は、音便が生じる前の原形の時代から起きていたものと考えなくてはならない。というのは、音便が生起し、第二音節に特殊音節が立つようになると、それは下りアクセント核を担いにくいという性格を現わしてくるようになったと考えられるからである。原形が併用されている間は、特殊音節が下りアクセント核を担う●●▽の型も維持されていたが、それでも、労力の節約ということもあいまって、この形は、アクセントの山をす

べらせて○●▼の形に変化していったものと考えなくてはならない。

(注75) 金田一『四座講式の研究』三六九頁。

(注76) 秋永一枝「古今集声点本における一・二拍動詞のアクセント——古今集動詞のアクセント　上——」。なお、金田一『四座講式の研究』(三七三頁)は●●とする。これは、二拍の動詞の場合に、○◓と推定されながら、一応○●としておくとされたのに対応するものであろう。

(注77) 金田一『四座講式の研究』三八八頁。

(注78)『日本語の歴史5』一三一頁。

(注79) 川上蓁「いわゆる低低型から高高低型への変化」(声声学協会会報118　一九六五・四)

(注80) 金田一『四座講式の研究』四〇五頁以下。

(注81) 例えば『明解日本語アクセント辞典』

(注82)『日本語の歴史5』一一三頁。

(注83) 服部「アクセントと方言」五六頁以下。また、「原始日本語の二音節名詞のアクセント」では、「私は、「同一の型(音韻)は同一条件の下には、推移するとすれば同一方向へ推移する」との一般に認められた仮説の上に立つて居る。」(五六頁)と述べている。

(注84) 服部「アクセントと方言」六三頁。

(注85)『日本語の歴史5』により、助詞つきの形は、鎌倉時代は金田一『四座講式の研究』三四五頁、室町時代は桜井『中世京都アクセントの史的研究』一一八六頁。現代京都は平山輝男『全国アクセント辞典』三〇頁以下を参勘して示した。

(注86) 金田一「ほうげん　方言」(『世界大百科事典26』　平凡社　一九五八・七)

(注87) 金田一「方言と方言学」『方言学概説』四七頁。

(注88) ○◓も○●の範疇内のものと意識されていたと見られるし、第二類動詞連用形+テそのものが○◓▽→○●▽の変化であったから、右の変化を生じたとも考えられるし、あるいは、東京式アクセント地域では、第五類のアクセントが一般に○●になっており、特定の場合にのみ○◓の形を維持していたということであったかも知れず、また、すべて○●になっていたかも知れない。因に、京阪式アクセントの一つ、愛媛県松山方言では、疑問文の時、例えば、「コンナニ　アメ　フッタン」(このように雨降ったの)の場合に、下降調をとどめている。

(注89) 金田一『国語アクセントの史的研究』六四頁以下。

(注90) 金田一『四座講式の研究』三三八頁。なお、南北朝時代には少なくとも単独では●○に変わっていた。

(注91) 金田一『四座講式の研究』三四五頁。桜井『中世京都アクセントの史的研究』一一八七頁。

(注92) 二音節名詞における東京式アクセントの分離についての考察を一応終わらせるについて、右に論じたところに直接かかわるところで、残した問題について触れておきたい。それは、二音節第一類の動詞のアクセントが、●○▽(咲いて)から○●▼への変化を起こさず、●○▽のままとどまっている方言についてである。金田一「愛知県アクセントの系譜」(前掲)二頁によると、東京式内輪方言では、そのようになっているようである。このことが、名詞のアクセントの変化に何らかの影響を与えている可能性もあり、東京式アクセント地域全体を視界に入れて検討すべきであったが、連用形+テの形のアクセントについての情報が不足のため、後考を期さざるを得ない。その後名古屋方言について調査してみると、「咲イテ」などイ音便は●○▽で実現したが、他の第一類動詞は○●▼であった。更にくわしく調査する機会をもちたい。

(注93) 注85に同じ。

(注94) 注85に同じ。

(注95) 金田一『国語アクセントの史的研究』六六頁、金田一語彙による。

(注96) 金田一『国語アクセントの史的研究』六六頁には、三音節第七類名詞について、

東京式諸方言では、カブト(ガ)型が多いが、外輪方言を除いてはカブト(ガ)型もまじる。

とある。この形がどのようにして生まれてきたのかは明らかではない。あるいは、他の型に合流したものか。『世界大百科事典』には右の型は見えない。

(注97)『国語学大辞典』アクセントの項(金田一博士説)一〇頁。

(注98) 同前。

(注99)「小麦」の室町時代の京阪式アクセントは、平安時代と江戸時代の形が●○○であるところから推定。

(注100) 秋永『明解日本語アクセント辞典第二版』付七頁。

(注101) 鹿児島方言のアクセントは、平山輝男『日本語音調の研究』(明治書院　一九五七・六)による。また、駒走昭二氏の御教示を得た。

(注102) 普通に用いられるのは「ヨカ」「ナカ」か。
(注103) ここでも、「アケ」「シリ」、「アカカ」「シロカ」が普通に行われる形か。
(注104) 上野善道「鹿児島県吹上町方言の複合名詞のアクセント（日本語音声C三班研究成果報告書『日本語イントネーションの実態と分析』（一九九二）。なお、現代鹿児島市方言も吹上町方言と同じになっているようであるとの御教示を駒走昭二氏より得た。平山博士の示された形を古い姿として位置づけて解釈したい。
(注105) この姿に近い二型アクセントが長崎方言に見られるものではないか。
(注106) 平山輝男『九州方言音調の研究』（学界之指針社　一九五一・八）同「日本語アクセントの統合――特に一型アクセントと曖昧アクセントを中心として――」（橋本博士還暦記念『国語学論集』（岩波書店　一九四四・一〇）同注101論文。
(注107) 注106第一番目の論文。
(注108) 注106第三番目の論文一七五頁・二八八頁。
(注109) 与那国方言のアクセントは、徳川宗賢「書評　平山輝男・中本正智著『琉球与那国方言の研究』（国語と国文学　一九六四・一二、『方言地理学の展開』（ひつじ書房　一九九三・一〇）に収める）上野「日本語のアクセント」によればシラビーム方言の三型アクセントであるという。この三型アクセントは、動詞の終止連体形が連用形＋ヲルにでる形で、第一類○●●と第二類○○○という形であったために、鹿児島方言に起きたような●●→●○の変化が起きず、それが原因となって二型になっていないのであろう。なお、隠岐方言の三型アクセントは東京式アクセントから生まれた三型アクセントと見られる。
(注110) 一型アクセントの成立に関する諸説のあらましは、桜井茂治「一型アクセントの成立について――日本語アクセント成立論(八)――」（研究紀要（国立音楽大学）26　一九九二・三）に整理されている。ここでも基層語関与説も行われていることがわかる。桜井氏も基層語関与説。
(注111) 注101論文一六七頁ほか。
(注112) 注101論文。

(付記) 当然参勘すべき論文を見落としていたり、参勘した論文についても誤解していたりすることがあるのではないかと恐れている。御寛恕の上御教示をお願いしたい。

（一九九四年十月十一日受理）